

全道中

No.94

2025.3

第
九
四
号



北海道中学校長会

No. 94

全道中

2025－3



運 営 方 針

- 1 本会の目的である「中学校長の職能の向上と、北海道の中学校教育の振興」を図り、校長相互の協力や信頼関係を一層深めるとともに、会の総力を結集して活動の充実と諸問題の解決に努める。
- 2 道教委をはじめ、全日中、四種校長会及び教頭会等の教育関係諸機関や、PTAをはじめとした諸団体との連携を深め、国及び道・市町村教委の動向を踏まえて適切な対応に努める。
- 3 校長としての学校経営力の向上を図り、道民の負託に応える中学校教育の創造に努める。

北海道
中学校長会

第97回 北海道中学校長会 総会・研修会 (4/26)



第75回 全日本中学校長会 総会・研修会 (5/23～5/24)



道教委と校長会、教頭会との意見交換会・各課懇談会（8/5）





地区別教育経営
研究大会



第65回 北海道中学校長会研究大会 十勝・帯広大会 (9/27～9/28)



第75回 全日本中学校長会研究協議会 岩手大会 (10/17～10/18)



巻頭言

◎「教育の 使命一筋」

北海道中学校長会会長 河村 克也 …… 8

潮流

◎中学校教育の一層の充実を願って…………… 北海道教育委員会教育長 中島 俊明 …… 10

◎「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて…………… 北海道立教育研究所所長 川端 香代子 …… 12

論考

◎心豊かで主体的に生きる力を育む学校経営

生徒の主体性の向上を目指して…………… 石狩市・石狩中 坂見 明信 …… 14

教員が同じ目標に向かう学校経営…………… 美深町・美深中 松浦 修司 …… 15

心組み…………… 函館市・港中 白川 卓 …… 16

「地域の教育力」を活かす学校経営…………… 弟子屈町・弟子屈中 小林 一博 …… 17

「生徒を育てる学校」から「生徒が育つ学校へ」…………… 釧路市・北中 富田 直樹 …… 18

◎心豊かで主体的に生きる力を育む生徒指導

組織的な生徒指導を目指して…………… 倶知安町・倶知安中 寺口 由之 …… 19

安全・安心な風土を創り出す学校を目指して…………… 妹背牛町・妹背牛中 渡邊 現 …… 20

日本型教育の特徴を生かした生徒指導…………… 室蘭市・桜蘭中 北野 雄介 …… 21

「ふるさとキャリア教育」による生徒指導…………… 別海町・野付中 吉光寺 勝己 …… 22

◎心豊かで主体的に生きる力を育む体験学習

楽しいと思える学校と地域の風土づくりに向けて…………… 旭川市・愛宕中 濱中 昌志 …… 23

地域との連携を生かした「とままえ科」…………… 苫前町・苫前中 佐藤 美智子 …… 24

地域素材・人材を活用した体験活動…………… 今金町・今金中 佐々木 弘司 …… 25

心豊かで主体的に生きる力を育む体験学習…………… 本別町・本別中 長尾 全雅 …… 26

特集

テーマ

◎学校教育の今日的な課題から、更なる学校力の向上を目指して、

ふるさとを愛し、共生・共和・共栄の心を育み、未来の社会に貢献できる人材育成を目指して、

異校種間の連携による取組、東川町・東川中 児玉賢一 28

思いやりのある豊かな心を育む教育活動の推進、八雲町・野田生中 植田資世 31

自己肯定感を高めるための開かれた教育課程、函館市・赤川中 辰巳哲治 34

豊かな心身の育成に向けて、

多様な取組を通して、

今年のだち

◎第六五回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会を終えて、研修部長 新津智哉 37

◎第七五回全日本中学校長会研究協議会大会岩手大会提言概要、旭川市・神居東中 坂東裕美 39

自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

地区校長の連携による組織的な取組の推進、留萌市・港南中 田谷典久 43

自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

子供たちのウェルビーイング向上の実現を目指す、

校長のマネジメント、

◎各部門の活動、令和六年度の活動及び次年度への展望、事務局長 吉本将樹 47

各部の活動（経営部・研修部・対策部・情報部）、

各地区の活動、

各地区の活動、

北海道風土記

まぼろしのブナノキタイ、黒松内町・黒松内中 牛来睦美 75

宗谷の北見、松前との繋がり、利尻町・利尻中 倉照彦 76

奥深い松前町、松前町・松前中 山岸申弥 77

アイヌ文化とニシパのまち、平取町・振内中 渡辺智 78

十勝清水町探訪、清水町・御影中 乙戸貴宏 79

花と味覚と歴史の町、厚岸町・厚岸中 蠣崎浩一 80

国後島を眼前にのぞむ、標津町・川北中 吉田昌弘 81

真駒内の昔と現在、札幌市・真駒内中 太田大輔 82

文
芸

健康であることと、労りの気持ちを実感	千歳市・富丘中	信定	学	83
燃える闘魂	積丹町・美国中	小原	明彦	83
生成AIに負けない!? 教師は将来無くない職業?	小樽市・潮見台中	佐川	聖明	84
「挨拶」って大事	上富良野町・上富良野中	澤田	克明	84
17音の願い	旭川市・永山南中	鈴木	洋之	85
自由を求め、不自由とたたかう	中頓別町・中頓別中	小林	清一	85
そばづくりで学んだこと	小平町・小平中	渡辺	圭一	86
久しぶりの中学校勤務で感じた小中高連携の難しさ	せたな町・瀬棚中	西山	恭史	86
採用校長として石別中学校に着任して	北斗市・石別中	高木	恭一	87
自分の「ルーツ」を探る	函館市・恵山中	宮前	由一	87
未来へ響け! 鐘のなるまち秩父別町!	秩父別町・秩父別中	内藤	竜治	88
ゲームチェンジャー	苫小牧市・明野中	井内	宏磨	88
新ひだか町での教育の四季	新ひだか町・静内第三中	飯塚	俊郎	89
制服かクラスTシャツか 三年生の挑戦	更別村・更別中央中	小室	彰人	89
魂宿る 道具の魅力	帯広市・帯広第七中	志田	直樹	90
教師の力	白糠町・白樺学園	須藤	光秋	90
花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものは	釧路市・美原中	中野	昌史	91
原風景	別海町・上春別中	丸山	宣雄	91
学校には言葉が多過ぎる	清里町・清里中	湯浅	啓介	92
札幌村と札幌黄と札幌中学校	札幌市・札幌中	竹内	義人	92

資
料

◎令和六年度 一般会計予算	幕別町・幕別中	久保睦則	93
◎令和六年度北海道中学校長会役員・理事			94
表紙に寄せて「広大な十勝平野」			95
編集後記			95
北海道中学校長会の歌			
題字 「全道中」	元北海道中学校長会会長	本間均	

巻頭言



教育の 使命一筋

北海道中学校長会 会長 河村 克也

「VUCA」の時代を迎え、少子化・人口減少や高齢化など、我が国の教育の課題が浮き彫りになり、様々な教育改革の動きが加速しています。学校における働き方改革の加速化、指導・運営体制の充実、教師の処遇改善については現在国において省庁をまたぐ検討が進められております。私たち校長の願いは、教職員が笑顔になり、その先にいる子供たちも笑顔になれる学校づくりを進めることです。全ての教師がやりがいと誇りをもって働ける環境を目指すことが子供の笑顔につながるものと考えているところです。

さて、この一年間、北海道中学校長会（道中）では「新たな時代へ 思いを一つに 堅実に歩む 道中」というキャッチフレーズを掲げ、「子供を主語にした学校づくり」を目指し、取組を進めてまいりました。全道五五七人の会員の皆様から御理解と御協力をいただき、堅実に歩みを進めることができました。ありがとうございます。

令和六年度も終わりを迎えるところですが、道中のこれまでの活動を三つの視点でまとめたいと思います。

一点目は私たち道中が大切にしてきた「子供を主語にする学校づくり」についてです。学校は生徒に基礎的な学力を身に付けさせるだけではなく、仲間との協力やコミュニケーションを通じて社会性や道徳心を養い自己実現を図る場です。また、特別活動や課外活動を通じてリーダーシップや協調性を身に付けたり、健康の増進や体力の向上を図ったりするなど多くの役割を担っています。すなわち、「知」「徳」「体」を一体として育み、生徒の総合的な成長を支え、持続可能な社会の創り手を育てる重要な場となっているのです。このことは、全日中新教育ビジョンにおいても日本における教育の根幹をなす不易の部分とされ、「未来を創る力」と位置付けられています。

「令和の日本型学校教育」の実現には、ICT環境を最大限に活用して個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を進め、学びの主導権を子供たちに委ねるなど、自らの学びを「自分事」として捉え、自発的に他者と関わりながら自分で学びを深めていくような学習活動を展開する必要があります。今年度、道中対策部が行った「GIGAスクール構想の取組と現状等に関する調査」では、協働的な学びに向けた活用が図られていることが明らかとなりましたが、調査からは一部の地域において、インターネットの環境整備が不十分であるためICTを活用した学びが十分に実現できていない状況も報告されています。学校間や地域間で学習環境の格差が生じないよう教育改革の当事者として必要な働き掛けを継続することが必要と考えます。

二点目は、道教委をはじめとした関係機関との連携についてです。道教委に対しては五月の要望書手交、八月の意見交換会、各課懇談会により関わりを大切にしながら活動を進めてまいりました。「北海道教育推進会議」「働き方改革促進会議」など、道教委主催の各種会議等にも参加し、校長の視座から様々な意見を述べてまいりました。さらに、PTA連合会や日本教育会、北海道教育振興会など多くの関係機関の会議に参加しながら道中として思いを発信してまいりました。

働き方改革促進会議においては、道中として国が定めている人的配置の正規教職員の数が、今の定数ではなかなか厳しい時代になってきていることや後補充の期限付の先生が見つからないことなどの現場の困り感を訴えてまいりました。さらに、教育DXに関連し電子決裁の導入や校務支援システムの今後の方向性についても意見を述べてきたところです。

教員の労働環境を改善するために、北海道では今年度から「学校における働き方改革『北海道アクション・プラン』」の第三期をスタートさせました。北海道の勤務実態としては、令和五年度に行った教育職員に係る時間外在校等時間の調査から、全ての学校種において令和四年度よりも時間外在校等時間が減少していること、中学校で四月及び六月に平均時間外在校時間が四五時間を超過していること、職種別の比較においては、教頭及び主幹教諭が他の職種に比べ平均在校等時間が長い傾向にあることが報告されております。現場ではこれまでの取組を踏まえ、教員自身がこれまでの働き方を見直し、自らの学びを深めるための時間や子供たちと向き合う時間を確保することにより、「質の高い学び」と「持続可能な学校」の実現を目指しています。働き方改革の推進にあたっては要因も複雑でなおかつ予算も絡むことから、容易に解決できるものではありません。

さらに、広大な北海道においては、教職員の年齢構成や学校規模の大小など課題が多岐にわたり、各地域や学校に応じた取組が必要です。現在、国において教職員の処遇改善等について検討が進められ、教職員調整額の段階的引き上げや中学校における令和八年度からの三五人学級の導入が省庁間で正式合意されましたが、長時間労働を是正するための業務の見直しや教職員の意識改革が急務です。産休や育児休業、病気休職者等の代替教員の確保も切実な問題として残っています。今後も魅力ある学校づくりを進め、教師という仕事がこのからの日本を担う子供たちを育てる「素敵な仕事」と認められるよう関係機関と連携し、道中の思いを発信する必要があると思います。

三点目は第六五回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会についてです。参加者の皆様が主体となった研修を創りあげ、まさに「私たち校長が主語」となった学びとなりました。北海道は広く、学校経営にも様々な特色や優れた実践がございますが、地区を越え、顔と顔とをつき合わせて学び合えた意義は、計り知れません。十勝小・中校長会の皆様や「チーム十勝・帯広」として連携を深めていただいた帯広市校長会の皆様が、心温まるおもてなしと隅々まで行き届いた大会運営に努めてくださったおかげでございます。ありがとうございました。次年度の胆振・室蘭大会へバトンをつないでいただきたいと思います。

結びに、北海道中学校長会歌の二番の歌詞に「幾星霜 人は変われど 教育の 使命一筋」とあります。我々道中会員も代謝を繰り返すかのごとく人の入れ替わりがこれからも続いてまいります。校長として目指す理想は変わることはありません。皆様に道中の今後のますますの発展に向けて御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。巻頭の御挨拶とさせていただきます。

潮流



中学校教育の一層の充実を願って

北海道教育委員会 教育長 中島 俊明

北海道中学校長会におかれましては、本道の中学校教育の改善・充実
はもとより、本道の教育行政の推進に特段の御理解と御協力をいただい
ておりますことに心から感謝申し上げます。令和の時代の中学校教育の
一層の充実に向け、大きく三点について、述べさせていただきます。

一 子どもたち一人一人の可能性を引き出す教育の推進

(一) 教育課程の適切な編成・実施

学習指導要領で育成を目指す資質・能力を生徒一人一人に着実に身に
付けさせるためには、校長を中心とし、全教職員の協力の下、家庭や地
域社会との連携を図り、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動
の質の向上を図ることが重要であり、とりわけ、授業時数の設定等に当
たっては、国の通知に基づき、自校の指導体制に見合った計画としてい
ただくようお願いします。また、当該教科の免許状を有する教員を確保
できない場合等においては、多様なメディアを利用して、当該授業を行
う教室等以外の場所で履修させることができる「教科・科目充実型」の
遠隔授業の実施を検討するなど、生徒の学びの機会の充実に向けた取組
を積極的に推進していただくようお願いいたします。

(二) 学力向上の取組

令和六年度全国学力・学習状況調査の結果では、一部の教科で全国平
均との差が縮まるといった改善傾向が見られる一方、深い理解を伴う知
識の習得及びその活用などに課題が見られます。このため、ICTの効
果的な活用を通じた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な
充実による授業改善などに一層取り組む必要があり、北海道版結果報告

書に掲載している改善方策等を参考に、学校全体で学力向上に向けた取
組を進めていただくようお願いいたします。

(三) 体力向上

令和六年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査では、ICTの活用
など授業改善に関わる項目で改善の傾向が見られる一方、一週間の総運
動時間や学習以外のスクリーンタイムに課題が見られます。各学校にお
いては、授業の更なる質の向上や、望ましい運動習慣や生活習慣の定着
などに向けた組織的な取組を一層推進していただくようお願いいたします。

(四) 特別支援教育

特別な教育的支援を必要とする生徒が増加する中、校内委員会の機
能を強化し、校内支援体制の充実を図ることが求められています。各学
校においては、自校の校内委員会の在り方を再点検し、支援を必要とす
る生徒の早期発見から実態把握、支援内容の検討、支援の評価・改善と
いうPDCAサイクルの充実を図るとともに、学びの場の柔軟な見直し
に努めていただくようお願いいたします。

二 学びの機会を保障し質を高める環境の確立

(一) 教育DXの推進

GIGAスクール構想の実現に向けては、教育の質の向上を図るとと
もに、目指すべき次世代の学校・教育現場を見据えた上で、最先端の技
術や教育データの効果的な利活用を推進することが重要です。各学校に
おいては、ICTを日常的に活用することで教員及び生徒が新たなツ
ールとして適切に活用できるようにするという観点から、端末活用の試行

錯誤から日常化のフェーズに移行し、ICTの普段使用による教育活動の高度化の実現に向けた取組を進めていただくようお願いいたします。

(二) 生徒指導の充実

令和五年度の国の調査では、いじめの認知件数と不登校生徒数が過去最多となり、各学校には、学校いじめ防止基本方針に基づき、いじめの積極的な認知や組織的な対応に向けた体制をより一層整備するとともに、全ての生徒が安心して学ぶことができる居場所づくりや集団づくりを推進することが重要です。各学校においては、育成を目指す生徒像や生徒指導の目標などに基づき、学習指導と生徒指導の関連を意識した教育活動の充実、組織的で機能的な生徒指導体制の確立、家庭や地域、関係機関等との緊密な連携などの取組を一層推進していただくようお願いいたします。

(三) 教員の資質向上

「新たな研修制度」は、教員が学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、主体性を発揮しながら、個別最適な学びや協働的な学びにより、教職生涯を通じて学び続ける、新たな教師の学びの実現をねらいとしています。教職員一人一人の資質能力の向上に向け、全国教員研修プラットフォーム(Platform)を積極的に活用するなどして、組織的な人材育成の取組を推進していただくようお願いいたします。

(四) 学校における働き方改革の推進

働き方改革は、教員自身がこれまでの働き方を見直し、生徒と向き合う時間や自らの学びを深める時間を確保することで、「質の高い学び」と「持続可能な学校」の実現を目指す取組です。道教委といたしましては、実効性の高い業務改善を進めるため、これまで以上に教職員の声を受け止め、業務の見直しや簡素化などを進める必要があると考えており、働き方改革の推進に向け、一層連携いただくようお願いいたします。

(五) 服務規律の保持

教職員のわいせつ行為など、重大かつ悪質な不祥事の発生が後を絶たない状況です。こうした不祥事は道民の信頼を大きく損なうものであり、職員を指導する立場にある校長の皆様におかれましては、自らを厳しく律するとともに、教職員が服務規律を徹底するよう、これまで以上に危機感をもって取り組んでいただくようお願いいたします。

三 地域と歩む持続可能な教育の実現

(一) 地学協働活動の推進

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、一人一人の生徒に地域社会の担い手としての資質等を育む「社会に開かれた教育課程」の実現を図っていくことが重要です。各学校においては、学校運営協議会での目的共有を基盤に、地域の方々が学習活動に参画する体制を構築し、生徒の学びと地域創生を実現する地学協働の推進をお願いします。

(二) 部活動の地域移行

部活動の地域移行は、地域の実情に応じスポーツ・文化芸術活動の最適化を図り、体験格差を解消することを目指すものであり、現在、全道各地で、地域の共通理解を図るための協議会や地域クラブ活動の実証事業などが行われています。各学校においては、生徒の教育や健全育成に関する専門性と実績を生かし、市町村教育委員会や市町村関係部署、スポーツ・文化芸術団体等と積極的に連携を図っていただくようお願いいたします。

(三) 読書活動の推進

令和五年三月に策定した「北海道子どもの読書活動推進計画(第五次計画)」を踏まえ、全ての生徒が自主的に読書活動を行うことができるよう、家庭・地域・学校等が連携して環境整備を図ることが大切です。学校図書館においては、館長である校長のリーダーシップの下、学校経営方針の具現化に向けて、学校図書館全体計画を策定し、教職員と連携して計画的・組織的な活動を推進していただくようお願いいたします。

終わりに、これからの学校には、子どもたち一人一人に、持続可能な社会の発展等に必要な資質・能力を育成するとともに、職場の心理的安全性を確保し、子どもたちが幸福や生きがいを感じられる学びを保護者や地域の人々とともにつくっていくことで、学校に携わる人々のウェルビーイングを高める場となることが求められております。こうした学校教育の実現に向けて、引き続き、各地域において、校長の皆様方の手腕を発揮していただくことを御期待申し上げます。道教委としまして、貴校長会と緊密に連携しながら、各種施策を推進してまいりますので、御理解・御協力をお願い申し上げますとともに、貴校長会のますますの御発展を祈念申し上げ、会誌の発刊に寄せる言葉とします。



「新たな教師の学びの姿」の実現に向けて

北海道立教育研究所 所長 川 端 香代子

北海道中学校長会におかれましては、長年にわたり、本道における中学校教育の充実・発展に努められ、とりわけ、道立教育研究所の業務にかかわっては、教職員の資質向上や人材育成にお力添えをいただいておりますことに、心から感謝を申し上げます。

また、各校長の皆様には、当研究所が実施する研修講座の受講やプロジェクト研究等の各種事業に御協力いただいておりますことにお礼を申し上げます。

さて、令和四年十二月に中教審答申「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について、「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成（以下、「令和四年答申」）が公表され、翌年度から「新たな教師の学びの姿」の実現に向けた「新たな研修制度」がスタートしました。当研究所でもこうした国の動きを踏まえ、教員研修の質の向上に資するよう取組を進めているところで、以下、紹介いたします。

一 新たな研修スタイルの試行

令和四年答申の中で、「教師の学びの内容の多様性と、自らの日々の経験や他者から学ぶといった『現場の経験』も含む学びのスタイルの多様性を重視するということも重要である。この観点からも、教師の個別最適な学びの実現のみならず、協働的な学びを実現していくことが必要である。」と示されたことなどを踏まえ、当研究所では、昨年度のプロジェクト研究において、新たな教師の学びの姿の実現に向けた研修モデルについて調査研究に取り組みました。

今年度は、その成果を生かし、「探究省察型」と「課題解決型」の二つの研修スタイルを試行実施しました。

まず、「探究省察型」の研修は、受講者の教育観や考え方について、遠隔型研修で自己点検したり、集合型研修で自己分析や省察したりする

ことを通して再構築していくもので、今年度は主に、管理職を対象とした二つの研修でこのスタイルを導入し、合わせて六十八名の管理職の方に受講いただきました。

この研修の大きな特徴である集合研修では、

- ・学校経営の具体的な問題の見られる状況を取り上げた模擬事例を題材とした、問題の要因の整理、問題解決の方策の検討を行う

- ・自身の学校経営等に係る考え方を省察するプログラムに繰り返し取り組み、自身の判断軸や価値観を振り返りながら、校長に求められる「応用力」を養うポイントについて理解を深める

などの演習・協議を行い、参加された方々は、管理職に求められるファシリテーションとアセスメントの在り方などについて理解を深めていました。また、この研修は、およそ半年かけて行うことから、自分自身の認識の変容や深まりに気付き、新たな意欲を高めるといった意味でも効果的であったと考えています。

次に、「課題解決型」の研修は、オンデマンド研修で新たな知見を得たり、職場での実践を遠隔型研修で交流したりすることを通して解決の手立てを自ら見いだしていくもので、前述の二つの研修以外の管理職研修や生徒指導にかかわる研修などで導入しました。

当研究所では、これまでも広域分散型の本道の特質を踏まえ、オンラインを活用した遠隔研修に移行してきており、さらにはコロナ禍でその動きが加速化したため、配信スタジオの常設など環境面の整備と並行して、画面越しでも協働的に学ぶことができる研修の構成やクラウド上で演習可能なデジタルワークシートの活用など、オンラインのよさを引き出せるよう試行錯誤を重ねてきていました。

「課題解決型」の研修では、そのノウハウも生かし、例えば、研修テーマにかかわる知識を得ることを目的とする場合は参加者が時間や

場所を選べるオンデマンドで実施、遠隔型研修ではできるだけ参加者同士の協働的な学びを重視することとし、これまであまり取り入れていなかった職場実践では、どのように取り組むのか参加者がイメージしやすいよう、事前や事後のフォローをきめ細かく行うよう心がけるなどの工夫を行いました。

また、「課題解決型」の管理職研修には、今年度から採用校長・教頭の皆様も選択により参加いただいております、こちらも長期の研修により、テーマにかかわる学びはもとより、新たな立場としての悩みや課題の共有の場ともなっています。

こうした新たな研修スタイルにより、理論と実践の往還による学びが実現しつつあります。次年度も、ニーズに合わせた研修テーマの設定、参加対象（キャリアステージ等）を一層意識して内容の充実に努めてまいりますので、皆様も是非受講ください。

なお、本年度実施した管理職研修の内、「働き方改革」や「組織的なICT活用」などの研修映像については、プラント上に公開しています。今後の学校経営の参考としていただけると幸いです。

二 研修担当者自身の学び

令和四年答申では、「教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びを研修実施者及び教師自らがデザインしていくが必要になる。」と示されており、まさに教員研修を実施する機関である当研究所も、所員自らが新たな発想をもち、研修を構想していくことが求められています。

そのような中、昨年四月、独立行政法人教職員支援機構（以下「NITS」）から「『研修観の転換』に向けたNITSからの提案」豊かな気付きの醸成」として、教員研修の質を向上させるための新たな考え方などの問題提起がありました。

当研究所も、こうした動きに学びながら、所員が新たな発想で教員研修の企画・立案に取り組むことができるよう、NITSから講師を招き、対話を通してこれまでの実践を省察し、所員自らが体験しながら学ぶ研修を行っています。

研修を通して「対話を重ねる中で自分の考えを俯瞰して捉えることができた」「過去の研修講座の成功体験に囚われず、参加者の視点に立とうとするプロセスを大切にしたい」などの気付きが生まれています。

「教師の学びの姿と子供の学びの姿は相似形」と言われます。教師の学びを支援する所員が率先して自身の研修観と向き合い、研修運営に生かすことが、受講される皆様のよりよい実践につながると考え、継続した学びを進めているところです。

三 関係機関等との連携によるニーズを踏まえた柔軟な取組

事業を進める上で、「学校は今どのような状況にあるのか」「我々が応援できることは何か」を常に意識することが大切だと考えています。

そこで、道研に求められているシンクタンク機能を活性化させるために、改めて、大学や民間企業等との連携の在り方を整理し、特に大学とは定期的に意見交換を行うこととしています。また、今年度新たに、校長会や北海道教育研究所連盟の加盟校などに御協力いただきながら、プロジェクト研究にかかわる要望アンケートを実施しました。今後は、先生方が研修講座に一層興味をもっていただけるよう、情報発信の工夫にも取り組んでいこうと考えています。

終わりに

昨年十二月には、文部科学大臣が「初等中等教育の教育課程の基準等の在り方について」中教審に諮問を行いました。また、連携して検討するよう別途諮問した「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速化するための方策について」においては、「これまでも、そして、これからも教師は公教育の要です。そして今は特に、『令和の日本型学校教育』の実現という目標の下、学びに関する高度専門職としての教師及び教職員集団には、新たな学びを展開できる実践的指導力を発揮することをはじめ、高度化・複雑化する教育課題に的確に対応していくことが期待されています。」と述べられており、そのために検討を求めることとして、研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励の進捗状況の検証、学校組織としての教育力や課題対応力を最大化するために必要な学校管理職のマネジメント能力の強化などが示されています。

当研究所としても、こうした国の動きを注視しながら、貴校長会との連携を一層深め、北海道の先生方が「学びに関する高度専門職」として力を高めることができるよう教員研修の充実や教育実践に役立つ情報提供に努めてまいります。

論 考

心豊かで主体的に生きる力を育む学校経営

生徒の主体性の向上を目指して

成果評価・結果責任を重視した学校経営

石狩市・石狩中 坂見 明信

一 はじめに

本校は、石狩湾新港の北部に位置する学校である。昭和五十五年四月に石狩中学校、高岡中学校、生振中学校の三校を統合し、新しく「石狩町立石狩中学校」として開校された。平成八年九月に市政が施行され「石狩市立石狩中学校」となった。令和二年四月の聚富小中学校閉校に伴い、校区が一部変更（厚田区虹が原地区の編入）となった。

近年は地域の高齢化に伴い、生徒は緩やかな減少傾向がみられ、現在は五学級（特支二）である。

保護者・地域の学校に対する協力は厚く、これまでに様々な教育活動を実践してきた。

二 取組評価から成果評価への転換

1 これまでの取組

新型コロナウイルス感染症の影響のためか、課題等の解決のための取組の多くが、成果が明らかにされていない状況にあった。

また、成果を確認したとしても、年に一、二回程度の実施であり、マネジメントをきめ細かに実施しているとは言いがたい状況にあった。

2 成果評価を意識した実践への挑戦

そのような中、「自主・自律的な学習習慣・生活習慣確立モデル事業」を進めるにあたって、成果評価を意識した取組を学校全体で推進することとした。

三 事業を進める際の留意点

1 ゴールを意識した取組の実施

(1) 「学習習慣の定着＝学力の向上」となることが、本事業の大きな意義であることを学校全体で確認した。また、各種調査等で学

力の変化を確認しながら、取組内容を、その都度工夫することも確認した。

(2) 学習習慣の確立（学習時間の増加）がゴールにならないように留意することを確認した。そこで、生徒一人一人が主体的に学習に取り組むことができるように工夫することも確認した。

四 生徒一人一人の主体性の向上に向けて

1 データの活用

「AI学習ログデータ」と「家庭学習データ」を確認すると、多くの生徒の学習時間は増加していた。しかしながら、そのことだけではなく、学力の向上に結び付いているかどうか、常に確認した。結果として「学びの質の向上」が課題であることが再認識された。

2 生徒一人一人が主体的に学ぶために

生徒の自分自身の良さや課題を意識するとともに、主体的に学習に取り組むことができるよう「個別カード」を作成した。「個別カード」には、各種調査等の結果はもちろんのこと、一人一人の良さや課題、そして今後の学び方を明記した。当初は教師が記入したが、その後、生徒が自分の弱点や苦手を把握し、主体的な学びになるよう、生徒自身が記入するようにした。（紙面の関係で詳細に触れないことをお許しいただきたい。なお、本事業の取組の一部が、本庁学校教育局学力向上推進課のウェブページに掲載されている。）

五 終わりに

前述した取組に加え、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙と同様の調査を全学年で三回実施している。また、学力を保証（向上）するのは「授業」であるため、授業改革に係る取組は優先的に進めている。これらの取組の結果、学力は向上した。（紙面の関係で詳細に触れないことをお許しいただきたい。）取組を進めるにあたって、学校全体（組織的）で取り組むことの重要性を職員は再認識できたようだ。その中で、マイクロ・マネジメントの重要性も再認識していた。

最後に校長に必要な資質能力の一つに「アカウンタビリティ」があると感じている。その意味は、「説明責任」ではなく「結果責任」である（※）。このことを私は肝に銘じ、学校経営に勤しんでいる。

※出典『オーストラリア 学校経営改革の研究 ●自立的学校経営とアカウンタビリティ』二〇〇九

教職員が同じ目標に向かう学校経営

美深町・美深中 松浦修司

一 はじめに

美深町は、人口およそ三、八〇〇人、北海道の北部に位置し、稚内市と旭川市のほぼ中央にあり、中川郡の南半分を占める広域な町である。美深町の南端に位置する本校は、在籍生徒七三人、開校から七八年の歴史を有する学校である。生徒は明るく素直であり、生活・学習に比較的落ち着いて取り組み、人間関係も概ね良好である。学習面については、基礎学力の定着とともに、自己の考えをまとめたり、表現したりすることが課題である。地域、保護者は学校の教育活動に理解を示し協力的である。また、町内には幼児センター、小学校、小中併置校、高等学校、高等養護学校、児童養護施設があり、互いに連携・接続を図りながら、教育活動を進めることが求められている。

二 学校経営の基本方針

「四つの共有でPDCAサイクルが機能する学校」

- 1 目標と課題の共有P（生徒の実態把握に努め、情報を共有する学校）
 - ・教育目標と三つのアプローチからなる重点目標が、校務分掌や学級の目標と確実に結び付き、学校全体が同じ方向を向く教育活動。
 - ・目標達成における課題を、教職員・保護者・地域全員が認識し、学校・地域が協働して取り組む姿勢を堅持する。
- 2 方策の共有D（地域社会と共に子供を育てる学校）
 - ・課題解決のための方策を、教職員一人一人の発想や個性を大切にしながら、全員で確立し、解決していく意識を徹底する。
 - ・保護者・地域・関係機関への情報の発信を意図的、積極的に行うことによって信頼関係を構築し地域総がかりで生徒を育てる。
- 3 成果の共有C（前年度の学校評価の課題を確実に改善する学校）

- ・目標達成の成果を、生徒・保護者・教職員が実感でき、学校全体としての評価を得る。
- 4 改善策の共有A（改善できることは、すぐに改善していく学校）
 - ・新たに生じた課題を、教職員全員が認識し、スピード感をもって、学校全体で改善に取り組む姿勢を持つ。

三 本年度の重点目標と三つのアプローチ

「自ら課題を見いだし、解決しようとする力の育成」
生徒は自らの課題に対して自力解決していく事が大切と考える。学習や生活の様々な課題があるが、すぐに解決には結び付かなくても、解決に向かつて取り組んでいくことが大切と考える。

- 1 「社会で生きる力」
アウトプットを大切にした「わかりやすい授業」と「授業改善」により、生徒の「コミュニケーション能力」と教職員の「指導力」の向上を図る。
- 2 「豊かな人間性」
「考え議論する道徳」の推進と、共に認め合い、励まし合い、高め合う行事や体験活動により、「自律的活動力」と「人間関係形成力」の向上を図る。
- 3 「健やかな体」
外部人材の活用や、地域との連携を通し、安心・安全に生活する態度を育てるとともに、体力向上の取組を充実させ「社会参画力」と「自己管理能力」の育成を図る。

四 おわりに

今年度、重点目標の設定とともに、視点を二つ掲げた。一つは「エビデンスに基づいた教育実践」と「子供の視点に立つ教育実践」である。その視点を押さえつつ、基本方針に沿った取組を推進している。教職員の半数以上が初任段階の教諭であり、目標に向かった協動的・組織的な取組をしつかり経験させることが大切と考える。もう一つは、学級経営では、学級が居心地の良い場所であれば生徒も本来の力が発揮できない。同様に、教職員も居心地がよい協働できる職場になるように一人一人が意識していくことが、学校経営の大きな機動力につながると考える。

心組み

函館市・港中 白川 卓

一 はじめに

津軽海峡に突出した岬の角に抱かれた天然の良港。「巴の港」と呼ばれたこの港は、古くから交易や漁業の中心地として函館の発展に寄与してきた。本校は、この函館の象徴である「港」を校名としている。学校は、函館市の北西部に位置し、函館港の北臨海工業地域と接している。校区には北海道と本州とを結ぶフェリー・ターミナルや鉄工団地があるほか、水産加工・造船・製網等港湾関係の工場が多いのが特徴である。

現在の生徒数は二〇五人。各学年二学級と特別支援学級を置く、函館市においては比較的規模の小さい中学校である。常勤・非常勤等あわせて、二十九人のスタッフで運営しているが、スタッフのうち、日常的に直接生徒の指導にある教諭・養護教諭は一六人で、その教員の年齢を平均すると五三歳を上回る状況である。

心豊かで主体的に生きる力を生徒に育むためには、それに携わる大人、とりわけ学校の教職員が心豊かに生き、主体的に教育活動や研修にあたることでできる環境を構築することが重要と考えている。

二 洞察と対話

予測困難で不確実、複雑で曖昧な時代においても心豊かで主体的に生きる力を育むためには、子供たちの学びにおける学習観や授業観の転換が必要と言われている。

中教審特別部会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」では、「主体的・対話的で深い学び」を実現することで、多様な子供一人一人が自立した学習者として学び続けていけるようにすることを柱としている。そして、子供の学びと教師の学びは相似形であり、主体的に学び続ける教師の姿が、子供の学びにとって重要なロールモデルとなるとしている。

学習観等を転換するためには、教師一人一人が教育や学校の本質についてじっくりと洞察し、それらを教職員同士の対話により共通理解を得ていくプロセスが必要である。このような教職員の「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現させていくかが経営の焦点となる。

三 主体的な対話を生むコミュニティのデザイン

組織内の人間関係やイベントをうまく構成したり、対話をするための時間とスペースを確保したりすることで、教職員は相互交流を自ら誘発する。このような教職員同士の対話による主体的な相互交流は、組織の活力に大きく影響すると考えている。

主体的な相互交流を実現させていく鍵は、教職員の心を捉えて引き込めるだけの刺激的な話題とその相互交流の有用性や価値を自ら生み出すことである。現在、教職員の人間関係を随時把握するとともに、状況を踏まえた話題やテーマを定期的に投げかけたり、思いがけず発生した相互交流を価値付けして紡ぎ、その有用性を高めたりと暗中模索中である。

業務の効率化を進める中、教育について語る豊かな時間を確保することが難しい状況にある。教職員が心豊かに業務推進に当たれるよう更なる工夫が必要である。

四 結びに

法隆寺大修理を手がけた最後の宮大工棟梁 西岡常一氏は、「堂塔の木組みは木の癖組み、木の癖組みは工人等の心組み」という言葉を伝えている。心豊かで主体的に生きる力を育むという塔を建てるためには、生徒一人一人の個性を大切にする必要があり、生徒の個性を大切にした教育を展開するためには教職員相互の心組みが必要である。新たな学校教育の展開を正鵠し、対話による活力のある経営に努めていく所存である。

「地域の教育力」を活かす学校経営

弟子屈町・弟子屈中 小林 一博

一 はじめに

本校は釧路管内の北部内陸に位置し、指定九〇周年を迎える阿寒摩周国立公園を有する自然豊かな弟子屈町の拠点校である。生徒数は、減少傾向にあり、現在一〇四人と各学年一学級、特別支援学級三学級構成である。地方の共通課題である過疎化と高齢化は進行しているが、まち全体が、新たな取組に挑戦する意識が高く、若者や学校の様々な挑戦を温かく見守る懐の深さを感じている。

二 地域の課題を地域と共に共有する

社会に開かれた学校が求められて久しいが、現実的には人材の確保と運用に当たった課題や安全上の問題から困難さが見られる。弟子屈町では、町をあげて将来の担い手育成の教育や移住推進に大きく力を入れており、移住者を含めた地域住民とは、総合的な学習の時間を始め様々な行事において、これまで学校教育と日常的なつながりを積み重ねてきた。積極的な連携を強めてきたのが、「地域おこし協力隊」と「てしかがえこまち推進協議会」の二つの組織である。双方の組織とも、弟子屈町の町づくりを通して学校との関わりを深め、昨年度、教育支援組織の名称を「まなびや弟子屈」と名付けた。

運営メンバーは、無理のない範囲で学校において今後の活動推進について打ち合わせを行っている。地域と共に地域の課題を共有し、地域を担う人材育成と当事者意識を高めることをねらいに、柔軟な発想や時間の工夫、新たな協力者の発掘など裾野を広げていくことに重点をおいている。

三 「地域の教育力」を活かす学校のミライ

「まなびや弟子屈」との総合を中心とした連携は、「地域の教育力」を活かす学校のミライモデルの提案でもある。これまでの実践により、生徒の資質・能力の伸長だけでなく、教職員の意識改革にもつながった。同時に持続可能な地域づくりの担い手育成に直結する保護者や地域住民の意識にも影響を与えている。「まなびや弟子屈」を始め、多くの地域住民が学校の取組に非常に協力的なのも、その本質を理解しているからであると考えている。

今年度は、校内組織に「地域連携推進（まなびや弟子屈）担当」を位置づけると共に、校内の空き教室を「まなびや弟子屈」スタッフルームとして「TEICHU SPACE」を開設し、実際に「地域の教育力」を融合するための場として、地域住民に広く開放している。

四 結びに

学校で求められるカリキュラム・マネジメント力も地域と共に創造することでその産物であると考ええる。現在、平日の学校を会場に「子育てサポート」の開催や地域住民が昼食持参で交流を図る「イトイン弟中」が計画されている。今後の大きな夢は、キャリア・起業家教育にもつながる「校内に会社のある学校」の実現である。

「生徒を育てる学校」から「生徒が育つ学校」へ

釧路市・北中 富田直樹

一 はじめに

本校は、学校教育目標「真理を求め創造をめざす生徒・勤労を愛し責任を果たす生徒・健康を尊び心をひろげる生徒・自己に厳しく社会に尽くす生徒」の実現を目指し、全教職員がベクトルを揃え、具体的な戦略をもって各種教育活動を推進している。また、今年度からコミュニティ・スクールを本格的に導入し、地域とともにある学校づくりを進めている。

二 学校経営理念の提示と共有

私は、令和五年の四月に本校に着任した。五月には新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類が五類に移行されることが決まっており、校長として「ポストコロナの学校像」を描き、具体の戦略をもって学校経営に当たっていくことが求められていた。

中央教育審議会より令和三年に「令和の日本型学校教育」が打ち出された。全ての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びを実現する学校とはどんな姿なのか、そのことを突き詰めた末に出した答えが「生徒を真ん中に置いた、生徒が主語となる学校」だった。そこで、学校経営理念を「『生徒を育てる学校』から『生徒が育つ学校』へ」として、着任初日に全教職員に伝えた。

早速、日常の授業はもとより、学校行事や生徒会活動、部活動などを通して、生徒が主語の学校の実現に向けた取組が始まった。例えば、授業においては、教師がもっている答えに生徒が辿り着くことを評価するのではなく、課題を自分で見付け、それを他者と協働してどう解決していくのかを問う場面が確実に位置付けられるなど、生徒たちが主体的で創造的な解決ができる力を獲得する「仕掛け」が見える教育活動が展開されていった。生徒たちからは学び合いの中で互いを尊重したり、自分

の考えをもち表現しようとしていたり、課題の解決に向け何度も挑戦し最後までやり抜こうとしたりする姿が見られるようになった。

三 生徒と一緒に創る重点教育目標

そんな生徒たちの姿を日常的に目にする中で、学校マネジメントの一丁目一番地である「年度の重点教育目標」を生徒と一緒に創ってみたいと考え、「『次代のスクールリーダーに問う、北中学校をどんな学校にしたいか』ミーティング」を企画した。

当時の二年生の全生徒（七十七人）と面談を行い、「本校の良いところは何か」「本校でどんな中学生になりたいか」「そのためにはどんな力が必要か」の三つについて生徒たちに聞いてみた。生徒たちからは多種・多様な考えが聞かれたが、共通していたことは、友達や教職員、授業、学校行事、部活動など、人や物事との「関わり」を通して本校の良さを実感していたり、自分たちの目指す姿を思い描いていたりにあった。さらには大人の決まりきった指導や指示をそのまま受け入れられるのではなく、予測困難な時代の中を自力で歩みを進め、責任をもつて進むべき方向を自分で見付け出すことの大切さに気付いていることが分かった。

そこで、面談を通して聞き取った生徒たちの思いや考えを整理し、重点教育目標として「自分が出会う世界（人・物事・状況）をより良い形にデザインできる生徒」、そして、それを実現するために獲得したい一〇の資質・能力として「創造表現」「情報活用」「自己理解」「選択」「対話」「つながり」「自己承認」「内発動機」「他者尊重」「未来志向」を設定し、これを今年度の本校が目指すゴールとした。

四 結びに

生徒たちは既に自走している。私たち教職員もこれから出会う教育課題をよりよい形にデザインし、学校教育目標の実現を図っていくことが大切であると考えている。このことが、「生徒が育つ学校」につながるという信念をもちながら伴走者として生徒たちに寄り添い続けていく。

論 考

心豊かで主体的に生きる力を育む生徒指導

組織的な生徒指導を目指して

俱知安町・俱知安中 寺 口 由 之

一 はじめに

本町は、ニセコで有名なスキー場を校区に有する町で、毎年冬になると、〇〇〇人ほど人口が増える町である。外国籍の方が多く、生徒もカタカナの名前が多い。そんな町内の四つの小学校と一つの分校の生徒が本校に入学してくる。学年四学級で構成される中規模校となっている。

生徒は温厚で素直な印象があるが、部活動等にも、目標に向かって一生懸命取り組む姿が見られる。また、総合振興局や自衛隊等が所在し、転出入の多い学校である。入学時は、元の小学校同士のグループで行動するが、学校生活の中で、徐々に学級の仲間意識や学年、部活動といった所属意識の高まりが見られるようになっていく。

二 学校力向上指定地域における生徒指導の取組

本町は、学校力向上の指定地域として指定され、本校を中核校として二つの小学校が連携校となっているが、町内全ての小中学校で、義務教育九年間で力を積み上げていく「俱知安プラン」を推進している。

「俱知安プラン」の重点において、生徒指導に関わる内容については以下の通りである。

1 授業改善・学習規律の徹底

学習規律についてはチャイム前着席や立腰といった、俱知安町5つ星という基本的な約束をつくったり、授業の展開を統一したりしながら、中学校入学時にはある程度差が無いように工夫している。

2 学校間の連携接続

総合的な学習の時間は、小中学校間での学びが重ならないよう、九年間を見通したカリキュラムが作成されている。また、ICTのスキル等についても、小学校間で学年ごとに揃えて実践されている。

3 ウェルビーイングな学校作り

学校ごとに児童会・生徒会を主体とした「いじめ未然防止」の取組が行われている。本校では生徒会企画という名で全校生徒が一斉に取り組み、縦系列や横のつながりを意識して行っている。また、教育相談活動にも重点を置き、定期的に実施する他、班ノートの取組やチャンス相談も実施している。

三 本校の特別支援の取組

先に挙げた取組の他、本校では特別支援教育を重点にして取り組んでいる。本校の課題でもあった「不登校生徒」「別室登校生徒」の増加に伴い、校務分掌の生活力向上推進部会に、登校支援係を新設して町の適応指導教室との連携や教育相談業務を行っている。また、特別支援教育部会に、生徒支援係を新設して別室登校生徒が学校生活を送る生徒支援教室（SSR）の運営やスクールカウンセラー（SC）との連携業務も推進している。

加えて、「俱知安プラン」の取組の一つである特別支援部会では、小中の連携を重視し、入学前の面談や学校見学も他の生徒とは別に行っている。

四 終わりに

私は、生徒の前に立ち、接する場面の全てが生徒指導の場面と考えている。そのため、職員には率先垂範を心がけてもらっている。

今年度、職員には「学校として」「組織的に」ということを日頃から伝えている。校務分掌を新設したこともあるが、学年間や学年内で揃えることを重視し、担任裁量や学年裁量を少なくすることで、生徒・保護者からの安心感（公平感）を得られるよう取り組んでいる。

また、生徒指導とキャリア教育には密接な関係があることから、生徒の資質・能力を育てるために、「自己指導能力」の基盤となりそうな六つの力をグランドデザインに明示し、生徒・保護者や職員にも周知して取り組んでいる。

私も昔はそうであったが、現在は担任・担当の経験則や思いだけで生徒への指導を行うことは危うさを感じる状況である。生徒指導提言などを確認しながら、根拠のある指導に努めていかななくてはならない。それが「学校として」の生徒指導だと考える。

安全・安心な風土を創り出す学校を目指して

妹背牛町・妹背牛中 渡 邊 現

一 はじめに

本校は、昭和二十二年に開校し今年度七七周年を迎えた学校である。校舎玄関前の石碑にも刻まれている校訓「公正 明朗 剛健」を礎に、自然豊かな環境で全校生徒五九人が生き生きと学んでいる。生徒は、みな素朴で素直、まじめで、対教員あるいは生徒間の暴力行為や施設・設備の毀損・破壊行為、その他、授業妨害等の発生も見られない。ただし、生徒一人一人に目を向けると、抱える困難や課題は多様化しており、個の課題等に応じた適切且つ切れ目のない生徒指導を日常的に絶えず行っている。加えて、幼い頃から固定化された人間関係の中で成長してきているため、社会体験や対人関係の経験にも課題がある。他方、インターネットを介在としたトラブル、いじめの発生、不登校への支援等には、日常における継続的な未然防止と早期発見・早期対応を行うとともに、教職員の問題意識と生徒指導の方針・基準の共有を大切に行っている。

二 本校の取組

1 全教職員で日常の生徒につく指導に取り組む

- ・教職員からの積極的な挨拶、声がけ、励まし、称賛、対話を行うとともに、授業や生徒会、部活動等での指導の工夫により、意図的に生徒への活躍場面を創造していくなど、全教職員で発達支持的生徒指導を共有し、一致して取り組む。

- ・コアとするカリキュラムを節目とした教科等横断的な教育課程を編成し積極的に生徒の活躍の様子を発信することにより、教師も保護者も地域住民も友人相互でも生徒の成長実感を共感し、全ての生徒が「自分も一人の人間として大切にされている」と自己存在感を実感できる日常の学校生活を構築する。

2 学校がチームとなって対応する生徒指導を貫くこと

- ・「そんなこと」など矮小化した判断をしたり恣意的に問題の原因を決めつけたりすることがないよう、学年団での連絡と担当への報告を確実に実施することにより、学級、学年、生徒会、部活動等それぞれの関わりを組織で複合的に捉え、生徒の不安や悩みを決して見逃さない日常を貫く。

- ・思い込みの指導によって信頼が失われることがないよう、特に課題早期発見の初動対応には、確かな記録を取り正確な事実の特定を行うようにする。

- ・課題の解消には、スクールカウンセラー等、専門的な外部人材や関係機関と連携して進める。

3 日常の授業を充実させること

- ・主体的・対話的で深い学びによる日常の授業を保障することこそ、生徒の心理的安全性を保ち、生徒が自己存在感を得ることにつながると捉え、日々の授業改善と充実を真摯に進めていく。

- ・道徳科が要となり、より一層道徳教育が充実するよう、指導計画を編成しコアとするカリキュラムに照らして同日に全学年が同じ内容項目を取り扱う道徳科の授業を実施するようにする。

三 おわりに

このように生徒指導を進めてはいるものの、実際に事案が発生したときの初期段階を振り返ると、その対応にはマンパワーによるところが大きかったと感じる。「専門性とは、自分のできないことが何かを知っていることだ。限界を知らずに万能感を抱いて危機にある児童生徒に関わることは、最悪の結果を招きかねない」と言われる。私は、今後本校では、生徒指導に関わるマニュアルを充実させていくことをはじめとして、対応方法の評価改善と適切な見直しを順次行っていくことが重要であると捉えている。問題を一人で抱えこむのではなく、できるだけ多くの教職員が組織的に関わるようにし、柔軟な生徒理解と幅広い対応がより可能となる生徒指導体制を構築したい。今後も、生徒の活躍や成長を積極的に発信して理解を得て、保護者や地域住民の学校教育への参画を促していく。

日本型教育の特徴を生かした生徒指導

～全教育活動に生徒指導の機能を生かして～

室蘭市・桜蘭中 北野雄介

一 はじめに

本校は、平成二十四年に室蘭市内の二つの中学校が統合して開校し、今年度で十三年目を迎えた。開校から数年間は、生徒の問題行動による事件・事故が頻発し、校則違反や校内生活の乱れが常態化するなど、いわゆる「荒れた学校」「生徒指導の大変な学校」という印象が強かった。そのため、生徒指導においては、治療的・対症療法的な面が強く、校則を強化し、叱り、教え、従わせるといった消極的な生徒指導に頼らざるを得なかった。しかし、歴代の教職員の努力により、次第に落ち着きを取り戻し、現在では、問題行動や校内生活の乱れがほとんどない、大変落ち着いた学校となった。

ただ、そのような背景の影響は否めず、生徒は、素直に先生方の指示に従い、真面目に生活しているが、どこか他律的であり、生徒指導本来の目的である「自己指導能力」や「主体性」が十分に育っているとは言えない。

本校が落ち着きを取り戻す一方で、改訂された学習指導要領や生徒指導提要には「生徒指導の目的」や「積極的な生徒指導の充実」についてこれまで以上に明確に謳われた。今こそ、消極的な生徒指導から積極的な生徒指導への転換を図る好機であると考えている。

二 生徒指導の考え方

学習指導要領「総則」や生徒指導提要に謳われている通り、生徒指導は、学校の教育目標を達成するために重要な機能の一つであり、学習指導と並んで重要な意義をもつ。そして、両者は相互に深く関わっている。学校では、生徒指導が一人一人の生徒の健全な成長を促し、生徒自らが現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという意義を踏まえ、教育活動全体を通じ、学習指導と関連付けながら、一層の充実を図っていくことが必要である。

本校では、このことを踏まえた教育のイメージを校長が作成し、全職員や保護者、学校運営協議会等にして共通理解を図るとともに、常にイメージを共有しながら日々の教育活動にあたっている。（下図参照）

三 具体的な取組

1 教職員・保護者・地域による目標の共有

・生徒の「主体性」「自己有用感」「自己指導能力」の向上を目指すこと

2 教育活動における共通の意識・取組内容の確認
・全教育活動において、生徒指導の三機能を生かした取組を行うこと

3 安心安全な風土の醸成（四つ目の機能）のために
（自己決定場面・自己存在感・共感的人間関係を与える）

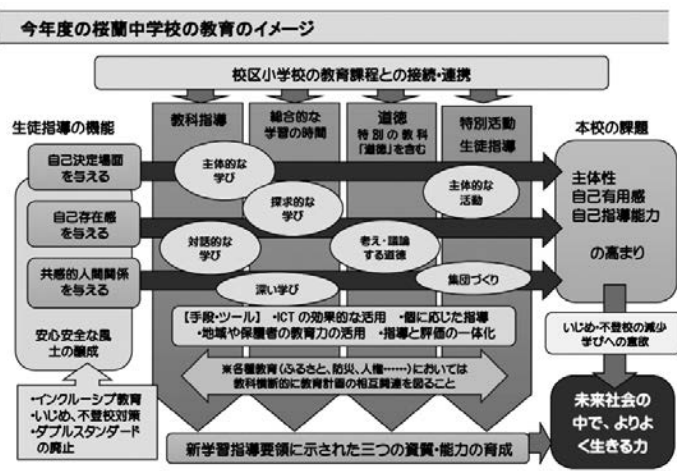
・インクルーシブ教育の充実（インクルーシブ教員の配置）
・多様性を認め、異質なものを排除せず共生する態度の育成
・別室、オンライン、適応指導教室等、多様な学習環境の提供
・教職員の適切な挨拶、言葉遣い、温かな声掛けと言行の一致
その他

4 教育相談、生徒指導交流会・研修会、防犯や校則に関する取組、いじめ、不登校対応、問題行動・事故への対応等、従来の生徒指導で実践してきたことも大切に、継続して組織的に取り組んでいる。

四 おわりに

本校では、学習指導を担う教員が同時に生徒指導の担い手にもなるという日本型学校教育の利点を生かし、日々の学習活動において、常に生徒指導の機能を意識することで学習指導要領に示された資質・能力の育成を図るとともに、本校の課題である「主体性」「自己有用感」「自己指導能力」の向上を図っている。つまり、全ての教育活動で生徒指導の機能を生かすことで「学習指導」と「生徒指導」の関連を図り、相乗効果に期待している。

このことは長期的な視点で必ずいじめ・不登校・問題行動等、生徒指導上の諸問題の解決にもつながり、さらには子供たちが、未来社会の中でより良く生きることにつながると考えている。



「ふるさとキャリア教育」による生徒指導

別海町・野付中 吉光寺 勝 己

一 はじめに

本校は、「野付地区幼小中（野付幼稚園・野付小学校・野付中学校）連携ランドデザイン」のもと、主に野付半島や野付湾を中心とした自然や環境などの地域素材を生かした「野付学」を通じて、幼稚園から小学校、中学校に至る一二年間を踏まえた学びを体系的に展開している。こうした一連の学びは、文部科学省令和元年度キャリア教育推進連携表彰（第九回）において「幼小中一貫キャリア教育『野付学』」として最優秀賞を受賞するなど、地域産業の担い手育成の観点からも評価が高い。また、「ふるさとに生きる力を育む」という開校以来の教育理念のもと、令和四年度から本校の教育目標を「未来を切り拓き、社会貢献する人間の育成」と改定し、日々の教育活動を展開している。

二 総合的な学習の時間と生徒指導

生徒指導提要第二章「生徒指導と教育課程」には、「小学校と中学校の総合的な学習の時間では、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、より良く課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成が目指されています。」「生徒指導の定義にある『社会の中で自分らしく生きることができる存在へと児童生徒が、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える』ことと重なる」と示されている。これらは、別海町教育委員会が推進している「ふるさとキャリア教育」の方向性とも一致しており、当地区では幼小中が連携し、ランドデザインも毎年改善を図りながら、教育課程の重点として位置付けている。

三 ふるさとキャリア教育「野付学」の実際

本校では、「野付学」を中心とした総合的な学習の時間の目標を、次のように設定し、「社会貢献する人間の育成」を目指している。

「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行う

ことを通して、より良く課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」

1 体験学習を通して他者や社会と関わる能力を高め、しなやかで開かれた心を育むことができるようにする。

2 体験を通して自分自身の在り方や生き方及び社会と自分との関わりについて前向きに考え自己肯定感と自立心を高めることができるようにする。

3 課題設定、情報収集や調査・整理・分析・まとめ・表現等の一連の探究過程を通して主体的に学ぶ方法や表現する方法を身に付けることができるようにする。

四 学校の教育目標の達成を実現させる教育課程と生徒指導

本校の生徒は、各種調査において「貢献」に相当する部分で高い値や上昇傾向が見られる。昨年度の三年生は「野付学」による学びの集大成として「未来創造プロジェクト（町への提言）」という形でまとめる学習活動を行った。「野付学」を修了した三年生は、「自分たちの作ったプランを実現させ、地域の大人も子供も元気に遊べる地域を作りたい。」とか、「ゴミゼロの街にするために、自分たちから活動を始め、背中を見せて活動の輪を広げていきたい。」など、自己指導能力を働かせた主体的な活動意欲の向上が見られた。

五 おわりに

このように、本校の「野付学」は、加速度的に技術が進化している不確実な現代において、子供たちが自己指導能力を働かせて幸せに生きていくことができるよう、「社会貢献」を軸として本校の教育課程上の重要な基盤として位置付けている。今後も、自己との関わりを起点とした学習課題の設定による探究活動に取り組むことを通じて、生徒指導上の効果がより高まることが期待できる学習活動となるよう、カリキュラム・マネジメントを充実させながら、総合的な学習の時間を再構築していきたいと考えている。

論 考

心豊かで主体的に生きる力を育む体験学習

楽しいと思える学校と地域の風土づくりに向けて

旭川市・愛宕中 濱 中 昌 志

一 はじめに

昭和十二年「愛宕」と名付けられたこの地域は、明治に入植した屯田兵の有志によつて建立された「愛宕神社」に由来する。愛宕の「愛」という文字にちなんで、愛情に満ちた地域ぐるみの教育の推進、開拓の精神を受け継ぎ、「未来を拓く創造性豊かな生徒の育成」を志向している。

本校では、育成すべき資質や能力を踏まえ、総合的な学習の時間等も活用し、ふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲や態度、能力を育む体験活動を実施しているが、ここでは、今年度より重点的に推進する、発達支持的生徒指導による日常的な体験に着目した「楽しいと思える学校と地域の風土づくり」について紹介させていただく。

二 本校の取組

1 振る舞い教育の推進

先の見えない時代に求められるのは、地域に根差した「ウェルビーイング」の向上とともに、生徒同士による学び合いや、地域社会での多様でリアルな体験活動の重要性を再認識する学校経営の改善であると考ええる。特に、生活の中に多くある挨拶や思いやりのある行動など、「当たり前」の行動について、「できるように」「なりたい」「できるように」になってほしい」との思いから、生徒、保護者、地域住民が自らの振る舞いを意識した行動をとるよう変革を促しながら、地域全体を学び舎と捉える「スクールコミュニティ」としての「振る舞い教育」を推進している。



- (1) 発達支持的生徒指導の考え方
(2) 取組の推進に関わる考え方

「全ての生徒を対象に」、「特定の課題を意識せず」、「日常的な活動も含めた全ての教育活動で」を豊かな体験と捉え、学校、家

庭、地域が、考えを共有する仕組みの構築に取り組んでいる。

(2) 課題設定の工夫

学校運営協議会を中心に、それぞれが当事者として課題を捉えるため、意図的に「講演会」を設定、実施するなど、誰もが取り組んでみたいと感じることのできる課題の提供を行っている。

(3) 学びに向かう力の発揮

日々の保護者や教職員の子供たちへの挨拶、声掛け、励まし、賞賛、対話、個人や集団への働き掛けは、新しい取組を要求するものではなく、むしろ、日本において学校がこれまで大切にしてきたことを、改めて強調し、生徒が安心・安全に過ごせる学校、家庭、そして地域づくりをすることにあると考え、それを行動化している。

(4) 具体的実践例

「世界アルツハイマーデー」に合わせ、「包括支援センター」の職員が来校し、認知症の人に出会ったときの対応について、お昼の放送を活用しDJ風に生出演し説明。生徒のやる気や思いやりの心を育む活きた体験につながり、認知症の方々もこの愛宕地域で、笑顔で元気に生活するため、中学生が担い手となり活躍する環境づくりを地域や家庭も協働して推進している。

三 おわりに

多職種による連携・協働することが求められるチーム学校時代において、生徒たちの様々な体験活動を支え、生徒指導を担う役割は、教職員にとどまらず、学校の教育活動に携わる家庭や地域の方々にも拡張することが大切であると考ええる。また、子供たちにとって、学校や家庭、そして地域の大人から、「温かみや思いやり」、「期待」を感じ、さらには、学校や家庭、地域の諸活動に主体的に参加、参画することで、「何かしらの貢献しよう」という意識の高揚や、「役に立っている」という「実感」が重要であるとも考えている。生徒たちが、直面する様々な試練に、前向きに挑戦する意欲が持続されることを願い、誰もがそれぞれの後ろ姿を意識する「振る舞い教育」を今後も推進し、楽しいと思える風土づくりに継続して取り組む所存である。



地域との連携を生かした「とままえ科」

苫前町・苫前中 佐藤 美智子

一 はじめに

苫前町は、北海道北部の日本海岸沿い、留萌管内の中間に位置している。町は漁業が盛んな苫前地区、農業が盛んな古丹別地区に大きく分かれており、令和五年度、それぞれの地区にあった中学校が一つになり「シン・苫前中学校」としてスタートした。

二 本校と地域との連携

苫前町では、以前から学社融合事業が盛んに行われており、現在は「地域学校協働本部」が中心となって学校と社会教育事業との連携や各協力団体との連携調整を行っている。また、学校からは、町内有志による「とままえ未来ビジョンミーティング（fvm）」などの団体や個人に講師や学習支援などを依頼し、地域の教育資源を積極的に活用している。さらに、町外の団体とも連携協働し、深い学びを実現している。

三 総合的な学習の時間「とままえ科」

総合的な学習の時間「とままえ科」では、一年生から三年生まで学年ごとに小テーマを設定し、苫前町の特色、産業、観光、自然、伝統文化、雇用、地域おこし、福祉、防災などを切り口に、探求的な学習に取り組んでいる。学習の始めには、一年生から三年生までの異学年縦割り班による合同授業として「とままえ座談会」を設定し、苫前町のよさについて交流した。また各班にはfvmのメンバーが参加し、町おこしに関する取組について紹介した。

1 一年生テーマ「とままえの魅力を知る」

「とままえのPRを考える」を課題に増毛町を訪問し、苫前町と増毛町のPRや魅力発信の比較、また町おこしについて調査



活動を行った。この学習を発展させ、苫前町の方を対象にしたPR活動を行う。

2 二年生テーマ「とままえの課題を考える」

①「とままえの課題と今後の方向性を探る」を課題に、今年度は宿泊研修で東川町を訪問し、ディスカッションを通して自分たちの考える地域活性化についてアドバイスをいただいた。その後の町の散策は、生徒にとって町の魅力や良さに直接に触れる機会となった。

②「生き方体験学習」として七月と十月の二回、職業体験を行った。働くことを通して「自分は苫前でどう生きたいか、どう暮らしたいか」を課題にし、季節ごとの仕事に対する理解を深めながら「仕事と生活」「仕事ととままえ」について考えた。これらの学習のまとめとして、ドリームマップを作成する。

3 三年生テーマ「とままえと共に進む」

「自分たちができる町おこしを考える」を課題に、他地域の町おこしを体験したり、町おこしに携わる人々の思いを理解したりしながら、調査活動を行った。今年度は修学旅行で夕張市、南幌町、ニセコ町を訪問し、収穫体験や地域の方とのディスカッションを行い、町おこしのヒントとした。今後は町おこしプランの企画、実践へとつなげる。昨年度はfvmの協力を得ながら、生徒が企画した「とままえフォトコンテスト」を実施し、町内外から百点以上の応募があった。

四 おわりに

本校では、総合的な学習の時間、特別活動（学校行事）を中心に、学校を核とした地域づくりに取り組んでおり、これらの教育活動を通して地域に愛着をもち、地域社会を担う人材育成ができればと考えている。「とままえ科」は今年度からの実践だが、今後も地域の教育資源を積極的に活用し、心豊かで主体的に生きる力を育成するとともに学校に対する地域の期待にも応えていきたい。



地域素材・人材を活用した体験活動

今金町・今金中 佐々木 弘 司

一 はじめに

今金町は、北海道南西部渡島半島の北部に位置し、清流日本一に輝いた後志利別川が貫流する農業を基幹産業とする人口四、五〇〇人ほどのまちである。特産物として地理的表示（GI）保護制度に登録されている今金男爵（じゃがいも）は多くの人に知られている。

本校は、一〇六人の生徒が在籍しており、素直で礼儀正しく、特に生徒会発信の今中四か条（挨拶・礼儀・メリハリ・歌声）を大切にしながら学校生活を送っている。

そんな子供たちに、今金町には「今金町の子供たちは今金町民の手で育む」という基本理念があり、教育活動にとっても協力的で、数々の体験をさせていただいている。

二 本校の取組

1 キャリア教育では

本校のキャリア教育基本方針の一つである、「体験的な活動や地域の職場、職業人と触れ合うことで、望ましい職業観や人生観を育み、自己の生き方を考え、将来への夢や希望をもたせる」のもと、第一学年では職業調べとして、地域の事業所に出向き、地域の現状や仕事の内容、喜びや苦勞などのインタビューをしてまとめる学習をしている。こういう段階を踏んで、第二学年で自ら体験する職場体験学習を行っている。



この職場体験学習で本校の特徴的なこととして体験先が決定したら、まずは履歴書の作成（自己紹介的な内容）をし、体験までの期間に地域の方を講師としたビジネスマナー講習を受け、職業人としての作法等を学び、電話にて事前打ち合わせの

アポイントメントを取り、職場に向かうという流れになっている。もちろん事後には礼状を作成している。

そのほかにも地域で活動している方々やいろいろな分野で活躍されている方に講師として講話をしていただいている。

このように社会に出るために必要な知識として、地域の方々の力を借りながら進められている。

2 食育指導では

本校の食育推進計画は、「食事の重要性や食事の喜び楽しさを理解するとともに、今金町の産物や食文化を知り、生産等に関わる人への感謝の気持ちを育てる」となっている。学校給食でも「ふるさとの恵みとほほえみに感謝する日」と題して、生産者さんとともに食材を味わい感謝の気持ちを伝える機会を定期的に設けている。

将来を見据えた食に関する授業として、栄養教諭や地域の婦人会の方の協力を得ながら第一学年では「おにぎり体験授業」、第三学年では「自作弁当を作ろう」、そして第二学年では町内の飲食店や販売店の方々の協力で地元の食材を使用した「大地の恵みレストラン」と題して、洋食のコース料理形式を体験しながら、テーブルマナーの基礎的な知識やマナーの意義を学んでいる。



三 おわりに

私は生徒に対して、中学校は社会に出るための準備をする場所であり、社会人として必要な、前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力は中学校の段階で意識し身に付ける努力をすることで将来に生かされると伝えている。子供たちにこうなってほしいという思いや願いを学校運営協議会や学校だよりを通じて、地域の方々に理解していただき、教員が経験させることができないことを快く協力していただくことに深く感謝している。「今金町の子供たちは今金町民の手で育む」私も町民の一員として、将来を担う子供たちのために成長につなげる取組をさらに発展させていきたい。

心豊かで主体的に生きる力を育む体験学習

本別町・本別中 長尾 全 雅

一 はじめに

本別町は、十勝平野の東北部に位置し、緑豊かな美しい自然の中にある人口六、二〇〇人ほどの町である。主な産業は農業・林業で、近年は本別公園や道の駅を核とした観光をはじめ、地場産品の豆の加工や地域包括ケアシステムの構築などにも力を入れている。

本校は、町の中心校として、盛期には、一、〇〇〇人近くの生徒数を誇っていたが、町の人口減や少子化の影響で、年々生徒数は減少傾向にあり、本年度は、とうとう九六人と、一〇〇人を割る生徒数となった。生徒数は減少傾向にあるものの、幸い家庭・地域の教育力は高く、生徒たちは素直で落ち着いた学校生活を送っている。家庭・地域と連携した体験学習の推進を通して、自ら考え、行動できる生徒を育み、ふるさと「本別」に誇りと愛着をもてるよう豊かな心を育んでいきたいと考えている。

二 本校の取組

1 上級学校と地域の歴史を知ろう（一学年）

中学校卒業後の進路を早期に考えるために、上級学校調べを実施している。生徒たちは、一人一台端末や上級学校から送られてくる学校要覧などを使いながら、十勝管内の上級学校について調べた後、プレゼンテーションソフトを使ってまとめている。まとめた、プレゼン資料は、参観日などの機会にプレゼンテーションを行い、親子で進路を考える契機としている。また、本別町は、終戦間近に米軍機による空襲を受け大きな被害を被った町である。戦争の記憶を後生に伝え、風化させない取組を町として取り組んでいることもあり、本校でも、町の歴史民俗資料館の見学を行うとともに、地域の戦争体験者のお話を聞く機会を設けるなどの学習に取り組んでいる。意図的に、このような学習を設けることにより、地域の歴史を知り、当時の町民たちの生活に思いを馳せ、豊かな心を育むきっかけ作りに

なることを願っている。

2 職業体験を通して働くことの意義を考えよう（二学年）

本校では、第二学年において、毎年町内事業所の協力のもと、二日間の職場体験学習を行っている。生徒たちは、受け入れ先の事業所へ依頼状・礼状・履歴書の送付、マナー講座の受講、二日間の職場体験、職場体験学習のまとめと発表などの学習を行っている。これら一連の学習を通して、思考力・判断力・表現力を育むとともに働くことの意義や目的を考え、将来の自分の生き方を主体的に考えていくことにつながっていくものと考えている。なお、本校の職場体験学習のために今年度、町内一二の事業所の受け入れが決定している。

3 地域を知り、ふるさとに愛着と誇りをもとう（三学年）

一学年・二学年において、上級学校についての学習や将来の職業選択に関わる学習に取り組んできた。三学年では、「地域を知り、ふるさとに愛着と誇りをもとう」を主題に挙げ、学習に取り組んでいる。生徒たちは、本別町の概要について学んだ後、自ら「地域活性化」に視点を当てた、テーマをもとに提案型のレポートとしてまとめ、保護者や地域の方々に発信する学習を行っている。昨年度の発表で、生徒Aは、「町を活性化させる方法として」、「特産物を活用したお菓子のレシピ」を考案し、写真や作成の手順を分かりやすくまとめ、見る人に伝わりやすい提案書にまとめた。また、生徒Bは、「道の駅改善プロジェクト」というテーマを設定し、地域の木材資源を生かした斬新なデザインの道の駅を考案し、多くの観光客を集める方法について提案をまとめるなど、探究・提案・発信型の学びを進めている。

三 おわりに

本校の校訓は、「真剣」である。この校訓のとおり、授業や行事、部活動等に真剣に一生懸命取り組める生徒たちである。意図的な体験学習を通して、アウトプット主体の学習を展開し、生徒たちには確実に「思考力・判断力・表現力」や豊かな心を育んでいきたいと考えている。

特集

テーマ

学校教育の今日的な課題から

～更なる学校力の向上を目指して～

1

ふるさとを愛し 共生・共和・共栄の心を育み

未来の社会に貢献できる人材育成を目指して

～異校種間の連携による取組～

東川町立東川中学校 児玉賢一

2

思いやりのある豊かな心を育む教育活動の推進

～自己肯定感を高めるための開かれた教育課程～

八雲町立野田生中学校 植田資世

3

豊かな心身の育成に向けて

～多様な取組を通して～

函館市立赤川中学校 辰巳哲治



ふるさとを愛し 共生・共和・共栄の心を育み 未来の社会に貢献できる人材育成を目指して

～異校種間の連携による取組～

東川町立東川中学校 児 玉 賢 一

一 はじめに

1 東川町の概要

東川町は、北海道のほぼ中央に位置する、人口約八、五〇〇人の町である。町の東は「大雪山国立公園」の一部で、北海道の最高峰旭岳（標高二、二九一m）は、町域に所在している。大雪山から湧く豊富な地下水を生活用水として利用しており、北海道で唯一の「上水道がない町」として知られている。産業では農業や木工業が盛んで、お米をはじめ高原野菜や花々などの農産品を生産し、多くの家具職人が集い、その匠達が芸術性の高い家具を作り続けている。近年は、クラフトや写真などの文化・芸術的な仕事をする方や、カフェ等飲食店を営む方も増えている。昭和六〇年に「写真の町宣言」を行い、「東川町国際写真フェスティバル」「写真甲子園」といったイベントを開催し、写真文化首都としての町づくりに取り組んでいる。本年（令和六年）は、開拓一三〇年、国立公園指定九〇年、写真の町宣言から四〇年という記念の年を迎えた。

2 東川町教育

中学校は二校（生徒数二四二人）、小学校は四校（児童数五二八人）である。

東川町では「多様な子ども一人一人を尊重し 良さを伸ばし 自立を助け 生きる力を育む」を教育基本方針とし、①ふるさとを学ぶ、②学ぶ力をつける、③世界を学ぶ（教育課程特例校による新教科「グローブ（Globe）」の推進）の三つを重点施策として「生きる力の育成」に取り組んでいる。

二 本校の概要

1 教育目標

輝かしい未来を築くたくましい子

2 学級数・生徒数

	学級数	生徒数
一年	2	70
二年	2	74
三年	2	78
特別支援学級	5	20
合計	11	242

3 本校の特色

本校は、昭和二三年の学制改革により、新制中学校として開校した。東川町の中心部に位置し、町内小学校四校の児童が本校に進学する。未来を開拓する創造性を養うため、地域人材やICTを活用した学力向上、国際理解教育やキャリア教育、ふるさと学習などに力を入れている。中学校で生徒たちが三年間使用した椅子を卒業記念として持ち帰る取組「学びの椅子」が特徴的である。現在、学校と地域が一丸となり、部活動の地域クラブ化に取り組んでいる。

【特色ある教育活動】

○国際理解教育

・東川日本語学校、タイ留学生との交流会（全校）

・フィンランド・ピッコラ中学校との交流会及び交流授業（一、二年生）

○キャリア教育

・教育委員会主催のリップ・フェスティバルへの参加（全校）

○ふるさと学習

・田植え、稲刈り体験（二年生）

○食育

- ・ローカルズテーブル、東川食育プロジェクトによる講話（全校）＆テーブルマナー（三年生）

三 東中サイクルによる学力の向上

本校は重点目標を「自己実現に向け、積極的に工夫・支援する」と設定し、左記の「東中サイクル」による気づきや学びから体得に至る活動を経験させ、自己実現の達成を目指している。

学力向上について、メタ認知から始まる一連の「東中サイクル」を活動の軸に推進し、各教科においてICTを駆使し、このサイクルを回し続けることを目標に、積極的な授業改革を進め、指導にあたっている。

東中サイクル

- ①生徒自身が自己の資質・能力を知る（メタ認知Ⅱ客観的に自分自身を知る）。
- ②認知した自己の資質・能力を最大限に発揮すべく、新しい可能性や目標を考える。

- ③目標の達成に必要な具体的手立てや計画を考える。

- ④自己管理や改善の工夫等を通じ、行動・実践する。

- ⑤振り返り活動で成果を確認し、状況を把握する。

四 新教科「グローブ」幼・小・中・高連携

- 1 教科グローブ（Globe）について

(1) 教科の目標

自国や地域の文化や伝統への理解を深めるとともに、異なる習慣や文化をもった人々と共に生きていくために（多文化共生）、「人間尊重の精神を基調とする国際性」を養い、「国際社会に通用するコミュニケーション能力」の向上を図る。

(2) 指導内容

Local ローカル	自国や地域の文化や、伝統に根ざした自己の確立に関する内容
Global グローバル	多様な文化を受容し、共生することのできる態度の育成に関する内容
Communication コミュニケーション	英語をツールとした、グローバル社会で求められる円滑なコミュニケーション能力の育成に関する内容

(3) 授業時数

- ・小学一、二年生：年三五時間（生活科一五時間、学級裁量二〇時間）
- ・小学三、四年生：年七〇時間（外国語活動三五時間、総合三五時間）
- ・小学五、六年生：年一〇五時間（外国語七〇時間、総合三五時間）
- ・中学一～三年生：年一六〇時間（外国語一四〇時間、総合二〇時間）

2 研究との関わり

(1) 研究の経緯

・高校一、二年生：年一五〇時間（外国語一四〇、特活一〇時間）
・高校三年生：年一〇〇時間（外国語九三時間、特活七時間）
※全ての校種にALTを配置している。
また、地域人材としてCIR（国際交流員）やSEA（スポーツ国際交流員）を活用したり、東川日本語学校の留学生との交流を取り入れたりしている。

平成二九年度から令和三年度にかけて、幼児センター、小・中学校、高等学校で文部科学省の指定を受け、創設教科「グローブ（Globe）」の研究開発を行った。その後、令和四年度からは教育課程特例校として、新教科「グローブ」の実践研究に取り組んでいる。

(2) 校種間連携組織

①令和五年度は推進連絡協議会（教育委員会、各学校管理職、各学校グローブ担当教諭）を六回、推進委員会（教育委員会、グローブ担当教諭）を三回開催し、カリキュラムの見直し、グローブ研修会の企画、研究の成果と課題のまとめを行っている。
②各校のグローブ担当者でワーキンググループをつくり、指導方法や評価等について検討を行っている。

- ③ 小学校間を中心に、異校種間でも授業交流を積極的に行い、常にカリキュラムの改善に生かしている。
- (3) 研修会・研究大会の開催

① 新教科グループについて、異校種間との交流や体験を通して共通理解を図り、本町における国際教育への意識を高めることを目的に、夏季休業中に、東川の幼・小・中、高等学校の教職員を対象に、夏季研修会を開催している。

② 町教研事業として、町内教職員のグループへの理解と研究を深めることを目的に、「ふるさと東川を愛する心情を高め、人間尊重の精神を基調とする国際性を養い、国際社会に通用するコミュニケーションを育成する」を研究主題として、一月に東川の幼・小・中学校にて授業を公開し、研究大会を開催している。

四 一人一台端末活用に係る小・中の連携

1 ICTの活用推進について

- (1) GIGA推進委員会

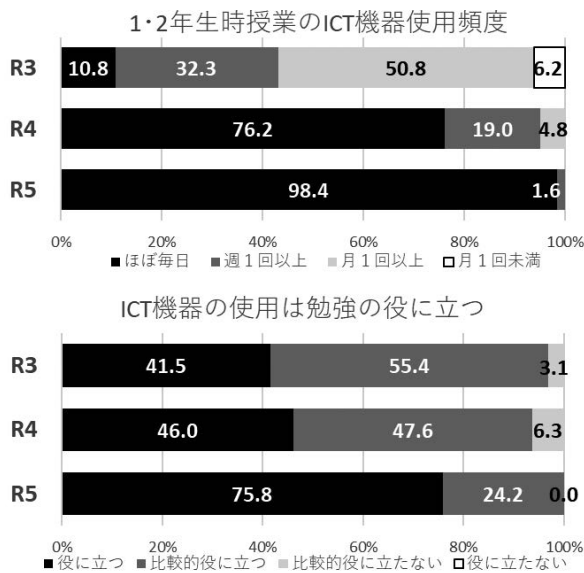
令和三年度より、教育委員会、町内小中学校の代表によるGIGA推進委員会が組織され、一人一台端末の整備が進められた。東川町では、iPadとタッチペン、キーボード付きケースを導入し、当初から家庭への持ち帰りを実施している。そのため、端末等の貸出

要領、使用のルール、セキュリティポリシー等についてGIGA推進委員会で取りまとめ、策定した。

今年度は、AI型タブレット教材（キュビナ）を東川町が導入し、活用方法について校内研修で取り組むとともに、夏季休業中の課題として活用している。

(2) 端末の活用状況

左のグラフは、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の設問で、一人一台端末導入前（令和三年度）から現在までの推移を表している。授業でのICT機器の使用頻度が劇的に高くなっている。また、生徒がICTの活用による効果を実感していることもデータに表れている。



五 おわりに成果と課題

1 新教科「グループ」について

- (1) 幼・小・中・高が連携してカリキュラムの作成及び改善を行うことにより系統的な指導ができた。また、グループの別業を作成し活用することで、日本文化や国際的視野を他教科、他領域でも意識して扱い、教科等横断的な授業の実践につなげることができた。

(2) 本校の課題としては、教頭、教務、グループ担当でカリキュラムについて協議させ、教科グループと総合的な学習の時間を中心に指導内容の整理、学年団との連携を図らせ、今後も持続可能なカリキュラムを目指し、改善を進める必要がある。

2 ICTの活用について

- (1) ハードウェア、アプリの導入から策定まで、GIGA推進委員会で協議し、町内小中学校で足並みをそろえながら環境整備を進めている。また、教育委員会と小・中学校が連携して進めることで、初期導入を円滑かつ素早く進めることができた。

(2) 現在、小学校に東川町ICT教育推進アドバイザーを任命し、ICT活用推進に関わって各学校を定期的に訪問し支援を行っている。将来的には、学校職員以外のICT支援員のような人材が必要かどうか、現在検討中である。



思いやりのある豊かな心を育む教育活動の推進

～自己肯定感を高めるための開かれた教育課程～

八雲町立野田生中学校 植田 資世

一 はじめに

本校は、北海道南部にある“日本で唯一二つの海をもつ町”二海郡八雲町の太平洋側にある野田生地区に位置している。国道5号線・JR・道央自動車道（落部IC）が走り、海と山に囲まれた自然豊かな地域である。「小中一貫型コミュニティ・スクール」として野田生中学校区にある小学校三校と連携した取組を深めながら、「地域とともにある学校」を通して「信頼される学校」を常に目指し、保護者・地域と連携・協働し、特色ある教育活動を展開している。現在、全校生徒数は二五人、各学年一学級と特別支援学級を合わせて五学級の小規模学校である。農業、漁業を営む保護者が多く、厳しくも協力的なPTAに支えられている。

二 本校の様子

本校は、ノーチャイムで学校生活を過ごしている。生徒たちは時間を意識しながらじめある生活をしている。また、生徒は大変真面目な態度、落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送っている。気持ちの優しい生徒が多い。人間関係は良好で、集団生活を通して連帯意識も高く、運動会、学校祭（野中祭）を

はじめ、各種行事等や部活動にも意欲的に参加している。規範意識も高い。

全ての教科の授業において、真剣かつ集中して臨み、教師の説明等をしっかりと聞きながら学習活動に取り組んでいる。授業中での挙手発言は多く、「総合的な学習の時間」等での学習成果の発表では、表現力の高い生徒が多い。クロームブックを毎日持ち帰り、宿題や授業での課題に取り組んでいる生徒が多くいる。今後は家庭学習の習慣を着実に定着させ、学習方法の工夫等が望まれる。

三 社会に開かれた教育課程

学校教育目標

- 【知】 自己を見つめ 自ら学ぶ
- 【徳】 思いやりのある 豊かな心
- 【体】 強い意志 たくましい体

本校では「思いやりのある豊かな心」を育むために、経営方針の重点として生徒指導において「一人一人を大切にしたい自己肯定感を高める指導」に取り組んでいる。しかし、学校規模や地域の環境を考えると学校だけで完結できるものではない。そこで本校は校外

との様々なつながりを生かした取組を推進している。特に役場、町教育委員会のリーダーシップによるものが多い。以下は町教育委員会と役場、コミュニティ・スクール、他校等のつながりによる実践である。

○上智大学との交流授業

八雲町が上智大学との連携協定を締結していることから中学生との交流授業が令和四年度から始まった。本校も今年度から、上智大学生の交流授業に参加した。大学生とも臆せずに話し合い、意見が交わされる時間があり、貴重な経験となった。今後は修学旅行で東京の上智大学を訪れ研修する計画もある。

○ピア・サポート

八雲町では町内の小中学校全てで取り組んでいる活動である。スクールカウンセラーの全面的な協力を得て、教職員研修から始まり、各校でトレーニングが行われる。本校では生徒会がこれまで実施してきたいじめ撲滅集会をピア・サポート集会に移行する動きがある。お互いに思いやり、助け合い、支え合う人間関係を育むことで自己肯定感を高め、いじめや不登校の状況改善にもつながっていききたい。



CS 1日防災学校



道徳遠隔授業

○コミュニティ・スクール
八雲町は小中一貫型CSとして取り組んでおり、野田生中学校区CSは校区内の小学校三校とつながった活動をしている。今年度は一日防災学校を中学生にリーダーシップをとらせながら四校合同で実施したり、前述のピア・サポート活動も中学生がリーダーとなって実施したりした。異学年活動は小規模校にとって有効な教育活動であり、思いやる心の醸成につながっている。



上智大学交流授業



ピア・サポート活動

○遠隔での道徳授業

今年度は「学校力向上に関する総合実践事業」に協力する形で函館市の中学校とオンラインによって道徳授業を実施した。オンライン上でグループに分かれ、意見交換を行った。普段決まった少数の仲間との会話が多い中、他地域に住む中学生との交流は生徒たちにとって大きな刺激となった。

○行事での縦割り活動

本校は少人数ながらも充実した内容の行事を行っている。五月には運動会があり、ほぼ全ての種目、応援合戦は縦割りの異学年活動となる。応援の内容、種目の作戦、練習内容等は全て生徒たちが決めて実践する。九月の学校祭も同様で、全校合唱のパート活動、ステージ発表、模擬店活動等も異学年の集団がリーダーを中心に活動する。



運動会競技作戦会議



異学年集団の取り組み

○Google社との連携授業

八雲町では令和四年度からGoogle社と提携し、プレゼンテーションについてアプリの使い方から題材の探し方、聴き手の心をつか

む言葉の使い方などについて数回にわたる授業で学ぶ。本校は本年度より実施する。最終的には自分で考えた課題について準備し、プレゼンを行う。コミュニケーションの方法が身に付くこと、その方法自体に広がりをもつことは生徒の生活環境に幅をもたせることとなる。

○平和学習広島派遣

毎年町内中学校から代表が参加し広島平和記念式典への出席と諸施設の見学学習を行う。本校からも一人が選出され広島に赴き学習。その後は派遣仲間と事後のまとめづくりを行い、それぞれが自分の学校でまとめ発表を行う。心に刻まれた平和への思いを語る。また、八雲町戦没者追悼平和記念式にも参加し「平和への誓い」を行う。これらの体験を基にしてそれぞれが命について、平和について思いや考えを深める。



平和学習広島派遣



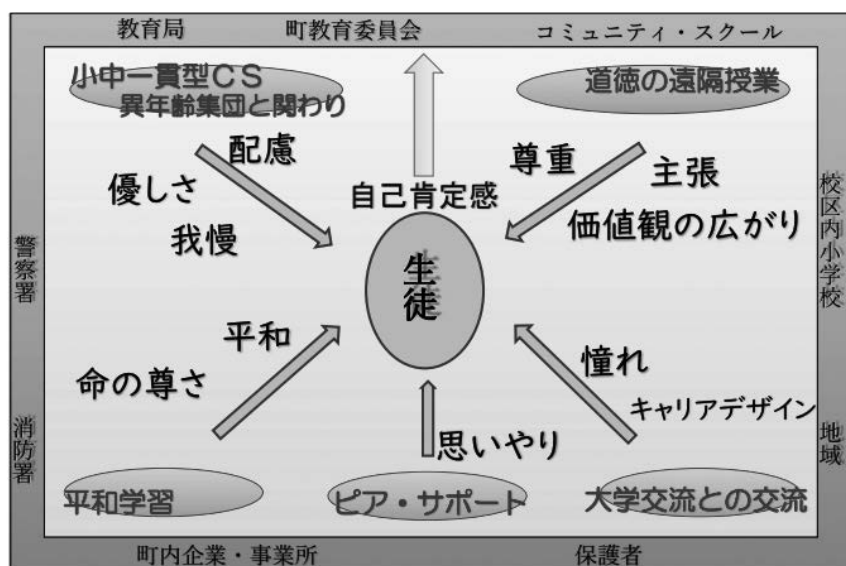
異年齢集団との関わり

四 外部から刺激を受ける

先述した通り、小規模学校が様々な教育活動を企てようとした際、外部とのつながり

と協力は必須である。生徒は保育所の頃より同じメンバーで育ってきているため、ある意味人間関係も崩れない強固なものとなっている。つまり自分のキャラクターを変えることはなかなか難しいのである。そこに必要なことが外部からの刺激である。

《イメージ》



多種多様な刺激が生徒の心をつつき、くすぐる。それらを準備していくために外部とのつながりを持つ。当たり前のことだがそのために本校にとっては町教育委員会とのつなが

りが重要であり、先述のように様々な面でのサポートを受けている。日常的に情報やビジョンを細かく共有していることはやはり重要である。また、八雲町は中学校区ごとに小中一貫型コミュニティ・スクールを設置している。野田生中学校区は校区内の山越小学校・野田生小学校・東野小学校の三校とともにCSを運営している。すでに組織化され、小小連携による農業体験や四校での合同「旗の波作戦」、さらに今年度は「合同一日防災学校」と「小中ピア・サポート活動」が始まっている。これらの活動を通じて成果の一つは校区内教職員の交流である。小学校の教職員は中学校にあれば自分たちが送り出した子供たちの成長した姿を目の当たりにし、中学校職員との会話（情報共有）が弾む。また、教職員だけではなく保護者についても交流の幅が広がる。田植え体験に中学校長が顔を出せば「校長、中学生も参加させたらどうだ？（小学校時に自分たちが）やり方は仕込んであるから」と笑顔で話しかけてくれる。本校区は地域で子供たちを育てているということを実感できる。



CS 田植え体験



CS 稲刈り体験

五 終わりに

年度初めから生徒に伝え続けていることは「自分で考えなさい」そして「脚下照顧」。秋になり次のステップは「自分で決断しなさい」であることを全校生徒に伝えた。外部と関わり、多くの体験から刺激を得るも、自分で考えなければ身にならない。心が豊かにならない。多くの刺激は、自分は何者か、どこに行くか、何を成すか、他者とどう関わって生きるかの道しるべとなる。これによって生徒は自己肯定感の醸成とともに自分の人生をデザインしていく。このデザインこそが豊かな心を育むことの目的であると考えている。

小中一貫型CSで一日防災学校を実施した際に、模擬避難所運営を行った。中学生が運営者として避難者たる小学生を案内する場面で、急なサプライズとして飲料水の提供を行った。避難者受付の最中での提供に中学生はどう処理をするのか。この時本校の職員は誰も動かず、じつと生徒たちを見つめた。生徒たちは慌て焦るも状況を考え、相談を始め、その配布方法を決めて動き出した。

学校はこのように様々な外部との機会を準備設定し、教師は生徒が考える姿をじつと見つめワクワクしながらその子の言葉、決断、行動を待つ。日常でこんな取組を繰り返すことが豊かな心を育てることと信じてまた新たな仕掛けを考えていく。



豊かな心身の育成に向けて

～多様な取組を通して～

函館市立赤川中学校 辰 巳 哲 治

一 はじめに

本校のある函館市は、室町時代の一四五四年ころより「箱館」と呼ばれるなど、北海道でも早くから開け、明治二年（一八六九年）、蝦夷が北海道となり、「箱館」も「函館」に改められた。地勢的には、渡島半島の南東部に位置し、三方を太平洋・津軽海峡に囲まれており、一八五九年の開港以来、外国の文化がいち早く入るなど、港町として有名である。また、市区町村の魅力度ランキングでは、過去一〇年で一位に五度選ばれるなど、観光都市としても全国的に有名であり、観光客数も年間、五〇〇万人を超えている。

また、二〇〇四年には、近隣の戸井町・恵山町・榎法華村・南茅部町と合併し二〇二一年には、南茅部地区の縄文遺跡を含む北海道・北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産に登録されるなど、函館の新たな魅力となっている。公立の学校数は二〇〇五年頃には、小学校四八校、中学校二八校であったが、少子化により統廃合が進み、現在、小学校は三八校、中学校一八校、義務教育学校が一校となっている。

本校は、函館市の中心部の町並みを見渡せる郊外に位置し、今年度で開校四五年目である。本校でも少子化の影響から、平成元年に

は九〇〇人を超えていた生徒数が、現在では二七〇人、一・一学級（特別支援級三学級を含む）となっている。

二 本校の様子

全国体力・運動能力、運動習慣等調査からは、左の表のようになっている。

項目	男子			女子		
	全国	全道	本校	全国	全道	本校
1 高度肥満傾向・中等度肥満傾向出現率（％）	5.7	8.3	13.0	3.2	4.5	3.8
2 体力合計点（平均値）	41.2	39.9	37.2	47.7	45.2	38.4
3 運動やスポーツをすることは好きですか（「好き・やや好き」の％）	88.6	89.5	89.9	76.4	76.2	80.4
4 運動やスポーツは大切なものですか（「大切・やや大切」の％）	92.4	93.2	94.0	84.2	84.6	87.9
5 中学校卒業後、自主的に運動やスポーツをする時間を持ちたいと思いますか（「思う・やや思う」の％）	86.0	86.2	88.4	77.9	76.8	77.8
6 保健体育の授業は楽しいですか（「楽しい・やや楽しい」の％）	90.2	91.6	95.0	83.2	84.0	87.2

全国体力・運動能力、運動習慣等調査より
（各数値は令和3年から5年までの平均値）

項目1の体格「高度肥満傾向・中等度肥満傾向」では、男女ともに全国より割合が高く、項目2の実技「体力合計点」では、全国・全道よりも低いことが分かる。

また、項目3・4・5・6の生徒質問紙からは、男女とも全ての項目において、全国・全道より同程度か、上回っていることが分かる。特に、項目6の「保健体育の授業」に関しては、男女ともに大きく上回っているのが分かる。

次に、本校におけるここ数年の部活動への加入状況だが、下の表のようになっている。生徒数の減少により運動部の部活動数が減っていることも影響していると思われるが、それ以上にコロナ禍を境に減少傾向が顕著に見られる。

年度	運動部加入率（％）	部活動（運動部＋文化部）加入率（％）
R3	51.1	69.4
R4	42.8	66.1
R5	37.1	64.0
R6	33.0	61.9

部活動加入率推移

二つの表からは、運動部の加入率が減少すること、放課後や休日に運動を行う生徒数が減少し、体格・実技においても厳しい結果となっていることが予想される。そこで本校では数年前より、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ資質・能力を育成し、心身の健康の保持増進を図ることを目的として、まずは少しでも「体を動かすこと」または「苦手意識などによる消極的な姿勢について」、改善・継続を図っていくことに重点を置いた取組を行ってきた。

三 重点的な取組

経営の重点については、「豊かな心・健やかな体の育成」「地域学校協働活動の推進」を据え、保健体育科や、地域との連携を中心にここ数年取り組んでいる。

1 保健体育科での取組

運動することに苦手意識をもっている生徒が、体育実技での活動において、まずは「できるかもしれない」「やってみよう」と思えるように意識を変えさせることが大切である。

また、せっかく「やってみよう」と取り組んでも、様々な活動での生徒同士の関わりから、消極的な気持ちに戻ってしまうこともあり、それらを未然に防ぐための取組や、さらに体育理論と実技をしっかりと結び付けさせるなど、年間を通して展開していくことで、生徒の個々の意識を変え、「その気にさせ続ける」指導を行っている。具体的には、以下の(1)～(4)の取組を行っている。

(1) ルールや場・道具の工夫
運動する子供とそうでない子供の

二極化傾向が言われて久しい。実際に本校においても、体育実技において、生徒の主体性に大きな差が見られる。そこで、生徒が活動を行う前の不安等の解消のため、それぞれの実技の領域において、コートの広さ、ネットの高さ、扱いやすいボールの採用など、生徒の実態に合わせて工夫しながら行っている。その工夫については、学年ごとや、学習集団の違いにより学級ごとに変えることもある。

(2) 「仲間意識」の醸成

一つの学習集団において、生徒個々の得手不得手に関係なく、全体で支えあえる学習集団づくりをオリエンテーションの段階からしっかりと意識させ、取り組んでいる。これらにより、互いを認め合う賞賛の声に助けられたりするなど、「やってみよう」という気持ちが折れることなく、安心して様々な活動に継続して取り組めるようになってきた。またこれらは、相手の気持ちを考えることなど、心の成長にもつながっている。

(3) 体育分野（体育理論）の充実

運動やスポーツの意義や多様性など、その基礎的な知識は、意欲や思考力、運動の技能などの源となるものである。そこで、体育分野における体育理論において、運動の大切さを丁寧に指導し、生徒一人一人にしっかりと理解させることで、苦手意識から「やってみようかな」という気持ちの変化へと結びつけている。

(4) 学校行事「体育祭」との連携

2

地域との連携
本校において、運動部の加入率の減少か

○令和元年度 体育祭種目

・個人種目

一〇〇M、二〇〇M、

八〇〇M、ボール投げ、

走り幅跳び

・団体種目

学級対抗ムカデリレー、

学級対抗長縄跳び、

学級対抗リレー

○令和六年度 体育祭種目

・団体種目

長縄跳び、綱引き、

ハリケン、二人三脚、

ムカデリレー、玉入れ、

委員会企画（部活動対抗リレー）、

学級選抜リレー

右の令和元年度と六年度の体育祭種目を見ていただくと分かるように、現在では、そのねらいを大きく変えている。以前までは、陸上種目が中心であり、保健体育の時間での取組を、体育祭を通してさらに高めていくことに重きを置いていたが、現在では、異学年交流（縦割り活動）や、仲間と運動することを楽しむことを中心に据えている。

具体的には、運動の得手不得手に大きく関係しない種目や、「ノーサイドの精神」を育むための縦割りチーム、生徒による企画などの種目で行っている。

ら多くの生徒にとつて少しでも、「体を動かす」機会や場の充実が必要であると考えた。そこで、総合文化部という様々な活動を行う部活動を創設し、学校運営協議会と連携した地域学校協働活動を、総合文化部の活動の一つとして位置づけている。また、児童館と連携し、中学生の運動の場の確保や、PTA活動において、新たに保護者と生徒がともに運動する機会を設けるなど、まずは「体を動かすこと」に向け、次の(1)～(3)のような様々な取組を推進している。

(1) 総合文化部の創設

生徒数の減少により、既存の部活動を削減した令和二年度に、生徒の実態に合わせて様々な活動を行う「総合文化部」を創設した。この部活動は、複数の顧問で担当し、平日は週一回程度の活動で、調理やものづくり、美術の作品制作などを行っている。土日においては、活動が可能な部員を中心に、校区の児童館や町会の行事のお手伝いの要望にそって活動を行っている。

土日の活動は、当初はコロナ禍でもあり、地域の活動自体が少なく、その連携はあまり見られなかったが、毎年の実績とともに年々増え、今年度の活動は九月末現在、以下のようになっている。これらの「体を動かす」活動以外にも含めると、土日の活動は、平均月二回程度となっている。

部員は今年度四〇人を超えており、生徒にとつては、激しく体を動かす運動ではないが、これらの活動を通して町会

や児童館の関係者より感謝されるなど、

○令和六年度

総合文化部 地域連携活動実績

・児童館 二回

・お祭りなど

・町会 六回

何か人のために活動する(体を動かす)ことの喜びや達成感・充実感などを体感することで、豊かな心の醸成だけでなく、「体を動かすこと」への抵抗が減少されるものと思われる。

(2) 地域との連携

本校の校区には、児童館が二カ所あり、多くの生徒が、小学生のときより利用している実態がある。しかし、中学生が利用する場合、体の大きさや身体能力の違いなどから、小学生の利用に影響が出ないようにすることの難しさが課題としてあった。そこで現在では、二つの児童館が開館時間を延長する曜日を設定するなどして、中学生の利用時間を確保している。これにより、部活動に加入していない生徒が放課後にバスケットボールを行うなど、運動を行う場が充実されてきている。また、生徒の様子を児童館と学校で共有するなど、生徒の健全育成にも結びついている。

(3) PTA活動の推進

少子高齢化の影響もあり、コロナ禍を境に、一度減少した町会による子供が参加する活動が全て戻っていない状況である。そこで今年度、PTAの取組として

保護者と生徒、教員が参加してのスポーツレク(ミニソフトバレーボール大会)を行った。三者が同一のチームを構成し活動を行うことで、運動機会の充実以上に「親睦や信頼」という視点での成果が多く見られた。次年度以降も教師・保護者にとつても無理がないように継続していく予定である。

四 今後について

本校において、「運動やスポーツ」への意識は、ここ数年の取組で改善されてきていると思われるが、体力合計点にははつきりとその成果が見られていないのが現状である。また、全国体力・運動能力、運動習慣等調査から、「平日に一日あたり、テレビやDVDゲーム機、スマホ、PCなどの画面を見ている時間」における三時間以上の生徒の割合が、全国同様に、本校でもここ数年、上昇している。さらに、その数値は全国・全道を上回っている。これは、土日においても同様の傾向が予想される。

今後、本校では、保護者・地域と連携しながら、心と体を一体として捉え、健康の保持増進に向け、家庭での過ごし方も含めて、様々な視点から生徒の成長に向けた取組を試みていきたいと考えている。

今年 の道中

第六五回

北海道中学校長会研究大会 十勝・帯広大会を終えて

札幌市・北辰中 新津 智哉

(研修部長)

一 はじめに

第六五回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会は、大会主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる 中学校教育と十勝の大地から 新しい時代を生き抜く子供を育む 確かな学校経営の推進」を掲げ、九月二十七日から二十八日の二日間、盛大に開催された。令和二年度からの四か年継続研究の最終年として、小樽大会の成果を踏まえ、堅実に研さんを積むことができた大会であった。

開会式で、河村克也会長は「大会主題の実現に向け、参加された皆様が『子供を主語とした教育活動』の実現に向けて『思いを一つに』できる機会としましょう」と挨拶された。また、久保睦則大会実行委員長からは、大会開催にあたっての熱い願い、参加者への歓迎と関係各位への謝意、そして大会成功を期する御挨拶があった。

二 全日中会長情勢報告

全日本中学校長会会長青海正氏からは、「学習指導要領の実装」「教育振興基本計画（第四次）」「国の動向」「全日本中学校長会の目的と使命」という四つの内容を中心に、教育情勢について説明をいただいた。

三 分科会

午後からは、五つの分科会に分かれ、各研究主題のもと提言が行われ、研究の視点に基づき熱心な協議が行われた。

【第一分科会】「社会に開かれた教育課程」の実現

◎研究の視点 人間として調和のとれた育成を目指す教育課程の編成・実施

1 生徒の心身の発達の段階や特性の把握と教育課程への反映

2 学校や地域の実態に即した適切な教育課程の編成・実施

◎提言者 美瑛町立美瑛中学校 金山 達也 校長

上川中部地区では、調和のとれた児童生徒の育成を目指し、地域の願いや実態に応じて、育成を目指す資質・能力の重点化を、教育課程の中に位置付け、取組を進めている。「生徒の発達や特性」と「地域の願いや実態」のそれぞれに応じた教育課程の編成・実施に、校長がリーダーシップを発揮し取り組んでいる実践が発表された。

【第二分科会】新たな時代に求められる資質・能力の育成と学習評価の充実

◎研究の視点 地域に根ざした特色ある教育活動の推進

1 地域に根ざした教育力を活用した学習習慣の確立と充実

2 小学校と中学校との連携や小中一貫教育を目指した学力向上

◎提言者 帯広市立川西中学校 村上 達也 校長

校長の責務は、学校を取り巻く状況を把握し、学校内外の関係者の相互作用から学校の教育力を高め、教育活動の充実を図ることである。これらを踏まえ、「学び、専門性を高め合う校長会」を合い言葉に、「校長こそ『未来を創造する力』が求められる専門職」であるとの自覚のもとに研究を進め、校長のあるべき姿を追求してきた帯広市中学校長会の研究実践が発表された。

【第三分科会】豊かな心と健やかな体を育む教育の充実

◎研究の視点 自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実

1 不登校やいじめ問題、命を大切にする指導への組織的な対応の在り方

2 家庭や地域社会及び関係機関、専門家等との連携・協力を密にした生徒指導の推進

◎提言者 函館市立桔梗中学校 池田 浩司 校長

函館市中学校長会では、魅力ある学校風土の創造を目指して、生徒が主体の自治的な教育活動を取り入れ、自己肯定感の向上や望ましい人

間関係づくりに取り組んでいる。「教師が育てる学校から生徒が育つ学校」への転換が、多種多様な生徒指導課題の克服につながると考え、プロアクティブ型の取組を教育活動全般に散りばめた実践・研究が発表された。

【第四分科会】多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成と働き方改革の推進

◎研究の視点 勤務時間を意識した働き方の推進と学校運営体制の充実

1 ワークライフバランスを意識した働き方の推進と教職員の意識改革

2 働き方改革を推進する組織運営体制の見直しと校長のマネジメント

◎提言者 小樽市立望洋台中学校 山本 俊次 校長

多様な教育課題の解決に向け、限られた時間を効果的に活用できる力をもった教員を育成し、それを支える学校組織体制を充実させる必要がある。学校経営組織の機能化と業務改善について、小樽市校長会が掲げるテーマ「自走と共走」をもとに推進してきた具体的な改革と実践について発表された。

【第五分科会】家庭・地域や校種間における連携・協働の推進

◎研究の視点 学校の教育活動と関係機関等と連携した学校経営

1 地域や関係機関等との連携による学校経営の充実

2 教職員の意識改革と関係機関と連携した人材育成による指導力の向上

◎提言者 別海町立上西春別中学校長 蝦名 武宣 校長

家庭・地域・異校種間における連携について、特に研修、教育課程改善、学力向上や授業改善を媒介とした小中連携について成果を実感している。地域や学校と連携・協働を機能させ学校経営の充実を図るために、お互いの立場や違いを認め、課題を克服しつつ協力し合う関係づくりを推進していきたいという発表があった。

四 全日中提案概要説明

第七五回全日本中学校長会研究協議会岩手大会の第六分科会「多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成」において提案される二人

の校長から、提案内容の概要説明が行われた。

◎提案者1 旭川市立神居東中学校 坂東 裕美 校長

「地区校長の連携による組織的な取組の推進」

◎提案者2 留萌市立港南中学校 田谷 典久 校長

「子供たちのウェルビーイング向上の実現を目指す校長のマネジメント」

五 文部科学省講話

◎演題 『なぜ令和の教育改革なのか なぜGIGAスクール構想なのか？』

◎講師 武藤 久慶 氏（文部科学省初等中等教育局教育課程課長）

様々な資料を御提示いただき、教育改革の意義や背景を共有しながら、次期教育課程を念頭に、教育DXをどのように進めていくべきか御講演いただいた。

六 記念講演

◎演題 『田中賢介は、なぜ学校を作ったのか？』

「プロの世界で学んだ「田中学園流マネジメント」」

◎講師 田中 賢介 氏（田中学園立命館慶祥小学校 理事長）

日本ハムファイターズの今年の活躍ぶりから始まり、御自身の選手生活、ベネズエラでの経験から学校設立まで至った経緯など、様々な話題が満載の講演会だった。

七 おわりに

全道各地から三二人の会員が参集し、各地域の実践を持ち寄り、熱心な研究協議を重ねることができた。主管いただいた十勝小・中学校長会、副主管の帯広市中学校長会をはじめ、お力添えをいただいた関係各位に改めて感謝申し上げ、次期開催の道中研胆振・室蘭大会の成功を祈念し、本年度研究大会の報告とする。

自分を敬愛し他者と協働しながら 自己実現を図るための

自己指導能力を育成する生徒指導の充実 地区校長の連携による組織的な取組の推進

旭川市・神居東中 坂 東 裕 美

I はじめに

近年、子供たちを取り巻く環境が大きく変化する中、いじめや不登校など、生徒指導上の諸課題が一層深刻化しており、憂慮すべき状況にある。そのため、各学校においては、問題行動等に係る特定の児童生徒への対応はもとより、全ての児童生徒を対象とした、課題予防的生徒指導や課題未然防止教育とともに、良さや可能性の伸長と社会的資質・能力を育む教育が求められている。

そのため、旭川市中学校長会では、令和四年度から、本市の実情も踏まえつつ、いじめ問題等への対応の充実に向けて、自発的・主体的に課題を解決しようとする態度の育成とともに、各校長の共通理解に基づく生徒指導の推進を目指し研究を進めてきた。

II 地域の状況

旭川市は広大な北海道のほぼ中部に位置し、札幌市に次ぐ北海道第二位の人口（約三十二万人）を有する中核市である。全国的に広く知られる人気スポットの「旭山動物園」、アイヌ文化の営みが根付く日本遺産など、観光都市としても知られている。また、農業はもとより、旭川家具をはじめとした木工業も盛んである。

一方で、本市においては、令和二年度末に市立中学生が亡くなった事案について、いじめの重大事態として、第三者による調査等が行われた。その結果を各学校の校長が自分事として重く受け止めこれまでの取

組を見直すとともに、本市の小・中学校の両校長会が互いに連携し、保護者や地域・関係機関の協力のもと、子供一人一人の人権が尊重され、健やかに成長できる教育の推進に取り組んでいる。

III 実践の概要

1 研究のねらい

旭川市中学校長会は、旭川市における中学校教育の意義とその役割の重要性を深く認識し、旭川市の実態に立脚した「信頼される中学校教育の創造」に向けて取組を推進してきた。本研究についても、本市の実態を踏まえ、旭川市教育委員会等の行政機関や関係団体との緊密な連携のもと、いじめ問題への対応など生徒指導の充実を目指し、本市の教育課題の解決に資することをねらいとした。

2 研究の視点・内容

令和二年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省）の結果では、全国の中学校における生徒一、〇〇〇人当たりのいじめの認知件数は二四・九件であった。一方で、市立中学校の生徒一、〇〇〇人当たりの認知件数は四・五件であり、本市のいじめの認知件数は極めて少ない状況であった。

この調査結果等を鑑み、いじめ防止対策推進法の趣旨及びいじめの定義に対する教職員の理解を一層高めていくことや、同法第二二条に規定する学校いじめ対策組織など、組織として機動的に対応できる体制を強化することが必要との認識に立ち、旭川市中学校長会では、令和四年度からいじめ問題に係る国や北海道の動向に関する情報収集や情報提供等を担う「いじめ対策プロジェクト協議会」を新設することとした。

また、令和五年度からは、「いじめ防止への主体的・組織的な取組」を運営方針の柱の一つに据えるなど、校長のリーダーシップと

対応力の向上が何よりも重要であるとの認識を共有した。さらには、自校の取組の充実のもとより、全市的な視点に立って、いじめ防止教育の推進や教職員の意識改革と指導力の向上に向け、次の取組を進めてきた。

(1) 校長としての資質向上を図る取組の充実

① 中学校長会議・研修会におけるいじめ対応等に係る継続的な研修の実施

② 「いじめ対策プロジェクト協議会」による情報収集や各校長への情報提供

(2) いじめ防止教育の推進

① 「生活・学習A c tサミット」における代表生徒の協議の場の設定

② 「旭川市いじめ防止対策推進条例」について生徒が学ぶ機会の設定

(3) 教職員の指導力向上に向けた取組の推進

① 教職員対象のアンケート調査の実施

② 生徒指導担当者が参加する会議での情報提供やミドルリーダー向け講話の実施

Ⅳ 具体的な実践

1 校長としての資質向上を図る取組

(1) 旭川市中学校長会「二月研修会」

旭川市中学校長会では年間十二回の会議・研修会を計画しており、六月と二月については、行政機関等の外部の講師から学ぶ研修会を実施している。令和四年度の「二月研修会」



2 いじめ防止教育の推進

(1) 「生活・学習A c tサミット」

本市では、平成二十八年度から、各中学校の生徒の代表が一堂に会し、関係機関の職員や専門家の助言のもと、生活や学習環境の改善に向け自分たちができることなどを協議する「生活・学習A c tサミット」を開催してきた。平成二十八年度は、ゲームなどメディア接触時間が長いといった課題を踏まえ、生徒によるアウトメディアのガイドラインの作成や、令和二年度は、コロナ禍で奮闘する医療従事者への応援メッセージを市内の基幹病院に送る取組などを行った。



は、旭川市教育委員会学校教育部次長を講師として招聘し開催した。本研修会を通じて、いじめを含めた本市の生徒の不適応行動に関する現状や、いじめの早期発見、早期対応に向けた校長のリーダーシップの在り方とともに、チーム学校として機能する組織体制づくりや、いじめ防止に資する教育活動の充実について理解を深めることができた。

(2) 校長の継続的な研修機会の確保

旭川市教育委員会では、令和五年度から、定期的な児童生徒のストレスチェックの実施やいじめ事案（疑いを含む）の週ごとの報告など、いじめ防止対策に係る数多くの新規の取組や事業を行っているが、「いじめ対策プロジェクト協議会」における情報提供等により、各学校の取組の円滑な推進につながっている。

令和三年度からは、「旭川市いじめ防止対策推進条例」に盛り込むべき内容についての協議や、いじめ防止に向けた生徒会主催の取組の交流などを行ってきた。その成果を各中学校の生徒会の実践に生かすとともに、校区の小学校との連携による取組を進めている。

(2) A中学校の実践「いじめノックアウト」

「旭川市いじめ防止対策推進条例」制定の趣旨や人権意識の醸成を図ることをねらいとして、同条例について事前に学習した生徒会役員を中心とした中学生が、条例の解説映像を制作するとともに、隣接する小学校において、六年生児童を対象とした出前授業（ワークショップ）を実施した。

【成果と課題】

・小・中学生双方にとって、いじめを自分事として捉え、望ましい人間関係を築くことの大切さについて一層理解を深めることができた。

・小学生にとっては中学校入学への安心感、中学生には小学生の手下としての意識や自己有用感の向上につながった。

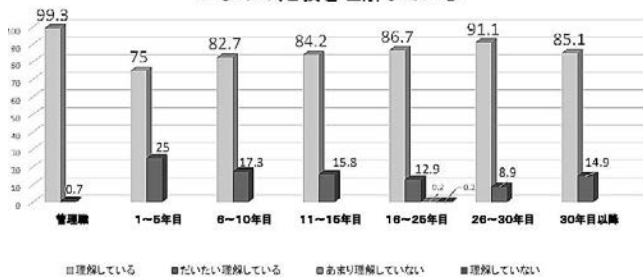
・イベント的な一過性の実践にとどめることなく、取組が継続し発展する仕組みの構築を目指す必要がある。

3 教職員の指導力向上に向けた取組の推進

(1) 教職員対象のアンケート調査の実施

令和四年六月に、旭川市教育委員会と連携し、いじめ対応に必要な知識に関する教職員の理解の状況について把握するため、中学校教職員を対象にア

いじめの定義を理解している



V 成果と課題

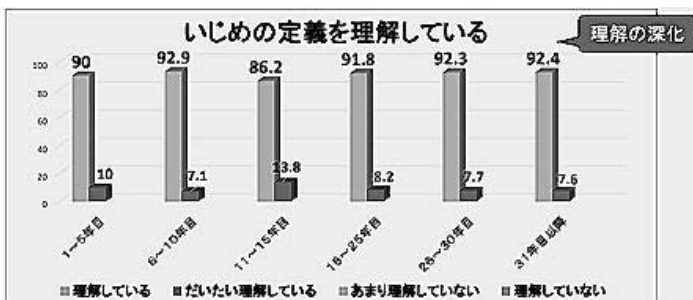
1 成果

アンケート調査を行った。その結果、いじめの定義について、「理解している」「だいたい理解している」を合わせた回答の割合は100%であったが、「だいたい理解している」との回答が各経験年数層で9%～25%にのぼり、理解が十分ではないことがわかった。一方で、九九・三%の管理職が、自校の教職員は「理解している」と回答しており、教職員の現状と管理職の認識の差が浮き彫りとなった。

(2) 教職員の研修機会の確保・充実

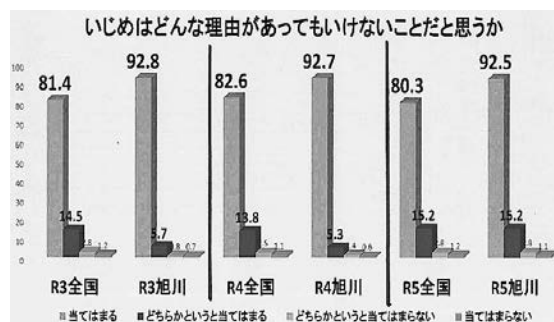
上記アンケート調査の結果などを踏まえ、旭川市中学校長会では、自校において、年度当初に学校いじめ防止基本方針やいじめの定義を確認する研修を実施するとともに、年間を通じて、教職員の対応力を高める取組を実施することとした。また、小学校長会とも連携して、市内を八地区に分けたブロックごとにミドルリーダーを対象とした研修会の開催や、生徒指導担当者が参加する会議での情報提供等を行うなど、全市的な視点に立ち、教職員の研修機会の充実に努めている。

いじめの定義を理解している



- (2) 令和六年二月に再度実施した教職員を対象としたアンケート調査において、いじめの定義を「理解している」と回答した割合が前回調査の結果と比較し増加しているなど、いじめ対応に必要な知識に関する教職員の理解の深化が見られた。

- (3) 全国学力・学習状況調査の生徒質問調査で「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思うか」の質問項目に「そう思う」と回答した生徒の割合が、「生活・学習Actサミット」を開始した平成二十八年度以降増加傾向にあったが、近年、その傾向が一段と高まっており、生徒のいじめを許さない意識の醸成がうかがえる。



2 課題

- (1) 人事異動等により会員が大きく入れ替わることを想定し、いじめ問題への校長の危機意識を維持しマネジメント力を高める取組を今後も継続する必要がある。
- (2) 本市のこれまでの取組の成果を生かし、生徒主体のいじめ防止活動の更なる充実を図り、今後もいじめに向かわない態度の育成に取り組む必要がある。
- (3) いじめのみならず、不登校やその他の生徒指導上の諸課題の解決に向けて、発達支持的生徒指導を基盤として、生徒同士の望ましい人間関係の構築に努め、誰もが活躍できる居場所のある学校風土の醸成を一層推進する必要がある。

Ⅵ 終わりに

令和三年度以降、学校、家庭、地域、行政が連携し取り組んできたいじめ防止対策の成果が少しずつ表れてきてはいるものの、まだ緒にのたばかりである。今後も、旭川市中学校長会は、いじめ問題への対応を切り口として、生徒一人一人を大切に自己実現を支える教育が一層推進されるよう研さんに励み、基本理念「信頼される中学校教育の創造」の実現を目指す。

自分を敬愛し他者と協働しながら

自己実現を図るための

自己指導能力を育成する生徒指導の充実

～子供たちのウェルビーイング向上の

実現を目指す校長のマネジメント～

留萌市・港南中 田 谷 典 久

I はじめに

生徒指導提要在十二年ぶりに改訂され、令和四年十二月に公表された。改訂のポイントとして、「学校内外の連携・協働に基づく『チームとしての学校』を実現した生徒指導体制の構築」が挙げられている。

また、学校だけでは解決が難しい課題に対しては、専門家や関係機関、保護者、地域と連携し、組織的な学校運営が求められていることから、これまで以上にチームとして取り組むとともに、不登校への対応やいじめ問題の撲滅を目指すためにも、学校における子供たちのウェルビーイングの向上を実現させていく必要がある。

II 地域・学校の状況

北海道では、ベテラン教員が都市部へと流出し、地方の中学校においては、初任層教員の割合が高くなるため、学校としての生徒指導面で苦慮するケースが多い傾向にある。特に、留萌管内においては、町村内に小・中学校がそれぞれ一校ずつしかないため、生徒の人間関係の固定化による指導の困難さも課題として挙げられる。

一方で、離島の小中併置校を含め、わずか十一校しかない管内の中学校が、生徒指導連絡協議会などを通じて、生徒指導研修や情報交流により横のつながりを強化しつつ、課題解決に努めている。今後は、小学校

も含め、一部の問題行動への指導のみならず、全ての生徒を対象にした発達支持的生徒指導により、共感的人間関係の形成や自己指導能力の向上を目指し、誰もが安心して過ごせる学校づくりを目指している。

III 研究の概要

留萌管内小中学校長会では、「教育振興基本計画（第四期）」を基にして、研究主題を「持続可能な未来社会の創り手を育て、ウェルビーイングの向上を目指す留萌の小中学校づくり」、副題を「校長のリーダーシップを基盤とした、未来志向の学校経営を図る校長の手だて」と設定し、研究部提言発表や会員全員による個人実践レポート交流を主な取組として推進している。本実践は、「学校内外の連携・協働に基づく『チームとしての学校』を実現した生徒指導体制の構築」に重点を当て、取組を進めてきた。

以下は、その実践を示すものである。

IV 実践の概要

1 学びの基盤をつくり、自己指導能力の育成を目指した学校運営の推進

(1) 実践の内容

A 中学校では、教員十三人中七名が初任段階教員で経験が浅く、日頃から生徒指導面で苦手意識をもつ教員が多い。その中で、教育活動を充実させていくためには、教員と生徒の信頼関係や生徒相互の人間関係を充実させるなど「学びの基盤づくり」が必須である。そこで、心理的安全性の高い学級集団を土台とした自己指導能力の育成を経営方針に掲げた。さらに、良好な人間関係を醸成するためのピア・サポート活動の導入や、生徒同士が協働しやすい環境をつくるためのICT活用に重点を置いて学校運営を推進した校長の取組である。

(2) 校長のマネジメント

教育活動全体で自己指導能力の育成を目指すために、「生徒指導の実践上の視点」を意識した経営方針を掲げ、それらを浸透させるために、校長自らが教職員・生徒・保護者や地域関係者に説明を行った。その上で、教育活動を見直すための校内運営委員会への働き掛けやピア・サポート推進委員の配置、さらには教育委員会と連携して導入した双方向授業アプリを、生徒同士の「つながり」にも効果的に活用するよう教職員に働き掛けた。

(3) 学校としての取組

ア 「ピア・サポート」導入による発達支持的生徒指導の充実

学級における集団づくりの基盤となる望ましい人間関係を育むためにピア・サポート推進委員を校内組織に位置付け、学年担任制によるローテーションで指導に当たった。その中で、生徒がお互いの「つながり」を意識し、協働して活動に当たれるよう目的の共有や指導方法の改善を図った。

イ 「つながり」を強めるICTの活用

多様な学びを引き出すために、双方向授業アプリを各活動で活用し、生徒があらゆる場で、積極的に意見や考えを交流できるようにして、時間や場所の制限なく考えを共有し、認め合いながら協働できる環境を整えた。さらに、教師と生徒、生徒同士の

部会ローテーションによる指導



【第1学年～ウェイクアップライン】



【第2学年～チアウエーブ】



校長が経営方針を生徒へ説明

「つながり」を強めるために特別活動など教育活動全体に活用を広げた。

ウ 自己指導能力を高める教育活動の推進

学校全体で生徒の自己指導能力を高めるために、校内運営委員会を機能させながら教育活動の見直しを行った。学校運営に対する要望を聞くための校長による生徒面談の実施、生徒による修学旅行プランの策定、部員による部活動練習メニュー作成など、生徒が自ら考え、判断し、行動できるよう教育活動の見直しを行った。

2

(1) し

実践の内容

令和四年度のB中学校は、翌年度に控えたC中学校との統合に向け、関係者と組織的な準備に取り組んだ。この統合と生徒指導提要の改訂を機に、令和五年度からの校則を全面的に見直すこととした。また、学校経営方針では、自己肯定感の高まりと心理的安全性の高い学級集団づくりを掲げた。これを最上位目標としながら、画一的で押し付けの指導ではなく、生徒が自分事として個と集団との在り方を考えられることを生徒指導の基本的なビジョンとして、学校組織マネジメントを図った。

特に、身だしなみに関するきまりについては、生徒や保護者だけでなく地域関係者にも働き掛け、学校と家庭・地域を協働・連携させた校長の取組である。

(2) 校長のマネジメント

統合による校則の見直しを生徒の自己指導能力を高めるチャンスとして捉え、生徒自身が校則の根拠や影響を考えることによって、身近な課題を自ら解決できるよう、目的の共有に力を入

れた。校長自らが生徒との話し合い・保護者への説明会・地域関係者との意見交流などを行い、「対話」を通して理解や協力、支援を求めた。さらに、生徒が自ら校則を守ろうとする意識を醸成するために、指導部に「全校ミーティング」の実施を促し、校則の見直しについて生徒が主体的に参加し、意見を交流することができるところを設けた。

(3) 学校としての取組

ア 生徒との共有

統合前の生徒会交流事業にて、両校の生徒会本部役員と校長とで「新しい校則について」のテーマで座談会を行った。校長から、頭髮のきまりは設けないことを伝え、生徒から、ふさわしくない頭髮はどうかという意見が出された。そこで、ふさわしくない頭髮を切り口に、多様な価値観や人権に配慮した校則について考えることを生徒と共有しながら議論を進めた。

イ 保護者との共有

令和四年度当時の町内小学校六年生、中学校一・二年生の保護者を集めて説明会を実施した。特に校則については制服と指定ジャージ以外はきまりを設けないこととその根拠について説明した。保護者からは「学校生活の乱れを招くのではないか」など心配する声も上がったが、「これからの時代は子供の主体性に任せるべきだ」「子供たちの多様性を認めるべき」「根拠のない規則は必要



校長が保護者へ直接説明



ウ 地域関係者との共有

「ない」など、賛同する声が多数あり、概ね理解を得ることができた。町内教育関係者研修会にて「さらばブラック校則」をテーマとした研修会を実施した。教育委員からは「根拠のない禁止事項は校則としてふさわしくない」という考えが大半を占め、新たな学校の取組に賛同していただく結果となった。

3 関係機関との連携・協働による組織的な不登校対応

(1) 実践の内容

D 中学校では、不登校傾向を示す生徒への対応が重点課題であり、要因も親子の関わり方や友人関係、学業不振など多岐にわたっており、学校だけでは解決が難しい状態であった。そこで、スクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）、高等養護学校のパートナーティーチャー（PT）といった専門家と関係機関、学校をチームとして機能させることによって、組織的に課題解決を目指した校長の取組である。

(2) 校長のマネジメント

上記の外部専門家で構成される特別支援・不登校支援チームが有機的に連携できるよう、それぞれの役割を明確にした。SCやSSWは教育相談や医療機関との連携など福祉的なサポートを中心に、PTには専門家の見取りをどう授業改善に反映させるかといった専門家と授業者の「橋渡しの」なサポートをお願いした。

さらに、校長自身が、専門家と各種



校長もカンファレンスへ参加

コーディネーター等で行っているカンファレンスに毎回参加することによって、情報や取組の共有化を図るとともに、必要に応じて教育委員会職員にも参加を促し、その有効性と必要性を直接伝えることによって、PTの派遣が継続できるよう予算措置も働き掛けた。

(3) 学校としての取組

ア 支援チームの体制強化

SCとSSWを活用した事業は福祉課所管で以前から行われていて、生徒や保護者、教員との教育相談が中心であったが、支援を更に充実させるために、教育委員会所管のPT事業と連動させて、月二回三人の専門家が同時に来校することにより体制を強化した。

イ 多面的な生徒支援

SCの働き掛けにより、月二回の支援チームの来校時に登校している生徒がおり、その際には、生徒たちが選択した活動をSCやD中学校教員らと一緒にに行っている。その他にもSSWの家庭訪問や学校での面談により、保護者と生徒、学校が方針を共有し、週に一、二度別室登校して、学習などを教員と行っている生徒もいる。

また、これらの中には、特別な支援を必要としている生徒もおり、その支援の在り方についてPTに助言をいただくなど多面的に支援を行っている。



V 取組・実践の成果と課題

1 研究の成果

○生徒の自己指導能力を高めるためには、目的の共有が最も重要である。校長自身のアクティブな対話と参加を通して、経営方針を関係者に浸透させたことによって、協力や支援へとつながり、生徒への多面的かつ効果的な支援を行うことができた。

○外部と連携するに当たって、お互いの「できること、できないこと」を理解し合った上で、役割分担を明確にしたことにより、教職員の負担軽減や効果的な生徒支援にもつながり、働き方改革と生徒指導の充実の両立を図ることができた。

2 今後の課題

○教職員の指導観を「させる」生徒指導から「支える」生徒指導へと転換させるために、教職員が支え合い、学び合う同僚性を土台とし、対等に意見を出し合うことができる心理的安全性の高い職員風土を醸成していかなければならない。

○VUCAの時代に向けて、生徒のエンジェンシー（自ら考え、主体的に行動し、責任をもって社会変革を実現していく力）の育成が急務であり、生徒指導を通して自己指導能力を伸長させる重要性を学校に関わる人々全てに伝えていく必要がある。

VI おわりに

今回の第六分科会研究テーマに取り組むタイミングで生徒指導提要在改訂され、今求められている生徒指導を改めて研さんすることができた。校内のみならず、関係機関との連携・協働による効果的な課題対応のためには、校長が主体的に、アクティブにマネジメントを図ることの大切さを実感した。今後も、留萌管内小中学校長会は、小さな組織ではあるが故に横のつながりを強固にしながら、それぞれの課題解決に努めていきたい。

令和六年度の活動及び次年度への展望

事務局長 吉本 将樹

一 はじめに

激動する国際社会において、我が国では、二一世紀にふさわしい、持続可能な社会の仕組みを構築するため、行財政改革、規制緩和、地方分権などの動きが進行している。

教育界では、教育基本法及び教育関連法規の改正、第四期の教育振興基本計画策定など一連の教育改革が行われ、学習指導要領の改訂により、「社会に開かれた教育課程」及び「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められている。また、国が進めるGIGAスクール構想により、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、一人一人に個別最適な学びや、協働的な学びを実現するなど、新しい時代の学校教育である「令和の日本型学校教育」の構築も求められている。さらに、第四期の教育振興基本計画では、「二〇四〇年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」並びに「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が計画のコンセプトとして位置付けられるなど、部活動の地域移行と併せて、中学校の教育の大きな変革となる取組も始まっている。

本道においては、教育課題の解決と地域創生の実現に向けた「自立」・「共生」の基本理念を継承し、「子供の可能性を引き出す教育の推進」「教育の質を高める環境の確立」「持続可能な教育の実現」の施策を柱とした新たな「北海道教育推進計画」が、令和五年度に策定された。

私たち中学校長は、学校教育の課題を踏まえ、人間尊重の精神に徹し、子供たちの「社会を生き抜く力」と「より良い社会を形成する力」を育むとともに、生徒・保護者・地域の信頼と期待に応えるため、子供を主語とする教育活動の推進や多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成など、新しい時代に求められる学校づくりに向けてリーダーシップを発揮し、学校からの教育改革を推進しなくてはならない。併せて、本来、学校が担うべき業務の明確化・適正化をはじめ、学校の組織運営体制の見直し、教職員の意識改革等により、「学校における働き方改革」の推進も図る必要がある。

また、東日本大震災の風化防止に引き続き取り組むとともに、北海道胆振東部地震をはじめ、近年、災害等が多発していることから、

ら、今後起こりうる災害に対し、能動的に対応できる生徒を育成するため、防災教育・安全教育の更なる充実を図る必要がある。

以上の認識に立ち、北海道中学校長会は、校長としての主体性と指導性、しなやかさを発揮しながら、会員相互の連携の下、「全日中新教育ビジョン」学校からの教育改革（令和二年五月）の内容を踏まえ、「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」の推進と全道の中学校が抱える教育課題の解決に向けて、全日本中学校長会綱領及び、本会会則に則り、次の運営方針並びに活動の重点等に基づき、本会を堅実に運営してきた。

二 活動の経過

(1) 各種要請及び要望活動

各地区が令和五年度に行った各教育局への要望事項及び道教委への要望事項を取りまとめ、「令和六年度北海道文教施策・予算策定に関する要望書（以下、要望書と記載）」に盛り込む内容を検討し、北海道小学校長会・北海道公立学校教頭会（以下、道小、道公教と記載）と

共に令和七年度の北海道文教施策・予算策定に向けた「要望書」案を三月末までに作成した。理事研修会で協議・承認後、五月八日、道小・道中・道公教の各代表により、道教委へ手交による提出を行うことができた。その後、道教委より回答を得た。

「要望書」の柱

- ① 学校経営の一層の充実と教育課程の推進及び教育条件の整備・改善
- ② 教職員の資質の向上を図る研修の促進と内容の充実、強化
- ③ 意欲をもって職務に専念できるように、教職員の地位及び待遇の改善
- ④ 教職員の福祉及び再雇用や退職後の生活安定の確保
- ⑤ 国・道の施策としての、関係諸機関の働きかけ

(2) 道教委との意見交換会及び各課懇談会
「要望書」に対する道教委からの回答をもとに、八月五日一三時三〇分より北海道第二水産ビルにおいて、意見交換会が会同で開催された。「働き方改革の推進について」というテーマで、道教委からは中島教育長をはじめ、教育部長、学校教育監、道立教育研究所長、総務政策局長、ICT教育推進局長、指導担当局長、教育指導監(義務)と、運営者として関係課長の計一六名が参加された。道小・道中・道公教からはそれぞれの会長及び役員計四二名が出席した。続いて各課懇談会が、一五時より会場を「かでる2・7」へ移し、会同で開催した。道教委からは関係課の課長以下一六名、道

小・道中・道公教からは会長をはじめ、副会長、地区理事、事務局員等、約七〇名が出席し、第一・三分科会に分かれて、各地区からの提言や、道教委担当課からの具体的な説明を聞くことができた。

各分科会では、道小・道中・道公教より上記についての提言を行った後、道教委の各担当課の職員から回答をいただいた。学校現場の現状等を道教委の担当の方に直接伝える貴重な機会であり、意義深い時間であったということに加え、会議の時間を昨年度よりも長くしたことで、どの分科会も実り多かったとの感想が多く寄せられた。今年度も道教委から多くの担当課長に参加していただいたことで、教育行政を推進する上での課題や施策のねらいなどを直に伺うことができる。今後の学校経営に生かすことができる沢山の成果が得られた。

これらの内容については、「道小情報・道中だより号外」にて、全会員に報告した。

(3) 第六五回北海道中学校長会研究大会

十勝・帯広大会の開催

九月二七日、二八日、帯広市民文化ホール、とかちプラザ、ホテル日航ノースランド帯広を会場として、第六五回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会を開催した。

大会研究主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」に基づき、「十勝の大地から 新しい時代を生き抜く子

供を育む 確かな学校経営の推進」を大会スローガンとして、三二〇名を超える参加者が集まり、昨年度に引き続き会同形式で開催した。

初日の二七日(金)の開会式では、道中会長の河村 克也 大会長、久保 睦則 大会実行委員長の挨拶に続き、御来賓の北海道知事、北海道教育委員会教育長、十勝管内教育委員会連絡協議会会長、全日本中学校長会会長より御祝辞を頂戴した。

開会式の後、全日本中学校長会会長 青海 正様による教育情勢報告があり、休憩後、旭川市地区、留萌地区による全日中研岩手大会の提案概要説明を行った。

【第七五回全日本中学校長会研究協議会 岩手大会 第六分科会提案概要】
旭川市立神居東中学校 坂東 裕美 校長
留萌市立港南中学校 田谷 典久 校長

午後からは、五分科会に分かれ、それぞれのテーマに沿って研究協議が展開された。

各分科会の研究題と、提案者は次のとおりである。

【第一分科会】「社会に開かれた教育課程」の実現

美瑛町立美瑛中学校 金山 達也 校長
【第二分科会】新たな時代に求められる資質・能力の育成と学習評価の充実

帯広市立川西中学校 村上 達也 校長
【第三分科会】豊かな心と健やかな体を育む教育の充実

函館市立桔梗中学校 池田 浩司 校長

【第四分科会】多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成と働き方改革の推進

小樽市立望洋台中学校 山本 俊次 校長
【第五分科会】家庭・地域や校種間における連携・協働の推進

別海町立上西春別中学校 蝦名 武宣 校長

各分科会ではグループ討議を取り入れ、熱心で深まりのある話し合いが行われた。その後、助言者より今後の学校経営に向けた御助言をいただいた。

二日目の二八日（土）は、まず、文部科学省 初等中等教育局 教育課程課長の 武藤 久慶 様による「なぜ令和の教育改革なのか？なぜGIGAスクール構想なのか？」という、教育の最新情報についての御講話をいただいた。その後、田中学園立命館慶祥小学校 理事長 田中 賢介 氏による、演題「『田中賢介は、なぜ学校をつくったのか？』」プロの世界で学んだ『田中学園流マネジメント』の講演があり、参加者にとって実りの多い時間となった。

閉会式では、第六六回北海道中学校長会研究大会 胆振・室蘭大会の熊谷 誠 大会実行委員長からの挨拶があり、大会の幕を閉じた。今大会が、校長の今後の学校経営に大きく資するものとなり、次年度大会への道筋をつける大きな成果を得た研究大会となった。

これまで約二年間、久保 睦則 大会実行委員長を中心に、十勝小・中校長

会と帯広市校長会が連携しながら、誠心誠意準備をしてくださったことに心から感謝を申し上げたい。

(4) 地区別教育経営研究会・法制研修会

今年は七月九日の十勝帯広地区の開催を皮切りに、十一月五日の旭川市（小）地区まで順次開催される予定で進んでいる。今年度も、ほとんどの地区で参集しての開催となった。開催した研修会には、道小・道中事務局より役員や幹事を派遣し、各地区からの質問に回答するほか、各地区で教育局や市町村教育委員会から講師を招いての研修が行なわれている。また、会員の実践発表や校種別、課題別分科会での研究協議を取り入れるなど、内容が充実してきている。

(5) 道中組織と運営

組織体制・運営に伴う会則及び規約の改正以降、全道六ブロック体制で活動を行っている。

事務局の経営・研修・対策・情報の四部の活動においては、石狩・旭川・札幌・空知・胆振の各地区で担っている。

副会長の互選により選出された岩見沢市立東光中学校 河村克也校長が、四月九日の第一回理事研修会において、今年度の道中会長として決定し、総会にて承認された。五役においても、事務局次長を札幌・胆振、会計理事を小樽から選出し、「チーム北海道」として事務局の活動を進めている。

三 本年度の反省と次年度への展望

令和六年度の業務推進にあたっては、「新

たな時代へ 思いを一つに 堅実に歩む 道中」というキャッチフレーズの下、多くの成果を上げることができた。特に道教委とは、様々な日々の交渉はもとより、意見交換会・各課懇談会を新たな形で取組三年目となり、課長職の参加によって内容の濃い話し合いができた。道中研十勝・帯広大会においては、昨年度に引き続き会同形式での大会開催となり、大会実行委員会が中心となって、道中事務局・研修部と事前から綿密な連携を進め「オール北海道」による運営で、多くの参加者に満足していただける大会となった。また、持続可能な研究となるように、各地区の意見を聞きながら、研究体制について大きく見直しを行ったことも成果としてあげられる。

事務局から全道二〇地区との間においては、日頃から出来るだけ細やかな情報発信と情報共有に努めており、地教研では直に対話を行って絆を深めることができた。さらに、今年度から、国や道の動向等をまとめた「教育情勢」を道中のHPに掲載し、会員がいつでも閲覧できるようにしたことも成果の一つである。

道小との関係においても、年九回の小中事務局合同研修会を通して、様々な情報や意見の交換を行うなど、「思いを一つに」した「堅実」な活動となるように努めた。

しかし、まだまだ改善を要することや、様々な教育課題が山積しており、その対応も進めていかなければならない。これらの成果と課題、そしてそこに込められた思いや願いを、次年度の全ての取組につなげていきたい。

学校経営に法的根拠を据えた 教育活動の充実に努める

経営部

一 活動の方針

本会の運営方針・活動の重点を受け、学校経営に法的根拠を据え、教育活動の充実に努める。

- 1 教育制度、関係諸法規の情報収集と情報の提供、資料化に努める。
- 2 学校経営上の諸問題や管理運営に関する法制研究を行い、その解決に資する。
- 3 諸会議等を通じ、会員相互・地区との情報交換を図り、組織の連携・充実・発展に努める。

二 業務内容と進捗状況

1 諸会議の開催

(1) 経営部研修会

① 第一回経営部研修会

・四月二十六日(金) 方針、業務推進計画の検討

② 第二回経営部研修会

・二月七日(金) 年度反省、次年度への課題・展望とまとめ

(2) 道小・道中合同学習会

・七月十九日(金) 質問・要望に対する学習会

する学習会 道小と連携

2 法制研修会・地区別教育経営研究会の開催 (今年度道小担当)

七月九日の十勝・帯広地区を皮切りに、十一月五日の旭川小を最後に、全十九地区において、計画通り実施

3 学校経営の資料の編集(今年度道小担当)

4 法制研究集録第五集の編集発行(今年度道小担当) 二月にHPに掲載

三 今年度の反省と次年度への展望

1 法制研修会・地区別教育経営研究会

・今年度は、道中大会の関係から、七月九日の十勝・帯広から始まった。様々な人材を活用した講演や、提言・テーマに基づきグループ討議を行うなど、工夫を凝らした準備を頂き、当初の計画した日程通りに開催することができた。その甲斐あって、どの地区においても限られた時間の中で、内容の濃い充実した研修が行われ、多くの成果を収めることができた。

・会同開催(一七地区)

・ハイブリッド、オンライン開催(二地区 宗谷、釧路・釧路市)

・「道小・道中の活動、役割や組織について」「教育情勢について」は道小・道中役員が説明した。

・地区から上げられた質問の中では、学校経営や管理運営、さらに人材不足や定年延長に関わる問題の指摘があり、道小・道中の幹事が回答した。質問の回答

の基盤となる教育情勢を派遣役員から説明を行うことで、派遣の役割分担が明確になり、地区参加者へ十分な回答となった。

・オンライン開催となった地区では、早めに事前の接続テストを行うことができ、滞りなく進行できた。

・地区からの「質問事項」には、個人的な内容のものがある。地区の実情も十分理解はできるが、各幹事の回答に要する業務を鑑み、担当者が年度替わりで交替する場合も、事前に地区の経営部内や役員会等、組織内で精査を行ったうえで、御提出くださるようお願いする。

2 学校経営の資料の編集

・道中が主たる編集を担当し、七月中旬全道各地区校長会に配布を終えた。

3 法制研究集録第五四集の編集発行

・道中が主たる編集を担当し、二月下旬にHP上に掲載した。

本年度の経営部の活動では、皆様の御理解と御協力により多くの成果を収めることができた。特に地区別経営研では、一九地区の全てで開催し、教育情勢や課題について研修を深められたことは、大きな成果といえる。各地区の校長会の御尽力に心より感謝申し上げます。

(石狩市・樽川中学校 小森 享)

「新たな時代を切り拓き

よりよい社会を創り出していく

日本人を育てる中学校教育」を
目指して

研修部

基本主題『新たな時代を切り拓き よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育』のもと、全日中研岩手大会、道中研十勝・帯広大会において研究交流を深めるとともに、各地区における研究を基盤とした研究活動の充実に努め、校長としての識見や指導力の向上を図る取組を推進した。

一 活動の方針

- 1 第七五回全日本中学校長会研究協議会岩手大会の円滑な運営と研究内容の充実を図るために、開催地区並びに各地区研修担当者との連携を密にする。
- 2 第六五回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会の円滑な開催及び研究活動の充実に向け、十勝小・中学校長会、帯広市校長会との連携を密にする。
- 3 これまでの研究の成果と社会情勢や教育の動向を踏まえ、令和七年度以降の研究推進について基本主題や分科会研究主題についての検討を進める。
- 4 令和六年度の研究を総括し、令和七年度「研究の手引き」の作成作業を行う。
- 5 教育課程に関する情報収集に努め、中

学校教育における今日的課題を明らかにし、問題点の解明に寄与する。

二 業務の推進

1 諸会議の開催

- (1) 第一回研修部研修会 四月二十六日
・ 研究方針、業務推進計画及び業務推進について
・ 第六五回道中研十勝・帯広大会、第七五回全日中研岩手大会について
・ 令和七年度「研究の手引き」の作成について
・ 教育課程に関する追調査について（令和五年度の調査結果をふまえ）
・ 各地区研究推進状況及び令和六年度の研究計画について
道中研合同研修会 七月十一日
道小道中合同研修会 七月十九日
道中研究大会全体研修会（十勝・帯広大会↓胆振・室蘭大会） 十一月八日
第二回研修部研修会 二月七日
・ 年度末反省、次年度への課題の検討と展望・まとめについて
・ 令和七年度以降の研究推進について
・ 令和七年度第六六回北海道中学校長会研究大会胆振・室蘭大会（九月二十六、二十七日）について
・ 令和七年度第七六回全日本中学校長会研究協議会香川大会について
・ 令和七年度「研究の手引き」について
・ 教育課程に関する調査について（令和六年度実施の振り返りと調査内

2 容のまとめについて

研究活動の推進

- (1) 第六五回道中研十勝・帯広大会と第七五回全日中研岩手大会の円滑な運営と研究内容の充実を図るため、当該実行委員会との連絡・情報交流を積極的に行う。また、道中研分科会提言及び全日中研提案に向けて、研修部として担当地区や発表者へのサポートを早めに行っていく。

(2) その他の業務

- ・ 研究資料及び情報提供、研究校の紹介
- ・ 各地区研究推進の状況や成果の交流
- ・ 次年度に実施する「教育課程に関する調査」の諸準備（追調査を含む）

三 今年度の反省と次年度に向けて

道中研十勝・帯広大会については、大会実行委員会と連携を図り、大会を成功裏に終えることができた。また、業務の推進にあたっては関係の皆様にご協力いただいたことに深く感謝申し上げたい。今後も引き続き、円滑な業務を推進していきたい。

（札幌市・北辰中学校 新津 智哉）

学校経営の向上を目指した 調査研究活動の推進

対策部

令和六年度、対策部では本会の運営方針と活動の重点を受け、業務を推進してきた。

今年度は調査研究報告書の発行が主な業務であり、「GIGAスクール構想の取組と現状等に関する調査」「いじめ問題への対応（主に重大事態についての対応）」に関する調査の報告書を作成配布した。各地区理事並びに地区対策担当者の皆様の御協力により、計画した業務を遂行することができた。

一 活動の方針

本会の運営方針及び活動の重点を受け、学校運営上の諸問題について調査研究を推進し、学校経営の向上に役立てる。また、会員の職責に見合う待遇改善に向けて業務を推進する。

- 1 生徒指導等に関する情報収集や調査研究から情報提供に努める。
- 2 会員の身分確立や福利厚生、給与等の待遇改善に関する課題解決に向け、関係機関との連携強化に努める。
- 3 その他、緊急性のある課題や各種調査、情報に関することへの対応に努める。

二 業務内容と推進状況

1 諸会議の開催

(1) 対策部研修会

- ・ 四月二十六日（金）活動方針、業務計画の検討
- ・ 二月七日（金）業務反省、次年度の展望とまとめ

(2) 小中合同事務局研修会・学習会

- ・ 七月十九日（金）道小との連絡・調整、情報交換

2 各種調査の推進

(1) 令和六年度当初期限付き教諭配置にかかる実態調査

- ・ 四月十六日（火）各地区に調査依頼
- ・ 令和六年度調査報告書の発行

(2) 四月二十六日（金）対策部研修会で調査内容の確認

- ・ 四月三十日（火）調査依頼（オンライン調査）
- ・ 六月十日（月）調査締め切り
- ・ 六月二十五日（火）各地区結果の送付

- ・ 八月二十九日（木）調査報告書原案作成
- ・ 九月二十五日（水）調査報告書最終校正完了

(3) 全日中諸調査への協力

- ・ 十月七日（月）調査報告書発送
- ・ 調査研究協力校として学校規模に応じて全道十八校に依頼

① 生徒指導部調査（十月一日～十一日）

- ・ 調査一 健全育成の推進・充実の

ための研究、当面する生徒指導上の課題への対応に関する調査

- ・ 調査二 特別支援教育推進上の課題への対応に関する調査

- ・ 調査三 部活動のあり方の検討に関する調査

② 教育研究部調査

（十月十五日～二十九日）

- ・ 調査一 教育課程の編成・実施「主体的・対話的で深い学び」及び「学習評価」に関する調査

- ・ 調査二 「学びの保証に向けた取り組みについての調査」

③ 給与対策部調査（十一月十七日）

- ・ 調査一 人事院勧告の概要
- ・ 調査二 校長会の給与等に関する令和七年度予算要望の概要

三 活動の反省と次年度に向けて

業務推進にあたっては、部内の連携協力体制を維持し、当初の目的を達成することができた。各地区理事や各地区対策担当者、対策部担当理事の皆様、そして全道の校長先生の、御理解と御協力に、改めて感謝を申し上げます。次年度は調査報告書の発行は行わないことから、令和八年度の調査に向けた準備を進めていく。

（旭川市・明星中 福澤 秀）

情報交流の充実を目指して

情報部

情報部は、今年度も全国・全道の教育情勢を各地区に提供するとともに、各地区からの情報交流の充実を目指して業務推進にあたつた。特に、本会の活動状況や教育関連情報については、会報「道中だより」、会誌「全道中」、そして道中ホームページによつて随時お知らせしてきた。

情報部が提供する教育情報により、各地区校長会の取組に一層の充実が図られていること、また会員諸氏の職能向上に貢献していれば幸甚である。

何かと御多用のところ、原稿執筆に御協力いただいた皆様に感謝申し上げる次第である。

一 活動方針

本会の運営方針と活動の重点を受けて、広報活動のより効果的な業務推進を図り、会員意識の高揚並びに組織活動の強化に努める。

1 広く、本会活動の状況や関係機関の情報、各種資料等を提供する。

2 各地区の活動や会員の研究成果、論説等の交流を図るとともに、各界から教育に寄せられる意見も掲載し、会員の職能向上に努める。

3 教育関係機関・団体との情報・資料の交流並びに相互の連携・協調を図り、教育世論の喚起に努める。

二 業務内容と推進状況

1 諸会議の開催

(1) 情報部研修会

第一回 令和六年四月二十六日

本年度の活動方針、業務推進計画の検討・協議

第二回 令和七年二月七日

本年度の業務報告 来年度への展望

他

(2) 編集会議(随時)

2 機関誌等の編集・発行

(1) 「道中総会・研修会要項」編集、発行

令和六年度「第九七回総会・研修会要項」の発行 四月二十六日

令和七年度「第九八回総会・研修会要項」の編集(令和七年四月発行)

(2) 会報「道中だより」の発行

第三八六号 六月六日発行

第三八七号 七月四日発行

第三八八号 十一月七日発行

第三八九号 一月二十三日発行

号外「道小情報・道中だより」の発行(今年度は、道中担当)

(3) 十月四日 北海道文教政策・予算

策定に関する要望に対する回答

十二月二十三日 道教委との意見

交換会・各課懇談会

(4) 会誌「全道中」第九四号の編集・発行

① 潮流

② 論考

③ 特集

④ 今年の道中各部門・各地区の活動

⑤ 北海道風土記

⑥ 文芸

⑦ 資料等

3 北海道中学校長会公式ホームページの更新及び内容の充実

本会活動の状況や各地区発行機関誌、会誌等の交流、研究大会に関する案内、関係機関の情報、法制研究集録や教育情勢等の各種資料の提供の場としての運用とタイムリーな更新に務めた。

4 全日中機関誌「中学校」の編集協力・原稿依頼

今年度は三本の割当があり、北海道各地の実践や教育への思い等についての寄稿を行った。

五月号 藤田 淳 前猿払村立拓心中学校長 「私の納戸」

十二月号 吉本将樹 道中事務局長 「校長会だより」

二月号 河村克也 全日中副会長 「主張」

三 活動の反省と次年度に向けて

全道各地区の御協力をいただいて業務推進にあたる事ができた。関係各位の御理解と御協力に深く感謝申し上げます。

次年度もタイムリーな内容となるよう刊行物の発行、及び、ホームページの掲載に力を尽くしたい。

(訓子府町・訓子府中学校 橋本正之)

石狩



エスコンフィールド
HOKKAIDO

「石狩は一つ!」、石狩管内教育関係機関の合言葉となっている。石狩管内小中学校長会は、管内七市町村の小中学校長九八人で組織している。管内小中学校長会では、石狩の教育風土に根差した伝統を踏まえつつ、今年度も関係機関との連携を大切に、管内が一つになった教育を推進していく。

一 活動方針

- 1 信頼される学校経営のもと、管内教育の安定と充実・発展に努める。
- 2 職能向上をめざす研修活動の推進と教職員の資質向上に努める。
- 3 管内における教育諸課題を把握し、その解決に努める。
- 4 教育諸条件の整備・充実と教職員の処遇改善や福利厚生の実現に努める。
- 5 組織の強化と実態に即した会務の推進に努める。
- 6 会員相互の交流活動の推進に努める。
- 7 全ての子どもたちの未来を保障する資

二 各部の活動

1 研修部

質・能力の育成と教職員が育つ学校経営に努める。

協議題「活力ある学校組織をつくり、時代の要請に応える学校経営の確立」について研究を推進。

- (1) 管内校長会研究会の企画と運営

- ① 春季学校経営研究会（四月）

学校経営方針の確立と力強く推進する組織運営の在り方

- ② 秋季学校経営研究会（十一月）

地域や学校種間の連携を生かした学校経営の在り方

- (2) 全連小・全日中・道小・道中研究大会への参加

- (3) ブロック別研修会の開催（九月）

- ① Aブロック研修会（千歳市）

- ② Bブロック研修会（江別市）

- (4) 研究集録第四〇集の発行

2 経営部

- (1) 石狩地区教育経営研究会の開催（十月）

学校経営等に関わる諸問題等について研究協議

- (2) 道小・道中経営部との連携と業務推進

3 対策部

- (1) 道小・道中対策部との連携と業務推進

- (2) 会員の福利厚生活動の推進

- (3) 管内関係機関・団体との連携

三 諸会議

- 1 定期総会（四月）

- 2 役員研修会（月一回）当面する課題対応

- 3 幹事研修会（年九回）市町村幹事・関係機関による協議、交流

- 4 市町村代表者等研修会（七月）

四 地区役員

- 会長 佐藤 誠（江別・中央中）

- 副会長 吉田 光岐（江別・上江別小）

- 副会長 工藤 雅人（恵庭・恵庭中）

- 事務局 長 千葉 則理（江別・江別第二中）

- 次長 後藤 章夫（江別・対雁小）

- 会長 山口 歩（千歳・千歳中）

- 監査 吉本 浩志（恵庭・恵明中）

- 監査 渡會 朋広（石狩・南線小）

- 監査 東 祐史（北広島・東部小）

- 監査 小森 享（石狩・樽川中）

- 幹事 前田 真志（恵庭・柏陽中）

- 幹事 北村 剛（千歳・駒里小中）

- 幹事 寺嶋 裕介（新篠津・新篠津中）

- 幹事 寺嶋 裕介（新篠津・新篠津中）

- 幹事 寺嶋 裕介（新篠津・新篠津中）

- 幹事 寺嶋 裕介（新篠津・新篠津中）

- 幹事 寺嶋 裕介（新篠津・新篠津中）

- 幹事 寺嶋 裕介（新篠津・新篠津中）

- 幹事 寺嶋 裕介（新篠津・新篠津中）

- 幹事 寺嶋 裕介（新篠津・新篠津中）

- 幹事 寺嶋 裕介（新篠津・新篠津中）

後 志



賀老の滝
(島牧村)

後志小中学校長会は、一九町村より小学校長三八人、中学校長二四人の計六二人で構成されている。

当会では、結成以来、それら世情や自分の役割、地域の特質等をふまえ、後志教育の充実・発展を目指し、組織の総力を傾注して真摯な研究と実践を積み重ねてきた。

「二人一人の校長の力を結集する」を基本に保護者や地域社会の負託と信頼に応え、後志教育の一層の充実・発展に寄与するために取り組んでいる。

一 運営方針

- 1 国や自治体における教育関連の動向を注視し、迅速な情報収集・情報共有に努める。
- 2 地域や会員が抱える課題に向き合い、その解決に寄与する取組に努める。
- 3 関係教育機関、関係団体との積極的な調整に努める。

二 活動方針

- 1 愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営

営の充実

- 2 「生きる力」を育む「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価・改善
- 3 児童生徒理解の充実と、時代の変化に即した生徒指導や個々の教育的ニーズに応える特別支援教育の推進
- 4 会員の共同研究の推進と研究成果の交流による校長自らの研さん
- 5 教職員の一層の資質能力の総合的な向上
- 6 教育諸条件の把握とその整備・充実
- 7 働き方改革と業務負担の軽減の実現を含む教職員の処遇の改善

三 活動状況

- 1 経営部
(1) 後志地区教育経営研究会の開催
(2) 学校経営上の諸課題や管理運営上に関する法制資料の作成と研修会の実施
(3) 各町村校長会の教育法令、制度に関する課題の集約と解明
(4) 道小・道中経営部との連携・協力
- 2 研修部
(1) 後志小中学校長会研究大会の開催
(2) ブロック研究会の開催
(3) 「研究の手引き」「研究紀要」等の発行
(4) 全道（道小・道中）・全国（全連小・全日中）の研究の方向性の共有
(5) 全道・全国の研究大会に向けた提言内容の共有

3 対策部

- (1) 各種調査の実施と集約・還流活動
- (2) 教頭とミドルリーダーを各対象とした「スキルアップセミナー」等の開催
- 4 情報部
(1) 「会報後志」の発行（年二回）
(2) 道小・道中機関誌への寄稿協力
(3) 「情報部だより」の発行

四 年間活動《諸会議》

- 1 総会（四月）
- 2 理事研修会（年六回）
- 3 事務局研修会（年八回）
- 4 監査委員会（年二回）
- 5 後志教育局との意見交換会（年二回）
- 6 教育長部会・校長会役員合同研修会

五 役員

- | | |
|---------|-------------|
| 会 長 | 中村 和男（俱知安小） |
| 副 会 長 | 丸岡 哲也（古平小） |
| 副 会 長 | 半田 健一（黒川小） |
| 副 会 長 | 柴田 真琴（仁木中） |
| 副 会 長 | 林 尚起（京極中） |
| 事務局 長 | 明村 秀之（東 中） |
| 事務局 次 長 | 西岡 健幸（東陽小） |
| 会 計 | 金崎 徳子（蘭越小） |
| 監 査 | 姉帯 隆文（赤井川小） |
| 監 査 | 道下 誠（泊 小） |

（島牧村・島牧中 中西 知典）

小樽市



重要文化財
「旧日本郵船
小樽支店」

小樽市中学校長会は、市の方針「知・徳・体のバランスのとれた人材の育成」に則り、小樽の未来を託すことのできる人材育成を目指す教育推進のため、真摯に研究と実践を積み重ね、着実に成果をあげてきている。

これまでの成果を踏まえ、「小樽市立学校」の二校をあくまでも校長として、その使命と重責を担って「自走」するとともに、日々、市教委との連携や横のつながりを大切にしながら、自校や市内の共通課題解決のためにタッグを組み「共走」し、前進させて次代に継承していく。

一 活動方針

- 1 市の教育ビジョンを基盤とした着実な取組
 - ① 選択と集中による実践・検証
 - ② 二つの部の充実
 - 2 研究内容の充実
 - ① 学び合いの深化
 - ② 自主自立の確立
 - 3 校長としての使命を自覚した自立した学校経営
- ## 二 活動にあたっての教育ビジョン
- 1 学校運営組織の機能化

① 指導的立場としての教務主任の機能化

2 小中一貫教育

① 分掌内への小中一貫教育担当の位置付け

② 中学校区内での担当者会議・全教職員による部会の実施

3 人材育成

① 主幹会のバックアップと主幹間の定期的な交流

② 教頭・主幹・主任等の他校体験・見学と、長期的展望に立った小樽市の管理職候補の育成

4 業務改善

① 校内組織の機能化をベースにした業務の見直しと推進

三 各部の取組

1 研究部

① 小樽市中学校教育の充実・発展のため、校長としての職能の向上を図る。

2 組織・法制部

① 学校経営に関する機能の向上を図る。

② 法制研修及び経営活動を通して、今日的な課題の解明に努める。

四 活動の状況

学校教育と社会教育を一本化した包括的な計画である「小樽市教育推進計画」で示された基本理念「主体的に学び 小樽の未来を創る 心豊かな人づくり」を踏まえ、毎年、中学校長会としての共通目標を立て、各学校で具体的な実践を進めている。

今年度は、「学校運営組織の機能化」を重点とし、教務主任がより一層、指導的な役割を果たせるような体制の整備や教頭の業務内容の見直し等に取り組んでいる。

また、各校の課題に合わせた働き方改革をはじめ、小中一貫教育の推進等を含めた研究活動を進めている。

五 年間活動(行事)

総会

定例校長研修会

一回
一二回

(うちオンライン会議三回)

四役研修会
一二回

(うちオンライン会議一二回)

四役部長研修会
四回

(うちオンライン会議三回)

小樽後志代表校長会議
一回

道中第一ブロック連絡協議会
一回

小中高校長協議会及び研修会
五回

経営・法制研究会等
三回

六 役員一覧

会長 代永 研(桜町中学校)

副会長 伊藤 仁弥(長橋中学校)

副会長 大山 倫生(朝里中学校)

事務局長 吉岡 智尋(北陵中学校)

研究部長 山本 俊次(望洋台中学校)

組織法制部長 富士原孝浩(銭函中学校)

(小樽市・北陵中 吉岡 智尋)

上 川



ドラマ『北の国から』の
ロケ地、上富良野町
「吹上露天の湯」

令和六年四月十二日、一六人の新会員と他管内からの異動の五人の会員が加わり、総勢八五人が出席した第五〇回総会研修会から、上川管内校長会が始動した。

本会は、一期目となる榎田佳奈恵会長のもと、「新しい社会の形成に向けて挑戦する子供を育てる学校経営」の実現に向け、教育改革に組織的に対応し、「愛情と信頼」に基づく学校経営の推進を目指している。さらに、「研さん」に励みながら「結束」を強化し、迅速かつ適切に課題の解決に努めている。

一 活動方針

上川管内校長会は、「ふるさとを愛し、他者と共に持続可能な社会を創造する人材を育てる学校の在り方」の究明と、新しい社会の形成に向けて挑戦する子供を育てる学校経営を推進し、住民の負託と信頼に応える上川教育の一層の充実発展に寄与することを旨とする。そのため、「愛情と信頼」「研さんと結束」の合言葉を継承し、学校の教育力を高めるため、次の四点を活動方針としている。

1 「愛情」と「信頼」に基づき、創意に

富む信頼される学校経営の充実に努める。

2 校長自ら「研さん」に励むとともに、教職員の一層の資質能力の向上に努める。

3 組織活動の充実と確かな情報共有を図り、会員の「結束」を強化するとともに、教職員の処遇改善に努める。

4 上川教育局・地教委及び道小・道中、教育関係機関・団体と連携し、教育課題の解決及び北海道教育をリードしていくことに努める。

二 各部の活動（主な業務）

1 経営部

(1) 組織強化に関すること

(2) 法制研究会・教育経営研究会の開催

(3) 学校経営に関する法制上の課題把握と関係法規の研究・具体的問題の収集処理に関すること

(4) 道小及び道中経営部との連携に関すること

2 研修部

(1) 研修組織及び運営に関すること

(2) 道小・道中研究大会及び全連小・全道中研究協議会に関すること

(3) 会員の研修に関すること

(4) 道小及び道中研修部との連携に関すること

3 広報部

(1) 会報の編集と発行に関すること

(2) 各種調査の企画・実施に関すること

(3) 学校の統廃合に関すること

(4) 道小及び道中対策部・情報部との連携に関すること

4 事務局

(1) 学校経営に関する資料の整備と交流に関すること

(2) 地区ブロック研修会に関すること

(3) 後継者育成のための諸施策の立案と実施に関すること

(4) 教育局・教育委員会連合会・市町村校長会など関係諸団体との連携に関すること

(5) 各部との連携に関すること

三 役員一覧

会長	榎田佳奈恵（当麻中）
副会長	小林 勝彦（名寄東中）
副会長	大垣 幸治（東神楽東聖小）
副会長	千葉 良彦（富良野西中）
副会長	森 広明（士別小）
運営委員長	小嶋 高徳（東神楽志比内小）
運営委員	平田 隆男（中富良野中）
事務局長	豊田 央（上富良野小）
事務局次長	石坂 剛（愛別小）
会計理事	島村 圭吾（富良野麓郷小中）
庶務理事	成田 浩幸（東川第二小）
経営部長	小林 真弓（富良野東小）
研修部長	中間 靖之（東神楽中）
広報部長	中川 季賢（上川中）

（富良野市・富良野西中 千葉 良彦）

旭 川 市



旭橋
「花火大会」

旭川市中学校長会は、本年度、新採用五人の新会員を迎えた。会員二七人が福澤 秀

会長を中心に、「知恵を結集し、さらに、前へ」を基本姿勢とし、旭川市教育大綱の基本方針「主体的に学び力強く未来を拓く人づくり」の具現化を図るために、組織の一層の活性化を進めている。

教育改革の動向を見極めながら、会員相互の真摯な研さんと連携を図り、次のような運営方針を掲げ、中学校教育の充実・発展に努めている。

一 活動の方針（要点）

- 1 中学校校長の職能の向上と旭川市の中学校教育の振興を図る。
- 2 旭川市教育委員会を始め、北海道中学校長会、関係機関・団体等と緊密に連携を深め、教育諸課題への適切な対応に努める。
- 3 校長としての学校経営力の向上を図り、市民の負託に応える中学校教育の創造に努める。
- 4 教育改革及びいじめ防止対策への主体

的・組織的な取組を推進する。

- 5 校長会の組織と機能を充実させ、活動の活性化を図るとともに、後継者育成等の喫緊の課題への対応に努める。

二 活動の重点（要点）

- 1 創意と活力ある学校づくりの推進
- 2 信頼される開かれた学校づくりの推進
- 3 生徒指導上の諸課題の解決
- 4 校長の資質能力の向上
- 5 関係機関・団体との連携と組織強化

三 各部の主な活動

- 1 研究部
 - (1) 六月研修会の開催・運営
 - (2) 上川管内小中学校長研究大会の運営
 - (3) 道中研究大会帯広大会への参加
 - (4) 全日中研岩手大会への参加
 - (5) 二月研修会の開催・運営
 - (6) 研究紀要（第五二集）の発刊
- 2 厚生部
 - (1) 福利厚生関係業務の推進
 - (2) 親睦関係業務の推進
 - (3) 叙位・叙勲関係業務の推進
- 3 広報部
 - (1) 会報「校長会だより」の編集・発行
 - (2) 会誌「第五五号」の編集・発行
 - (3) 道中の広報活動への協力
- 4 生徒指導部
 - (1) 小学校・高等学校及び関係機関との交流の充実
 - (2) 定例校長会議における「生徒指導情

報交流」「実践交流」の充実

- (3) 地区ブロックにおける生徒指導体制及び小学校との連携や交流の充実
- (4) 各関係機関との緊密な連携と協力体制の構築

5 学校教育対策部

- (1) 旭川市小・中学校長会法制研修会の開催
- (2) 学校運営及び法制上の諸課題への対応
- (3) 道中地区対策担当者業務への対応

四 役員一覧

会 長	福澤 秀（明星中）
副 会 長	上原 大岳（東光中）
副 会 長	濱中 昌志（愛宕中）
監査委員	工藤 亘（中央中）
監査委員	森田 聖吾（忠和中）
事務局次長	千葉 雅樹（緑が丘中）
事務局次長	岩瀬 一弘（旭川中）
事務局次長	大熊 修一（東鷹栖中）
事務局次長	小田嶋智一（北星中）
会計委員	坂田 幸親（広陵中）

（旭川市・緑が丘中 千葉 雅樹）

宗 谷



稚内公園からの街並み

宗谷校長会は、一〇市町村、五一校（うち単置中学校一七校、小中併置校四校）の校長で構成している。結成以来、「宗谷の風土に根ざした豊かな自然に育む子供」をテーマに掲げ、会員相互の研さんと職能向上に努めながら管内教育の充実・発展を図っている。

一 運営方針

- 1 校長としての使命を自覚し、自らの職能向上に努めると同時に指導性を発揮し、教職員の研修活動の活性化を図り、保護者や地域の期待に応える学校経営の充実に努める。
- 2 会員相互の理解を深め、活動の活性化を図り、宗谷教育の充実・発展に努める。
- 3 関係機関・団体との連携を図り、教育諸課題の解決にあたり、教育条件整備に努める。

二 活動の重点

- 1 「生きる力」を育む教育課程の編成・実施・評価・改善に努め、愛情と信頼に基づく活力ある学校経営を推進する。

三 各部の活動

- 1 研究部
 - (1) 宗谷校長会の活動方針に基づき、事業計画を立て、その遂行にあたり、ともに、地域社会の期待と要請に応え、教育課程についての研究と当面する教育課題に向き合う学校経営を究明する。
 - (2) 『自らの可能性を信じ、豊かな人生を切り拓いていく力を育む学校教育の推進』を研究主題とする第一三三三か年継続研究の三年目の取組を行う。「学校経営」「教育課程」「資質向上」に関わる信頼される学校づくりの共通課題を明らかにし、実践的研究の充実に努める。
 - (3) 関係機関・団体との連携を図り、宗谷における教育研究の一層の発展・充実に努める。
 - (4) 道小、道中、全連小、全日中の研究会などに積極的に参加し研究大会での提言については宗谷校長会として協力共同で取り組み組織的な発表とする。
 - (5) 宗谷の重要課題である学力保障を推進するため『学力向上プラン』による実効性ある手だてを講じるとともにその有効性を常に評価検証し改善を図る。
- 2 研修活動を充実し、職能向上と、教職員の資質能力の総合的な向上に努める。
- 3 関係機関・団体と連携し教育諸条件と教育諸課題の改善と整備・充実に努める。
- 4 校長会の組織を強化し、活動の活性化を図る。

四 役員一覧

会長	塩原 悟（稚内東小）
副会長	細谷 隆志（稚内東中）
	宮崎 哲也（中頓別小）
	畑 慎司（浜鬼志別小）
事務局長	吉崎 健一（潮見が丘小）
事務局次長	黒木 敏郎（豊富小）
	三野宮誠一（稚内南小）
	森河 真（稚内中）
	中村 繁仁（天北小中）
	末村 哉子（声間小）
会計	佐藤 健（幌延中）

（稚内市・稚内東中 細谷 隆志）

留 萌



初山別村 厳島神社

今年度、留萌管内小中学校校長会は、「創立五〇周年」という大きな節目を迎えた。亀田会長は、『和心一統』の指標のもと本校長会の充実と発展を図ると決意を表明した。

一 運営方針

- 1 校長の使命と責任を自覚し、識見を高める研修の充実と情報の共有等を図る。
- 2 会員相互の信頼関係を深め、組織強化と活動の充実、先を見通した最善の対応を図る。

二 活動の重点

- 1 教育改革を実現する学校経営に資する研修の充実と環流
- (1) 職能向上と教育改革を実現する学校経営の改善に向けた留萌管内校長会教育研究協議会の開催
- (2) 全道、全国の情勢や学校経営の充実・発展に向けた留萌地区教育経営研究会の開催
- (3) 道小空知岩見沢大会、全連小徳島大会、道中帯広大会、全日中岩手大会へ

の参加促進

- (4) 新任校長研修会の開催と内容の充実

- (5) 研究記録や会報などによる情報の共有と環流の促進

- 2 組織の強化と活動の充実、業務の効率化の推進

- (1) 創立五〇周年記念事業遂行と本会の通常業務軽減・縮小への取組の推進
- (2) 本会の基軸となる理事研修会の活性化と事務局や各専門部及び市町村校長会との連携

- (3) 校長会組織の強化と会員の意識向上、業務の効率化・DX化の推進

- (4) 全道・全国校長会、管内教育機関・団体との連携

- 3 教職員の待遇改善

- (1) 公平な教職員人事に関する取組の推進
- (2) 役職定年と定年延長に伴う処遇の改善と再任用の拡大、再就職の促進

- 4 管内の学校や教職員に関する今日的な課題への対応

- (1) 管内的視野からのキャリアステージに応じた人材育成
- (2) GIGAスクール構想の実現に向けた取組の推進
- (3) 特別支援教育の充実を図る支援体制整備・条件整備への働き掛け
- (4) CSや小中連携など、求められる学校づくりに対する組織的な取組の推進
- (5) その他、管内的、全道的、全国的な課題への対応

三 各部の活動計画

1 研究部

- (1) 留萌管内小中学校校長会教育研究協議会の開催
- (2) 全日中・道中提言プロジェクト委員会の充実と研究推進

- (3) 研究集録の発行
- (4) 留萌管内教育研究団体連絡協議会の業務推進

2 組織部

- (1) 留萌地区教育経営研究会の開催
- (2) 教育条件整備や福利厚生の実態把握
- (3) 組織・法制に関する研修会の充実

3 広報部

- (1) 会報の発行・市町村会報の交流
- (2) 道小・道中情報部との連携

四 役員組織

会 長	亀田 寛人(留萌中)
副 会 長	村井 亨(東光小)
事務局 長	秋葉 良之(留萌小)
事務局 次長	矢藤 典彦(小平小)
会計 委員	嶋本 敏幸(増毛中)
監査 委員 長	山口 清敏(古丹別小)
監査 委員	田谷 典久(港南中)
研究 部 長	西山 智章(羽幌中)
組織 部 長	工藤 智(羽幌小)
広報 部 長	野口 修一(潮静小)

(初山別村・初山別中 滝本 秀明)

山 檜



デ・モーレンいまかね
(今金町)

檜山校長会は、檜山管内七町の小学校一七校、中学校一〇校の校長で構成している。本会は、昭和二十三年の創立以来、管内教育の充実・発展のために研究と実践を積み重ねるとともに、教育条件の整備等に努めるなど、組織の総力を挙げて取組を推進している。

一 今年度の運営方針

これからの学校は、SDGsに代表される持続可能な社会を創造するための資質・能力の育成が求められている。校長は、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実はもとより、いじめ・不登校等の生徒指導、教職員の資質能力の向上、学校における働き方改革の推進、GIGAスクール構想の実現、学校安全教育の充実など、喫緊の課題の解決に向けてリーダーシップを発揮していかなければならない。

檜山校長会は、檜山の教育を恒久的に維持、発展させて行くために、協働で役割と責任を果たしていく。そして、今日的な教育課題解決のために「ふるさと檜山に誇りを持ち、自己実現に向けて未来を切り拓く児童生

徒」を育む学校経営の在り方を究明し、保護者や地域住民の負託と信頼に応える教育活動の推進ならびに充実・発展に寄与したいと考えている。

二 今年度の活動方針（◎は今年度重点）

- 1 組織マネジメントを活かした活力ある学校経営の推進
- 2 ◎「生きる力」を育む適切な教育課程の編成・実施・評価・改善
- 3 時代の変化に即した生徒指導や特別支援教育の組織的推進
- 4 ◎教職員の資質能力の総合的な向上
- 5 服務規律の厳正な保持
- 6 ◎組織活動の活性化と充実
- 7 ミドルリーダーならびに管理職候補者等の育成
- 8 ◎防災教育と健康安全教育の充実
- 9 学校における「働き方改革」の推進

三 主な各部の活動

- 1 経営部
(1) 教育研究事業の推進
① 檜山校長会教育研究大会の開催
② 檜山校長会教育研究大会の事業反省と意見・要望等の調査
- 2 道小・道中の調査協力等の連携
- 2 研修部
(1) 檜山校長会研究計画の作成及び推進
(2) 檜山校長会教育研究大会分科会運営及び大会集録の編集
(3) 全道・全国研究大会への参加集約

四 役員一覧

- 3 対策部
(4) 道小・道中との連携
(1) 各種調査に対する取組
(2) 新採用校長研修会の開催・運営
(3) 各種資料の収集と整備
(4) 福利厚生の活動及び道小・道中との連携
 - 4 情報部
(1) 檜山校長会誌『清風』の編集・発行
(2) 道小「教育北海道」の執筆依頼・原稿の提出
(3) 道中「道中だより」・「全道中」の執筆依頼・原稿の提出
(4) 『清風』の復刻版の閲覧の実施
- | | |
|--------|-------------|
| 会 長 | 笠松 靖史（乙部小） |
| 副 会 長 | 佐藤 等（今金小） |
| 監査委員 | 晴山 泰文（明和小） |
| 〃 | 安田 善紀（南が丘小） |
| 事務局 長 | 宮腰屋 由（江差中） |
| 事務局 次長 | 吉川 聖（上ノ国小） |
| 事務局 次長 | 関田 貴人（上ノ国中） |
| 会 計 長 | 米谷 優（江差北中） |
| 経営部 長 | 久慈 学（厚沢部小） |
| 研修部 長 | 松村 浩良（北檜山小） |
| 情報部 長 | 西山 恭史（瀬棚中） |
| 対策部 長 | 笹木 央（河北小） |

（江差町・江差中 宮腰屋 由）

渡島



会旗：「拓創」

渡島小中学校長会は昭和五十二年に渡島小
学校長会と渡島中学校長会の統合により会員
数一三二人でスタートし、今年度で統合四七
年目を迎えた。一〇市町校長会で、小学校
三四人、中学校一七人、小中併置校一人、義
務教育学校一人の合計五三人の会員で組織さ
れている。

今年度は西田浩人新会長のリーダーシップ
のもと、「オール渡島」をキーワードに、先
輩諸氏が築き上げてきた実績と伝統を守りな
がら、渡島教育のさらなる充実と発展に寄与
したいと考えている。

一 運営方針

- 1 後継者育成に向けた取組の強化
- 2 「学校における働き方改革」の一層の
推進
- 3 研修活動の推進
- 4 持続可能な組織及び活動への改善策

二 活動の重点

- 1 新しい時代を担う渡島小中学校の学校
経営の充実に努める。

- 2 時代の動向に合わせ、迅速な情報交流
や協働の研修を進め、校長としての見識
や指導力に努める。
- 3 次世代の渡島の教育を支える人材育成
を図り、後継者育成を進める。
- 4 教育の動向を踏まえ、教育関係機関・
団体及び地域との連携を強化し諸課題の
解決に努める。
- 6 渡島の教育全体の動向を各々の学校に
生かすために調査と情報発信に努める。
- 7 渡島小中学校長会会員の連携をより一
層図り、組織の強化と充実に努める。
- 8 教育環境・諸条件の整備と福利厚生
の充実に努める。

三 各部・事務局の主な業務計画

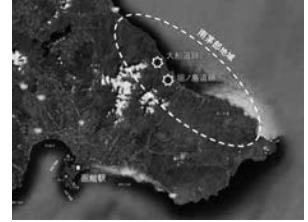
- 1 研修部
 - (1) 令和六年度研究の全体計画の推進
 - (2) 第一九期二ヶ年計画一年次の研究計
画の策定と推進
 - (3) 渡島小中学校長会研究大会の開催
 - (4) 研修部通信の発行
 - 2 経営部
 - (1) 総会・研修会における研修講話
 - (2) 各種調査の実施と協力
 - (3) 函館・渡島地区教育経営研究会参加
対策部
 - 3 校長会全体のICT活用に関する情
報集約と発信
 - (2) 厚生事業の見直し
 - (3) 住宅要覧の新規・追加・修正
- 情報部

四 役員一覧

- (1) 会報「渡島」、会誌「拓創」の発行
 - (2) 道小・道中情報部への協力
 - 5 正副会長・事務局
 - (1) 会務の推進・連絡・調整
 - (2) 予算・決算の作成、会計事務の執行
 - (3) 各種会議、研修会、研究会等の開催
・夏季・冬季教育研修セミナー
・新採用会員研修会
・諸機関・関係団体との研究協議会等
・函館・渡島地区教育経営研究会
・三地区校長会役員研修会
 - (4) 教育実践表彰の企画・実施
 - (5) 渡島管内教育関係管理職名簿発行
 - (6) 全道・全国校長会との連携・協力
- | | |
|-----------------|-------------|
| 会 長 | 西田 浩人（八雲小） |
| 副 会 長 | 金澤 力（七重小） |
| 副 会 長 | 後藤 正弘（大野中） |
| 監 査 長 | 西館 純（萩野小） |
| 監 査 中 田 和久（浜松小） | |
| 事務局 長 | 澤田 真次（大沼岳陽） |
| 事務局 次 長 | 伊藤 明彦（森 小） |
| 会計 理 事 | 柳澤 満（知内小） |
| 庶務 理 事 | 増田 正弘（八雲中） |
| 庶務 理 事 | 滝本 千晶（石別小） |

（八雲町・八雲中 増田 正弘）

市 館 函



世界遺産・縄文遺跡郡
(南茅部地域)

函館市中学校長会は、今年度一九人の会員（新会員五人）でスタートした。田上直広会長の力強いリーダーシップのもと、新しい学校に求められる持続的で魅力ある学校教育を実現するため、連携と協調のもと、しなやかに自走する。また、函館市の教育振興計画に則り、組織力を生かして教育の充実に寄与したいと考えている。

一 基本方針

- 1 校長会の組織を機能させ、一丸となって教育課題、経営課題の解決に努める。
 - 2 全教育活動を通して「生きる力」を育む「信頼される学校」の創造に努める。
 - 3 関係機関との連携を基に、教育課題の解決、教育条件の整備充実に努める。
- ## 二 活動の重点
- 1 関係機関、各種団体とのネットワーク及びCSを活かした学校力の向上
 - 2 中学校教育の在り方についての研修と幼・小・中・高の連携強化
 - 3 各種実践交流による校長のマネジメント力の向上

- 4 業務改善の更なる推進、及び信頼される学校づくりに向けた研修の充実
- 5 関係機関と連携した管理職後継者の育成
- 6 函館市の「教育振興基本計画」と自校の学校経営の融合と実践・検証

三 各部運営計画の概要

- 1 経営部
 - (1) 道中経営部との連携
 - (2) 運営要項の作成
 - (3) 小中合同特別研修への運営支援
 - (4) 後継者育成資料作成
 - (5) 函館・渡島地区教育経営研修会の運営、及び三地区校長会役員研修会への協力
 - (6) 学校管理・服務に関する情報提供
 - (7) 各校教育課程に関する調査とまとめ
- 2 研修部
 - (1) 道中研修部との連携
 - (2) 実践事例交流会の企画・運営
 - (3) 教育経営研修会(局長講話)の運営
 - (4) 渡島管内中高連絡協議会への協力
 - (5) 道中研究大会への参加・協力・提言
 - (6) 全日中研究協議会岩手大会の参加協力
- 3 対策部
 - (1) 道中対策部・調査部との連携
 - (2) 道中等各種調査への協力・まとめ
 - (3) 函館市への予算要望調査の依頼、及びまとめ、各部各課、教育長への要望

- (4) 教育実習生の受入れに関すること
- (5) 福利厚生に関すること
- (6) 道中会報・会誌の原稿依頼
- (7) 函館市中学校長会誌「桐影」第四四号の編集と発行

四 主な活動の概要

1 定例研修会

職能向上を図るため経営課題や教育問題の報告と協議を行い、円滑な学校運営の推進を目指し研修の成果を上げている。

2 経営研修会

各種研修会の性格に応じた講演や提言により今日的課題への理解を深めている。

五 役員一覧

会長	田上 直広(湯川中)
副会長	佐々木理之(五稜郭中)
副会長	對馬 寿恵(北中)
監査長	橋本 智也(銭亀沢中)
監査長	三谷 龍司(青柳中)
事務局次長	山口 哲也(亀田中)
事務局次長	阿部 真之(巴中)
事務局次長	白川 卓(港中)
経営部長	阿蘇 一貴(鱒川中)
研修部長	中田 和子(旭岡中)
対策部長	宮前 由一(恵山中)

(函館市・亀田中 山口 哲也)

空 知



三笠市立博物館
アンモナイトの化石
展示数が日本一！

空知校長会は、管内二四市町、小学校五五校、中学校三六校、義務教育学校一校の九二人の会員で組織されている。

本年度空知校長会は、第六七回北海道小学校長会教育研究大会の主管を務め、小学校長を中心に、会員の力を結集して取り組んだ。

令和五年二月に準備委員会が発足。第六六回渡島・北斗大会実行委員会から引き継ぎを受け、約一年の準備期間を経て、九月十三・十四日の「空知・岩見沢大会」を無事終えることができた。

道小研究大会開催のため、今年度は空知校長会研究大会を休止とした。十一月より「共同研究ブロック」での研究を再開する予定であり、準備を進めている段階である。

一 活動方針

1 空知の校長としての使命を自覚し、研さんに励み、学校の自主性・自律性を発揮して、学校経営の充実・発展に努める。

2 校長相互の協力や信頼関係を一層深め

るとともに、組織の在り方を再検討する中で、組織運営の効率や業務削減、諸課題の解決に努める。

3 教育関係機関・団体と緊密に連携し、教育課題の解決にあたり、地域・保護者から信頼される学校づくりに努める。

二 活動の重点

1 学校経営の充実と諸課題の解決

2 研修活動と広報活動の充実

三 活動の具体策

1 適切な教育課程の編成と実施

2 成果を上げる学校マネジメントの実現

3 信頼に応える学校経営の推進

4 会員相互の協力と教頭会との連動による取組の推進

四 各部の主な活動

1 経営・対策部

(1) 学校経営研究会の開催

(2) 空知教頭会の研修会等への支援

(3) 教育条件の整備拡充に資するための調査・要請活動

(4) 働き方改革に関する調査及び課題把握

2 研修・情報部

(1) 共同研究ブロック研修の推進

(2) 各種校長会研究大会への参加

(3) 各種研究団体・研修会への協力

(4) 「研修だより」の発行

(5) 会報「空知野」の編集・発行

(6) 各種名簿・資料の作成・保管

五 組織と役員

(7) 道小・道中広報関係への原稿執筆

《空知校長会役員》

・会長 伊藤 聡 (岩見沢栗沢中)

・副会長 疋田 博和 (岩見沢東小)

・副会長 富樫 孝行 (歌志内学園)

・事務局長 小玉 剛 (栗山小)

・事務局次長 松野 岳彦 (岩見沢明成中)

・監査 高岸 春二 (赤平中)

・監査 古畑 聡子 (岩見沢メープル小)

《経営・対策部》

・部長 菊地 佳子 (岩見沢清園中)

・副部長 三好 考央 (雨竜小)

《研修・情報部》

・部長 和田 知子 (浦臼小)

・副部長 奥山 直人 (滝川第一小)

《地区幹事》

・北地区幹事 大脇 明子 (深川納内小)

・中地区幹事 渡辺 禎 (滝川明苑中)

・南地区幹事 松田 淳二 (三笠中)

・東地区幹事 有村 宏紀 (ゆうばり小)

《道小役員》

・監査 小玉 剛 (栗山小)

・幹事 高原 直樹 (深川小)

・指名理事 山本あさ子 (岩見沢日の出小)

・地区理事 三好 考央 (雨竜小)

《道中役員》

・会長 河村 克也 (岩見沢東光中)

・幹事 坂本 征人 (奈井江中)

・幹事 小泉 寧 (新十津川中)

・地区理事 松野 岳彦 (岩見沢明成中)

(岩見沢市・明成中 松野 岳彦)

胆 振



伊達紋別岳から望む
有珠山

胆振管内校長会は、管内一市町、併置校一校を含め小学校五九校、中学校四〇校、義務教育学校三校の一〇二校、一〇二人の校長によって構成されている。一市町中、苫小牧市が小・中ごとの校長会を組織しており、管内校長会としては一二校長会から成り立っている。

一 運営・活動方針

本会は、子供たち一人一人に「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」といった生きる力を育むとともに、保護者や地域住民の負託と信頼に応え、管内教育の充実と発展のために努力を積み重ねてきた。今年度は、授業改善を中核に据え、教職員の職能の向上、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、いじめ・不登校への迅速・柔軟な対応、インクルーシブ教育の拡充を推進する。

家庭や地域と連携・協働し、未来社会を切り拓く資質・能力を身に付けた児童生徒の育成を中核に据えた教育活動を展開している。

1 活動方針

(1) 校長としての識見・能力を高めるため、自ら研さんに励むとともに、組織のリーダーとしての指導力を培い、時代の要請や学習指導要領の目標を実現するため、「チームとしての学校」への改善充実に一層努める。

(2) 会員相互の信頼関係を基盤として、組織の充実・強化に努めるとともに、校長会の総力を結集して、迅速かつ適切に諸問題の解決に努める。

(3) 教育関係機関や関係団体との連携を強化し、働き方改革など今日的な諸課題の解決に努める。

2 活動の重点

(1) 校長としての職能向上を図る研修の充実

(2) 学校経営の適正化を図る研究・実践及び教育条件の整備・充実

(3) 教職員の意識改革と資質能力の向上による学校改善、働き方改革の着実な推進

(4) 後継者の育成に向けた事業の推進

(5) 道小・道中、第四ブロック、各市町校長会との組織的な連携の重視と行政機関並びに関係団体との連携の強化

(6) 会員同士の親睦と福利厚生の充実に関する事業の推進

(7) 諸事業の機能的・効率的な運営改善と予算執行の適正化

二 各部の事業推進概要

- 1 研修部へ研修の活性化と職能向上
- 2 経営部へ組織・法制上の諸問題、法令・法規の情報収集、組織力の強化
- 3 対策部へ各種調査、福利厚生事業推進
- 4 情報部へ会報・会誌「響箭」の発行

三 役員名

会 長	大谷 昌史(旭ヶ丘小)
副 会 長	中島 勉(美園小)
運 営 委 員	熊谷 誠(沼ノ端中)
	井村 友美(清水小)
	渡辺 敬方(星の丘小中)
事務局 長	近藤 大作(伊達小)
事務局 次 長	松田 周一(幌別小)
	宮嶋 隆行(啓明中)
研修部 長	河毛 幸至(錦岡小)
経営部 長	今田 和也(大成小)
対策部 長	赤川 欣胤(壮瞥中)
情報部 長	小野由美子(蘭北小)
会 計	仲見 真樹(白老小)
	網代 健男(早来学園)

(伊達市・光陵中 阿部 聖司)

日 高



2024 年 6 月 25 日
日高山脈襟裳十勝国立公園
が誕生

日高地区校長会は、管内の小・中学校三七校（中学校二五校）の校長で組織している。本年度の重点目標は、「日高管内の教育課題の解明・解消と職能向上を目指し、積極的に提言、発信、行動する日高地区校長会を実現する」ことを掲げ活動している。

活動の推進にあたっては、道小・道中や教育局、教委連、各町教委とのつながりを大切にし、校長会員の声を積極的に伝えるよう努めている。また、会員相互の情報交流を一層密にすることで「情報の共有化」を図り、課題を共有しながら取組を進めている。

一 活動方針・重点

- 1 信頼と秩序に基づく学校経営の推進
 - 2 社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善
 - 3 教職員の資質・能力の向上と後継者育成
 - 4 研修活動による職能向上と組織体制の強化
- ## 二 各部の活動
- 1 研修部

今日的な管内状況を踏まえ、新しい時代や社会の要請に対応した『「学力向上」と『組織力向上』の実現に向けた校長のリーダーシップ』を研究課題とした研究活動を通して、校長の指導力の向上を図るための研修を推進している。この課題は、これまでの研究活動を継続・深化させて設定しており、組織研究と個人研究を関連づけて進めている。

また、会員相互の研修を深めるために、研究活動の実践状況の交流・協議・検証の場として、「日高管内小・中学校長研修会」、「課題別研修会」を開催している。さらに、研究の交流・深化・累積を図るために、「提言資料」と「研究紀要」を発行する。

2 法制・広報部

「教育経営・法制研修会」を毎年実施しており、その中で道小・道中の役員の方々より情勢報告をいただいている。さらに、講話を聴くことにより校長としての職能の向上と、学校経営の充実・発展、組織の強化に努めている。

また、校長会会員の連携を高める会報「採用校長の決意」と広報誌「教育ひだか」の発行は例年通り行っている。

3 調査・厚生部

学校経営に必要な調査を道小・道中と連携しながら情報の共有化を図っている。福利厚生については、主体的に研修

を深め、厳しい共済制度に対しても見通しをもち、支援を進めている。

4 その他

地区校長会では、「次代を担う後継者の発掘と育成の取組」として、『人材リスト』を作成し、後継者の育成に長年役立てている。このリストは、歴任校や経験年数、主任経験や分掌経験等から適任者を判断し、当該校長との面接や推薦などを通し教頭受験者数を増やすために行っている。

また、これは多くの個人情報を含むことから、取り扱いのガイドラインを策定し、十分な配慮のもとに取組を進めている。

三 役員

会 長	小嶋 範彦（日高町・富川小）
副 会 長	玉手 広昭（浦河町・浦河小）
副 会 長	中田実千代（新ひだか町・三石中）
事務局 長	木田 理博（平取町・平取小）
事務局 次長	川野 靖幸（新ひだか町・静内中）
事務局 次長	佐藤 正寿（様似町・様似小）
計 画	高杉 省一（日高町・門別中）

（様似町・様似中 佐藤 惠美）

十 勝



十勝平野と「はるにれ」

十勝地区は、管内一八町村の小・中学校長九〇人で構成されている。本校長会は「校長の教育実践指標」を掲げ、会員相互の研さんに励むとともに、公教育の役割と使命の高揚に努めてきた。そして、創意と工夫に富んだ学校経営と教育活動の推進で、十勝教育の充実・振興に多くの成果をあげてきた。

また、校長一人一人が一校を預かる責任者であり、「子供の成長に責任を負う」という姿勢の下、十勝教育の推進・発展に寄与するよう努めてきたところである。

今年度は、『前に踏み出す校長』を合言葉に、「自分と向き合い・自分を高める力」、「積極的に働き掛ける力」を高めながら、保護者・地域とともに「子供の確かな育ちの創出」に努めてきた。

一 活動方針・重点

- 1 信頼に基づく創意工夫に満ちた活力ある学校経営に努める。
- 2 協働体制の確立と信頼関係の深化を図り、組織体として機能の充実に努める。

- 3 研修を深め、主体性を確立し、教育上の諸問題の解決に努める。
- 4 地域社会・関係機関との連携を強化し、教育諸条件の整備に努める。
- 5 待遇改善・福利厚生等の向上を図るため、情報交換と要望活動の充実に努める。

二 各部の活動

- 1 研修部
(1) 令和六年度北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会の研究部業務
(十勝小・中学校長会教育研究大会中止)
(2) 教育研究大会の研究収録の発行
(3) 道小・道中研修部との連携
(4) 全国・全道校長研究大会への参加促進
(5) 情報紙等を通じた教育情報の提供
- 2 経営部
(1) 第五八回十勝・帯広地区教育経営・法制研究会の開催
(2) 「学校経営等調査」の実施と調査報告書の発行
(3) 北海道教育公務員弘済会との連携対策部
(1) 「十勝教育・学校の顔」の発行
(2) 「教育懇談会」の運営
(3) 「退職校長感謝激励の会」の運営
(4) 令和六年度「十勝・帯広 校長・教頭・主幹教諭名簿」の発行
(5) 全道・管内学校給食研究協議会への協力

4 情報部

- (1) 会報「十勝川」の発行（年間三回）
- (2) 各町村校長会情報部との連携、各種情報の提供
- (3) 道小会報、道中会報等への寄稿

三 諸会議

- 1 総会（四月）活動計画・予算・役員
- 2 町村会長会議（年一回）・事務局長会議（年二回）
- 3 評議員会（年一回）
- 4 常任委員会（月一回）

四 十勝小・中学校長会役員

- | | |
|---------|------------|
| 会 長 | 森 浩嘉（幕別小） |
| 副 会 長 | 久保 睦則（幕別中） |
| 副 会 長 | 佐々木典郎（音更小） |
| 事務局 長 | 伊藤 道彦（豊頃中） |
| 次 長 | 岸 研吾（鈴蘭小） |
| 会 計 長 | 笠松真一郎（豊頃小） |
| 会 計 次 長 | 中井 哲（足寄中） |

五 役員一覧

- | | |
|---------|---------------|
| 代 表 者 | 久保 睦則（幕別中） |
| 事務局 長 | 伊藤 道彦（豊頃中） |
| 会 計 担 当 | 中井 哲（足寄中） |
| 研 修 担 当 | 大石 浩之（大樹中） |
| 経 営 担 当 | 白井 将之（士幌町中央中） |
| 対 策 担 当 | 安齋 亮太（上浦幌中） |
| 情 報 担 当 | 森 英樹（中札内中） |

（豊頃町・豊頃中 伊藤 道彦）

帯 広 市



ばんえい競馬

はじめに

帯広市中学校長会は、能戸貴英会長を中心に、義務教育学校一校を含む一四校の校長で構成しており、今年度は二人の新会員を迎えた。全日中新教育ビジョン「学校からの教育改革」、帯広市教育基本計画の理念「ふるさとの風土に学び 人がきらめき 人がつながる おびひろの教育」を踏まえ、本会の方針を「校長職 学び専門性を高め合う校長会」として創造力豊かで夢を語り合える組織を目指し、一枚岩となり努力を怠らず、中学校教育を推進し、帯広市民の負託に応えていく。

一 運営方針

- 1 校長相互の協力や信頼関係を深めるため、対話や議論を大切にする。
- 2 帯広市教委をはじめ、全日中、道中、十勝小・中学校長会、中高特連絡協議会等の教育関係諸機関・諸団体と緊密に連携し、教育課題の解決にあたる。
- 3 教育者としての校長、管理者としての校長を自覚し、学び続ける。

二 活動の重点(今年度の重点課題)

- 4 「新しい学校づくり」を進めるため関係機関と連携する。
- 1 中学校長会の組織を強化し、活動の充実に努める。
 - (1) 校種間の学びをつなぐ取組の充実行動連携(エリアファミリ―(幼保小中連携)、小中一貫教育)
 - (2) 危機管理上の迅速な対応(スピード感等を生かした協力体制)
 - (3) 教育機関、道中、十勝小・中学校長会、公私立高校等との連携強化
 - (4) 職能を高める研修の実施
- 2 教育課題の解決を図り、学校経営の改善に努める。
 - (1) 社会に開かれた教育課程の実現(閉ざされていた教育からCSの活用へ)
 - (2) 教職員の服務規律保持の徹底(同僚性の発揮、日常的な危機管理・コンプライアンス研修、全校統一した不祥事ゼロの誓い「KTSBAの日」の取組)
 - (3) 働き方改革の推進(北海道アクション・プランと帯広市立学校働き方改革推進プランの推進、部活動休養日・定時退勤日の完全実施、学校閉庁日の設定、校務運営システムの積極的活用、部活動の地域移行に関する検討委員会との協議)
 - 3 教育課程の整備・充実と地域に根ざした学校づくりに努める。

三 役員

- (1) 妥当性や信頼性を高めた学習評価の実施及び円滑化を図る各校連携した取組
 - (2) 生徒指導提要に基づいた、支える生徒指導の周知と実践
 - (3) GIGAスクール構想に基づいた個別最適な学びの実現
 - (4) いじめ・不登校等への適切な対応と生徒指導体制の強化
 - (5) 多様化した高等学校教育並びに入学選抜方法への適切な対応
 - 4 円滑な教育活動推進のための教育諸条件の整備・充実に努める。
 - (1) 教育委員会との連携、人事異動要綱に基づく適正な配置
 - (2) 特別支援教育の充実のための教育課程編成
 - (3) 教頭、主幹教諭等候補者の人材発掘
- | | |
|-------|------------|
| 会 長 | 能戸 貴英(南町中) |
| 副 会 長 | 堂山 貴也(帯一中) |
| 事務局 長 | 今野 典之(翔陽中) |
| 事務部長 | 嶋 健(西陵中) |
| 研修部長 | 高橋 譲(大空学園) |
| 会 計 | 村上 達也(川西中) |

(帯広市・大空学園 高橋 譲)

釧 路



霧多布岬に暮らす
「ラッコ」

釧路校長会は、令和六年度、採用五人の新会員を迎え、六町一村、四四人（小学校長二人、中学校長一人、小中併置校長一人、義務教育学校長一人）で構成している。

今年度、田中敏行会長を中心に、本会が歴史的な背景をふまえて作り上げてきた釧路校長会の理念『調和のある学校運営を目指して』の方針を全体で確認し活動を開始した。

一 基本方針

本会は、常に「釧路校長会綱領」を基底に、釧路の教育の発展・充実に期する「学校経営にあたっての基本的な姿勢」を示す「五つの柱」を堅持して「調和のある学校運営」を目指すとともに、子供のために最善を尽くす校長会として、各町村校長会や教育関係機関等との連携をより一層強化し、管内的な取組を通して課題解決に努め、以て、保護者や地域社会の負託に応え信頼される学校経営を推進するよう努力する。

【釧路校長会綱領】（平成二年三月 制定）

私たちは釧路教育の充実、発展に重要な役割を果たし、子供の未来に責任を負う者として、ここにこの綱領を定める。

- 一、校長の使命を自覚し、常に厳しい自己研さんに努める
- 一、情熱と強固な意思をもって、公教育の推進に努める
- 一、たがいに強い連帯感をもって、職務の遂行に努める
- 一、職員相互の信頼関係を基盤とした学校経営に努める
- 一、釧路の風土に生き、未来を拓く子供の育成に努める

二 本年度の運営方針

- 1 校長としての経営ビジョンを明確に示し、その職責の重さを自覚して「釧路の風土に根ざす学校づくり」の経営感覚を磨き、その実践力を高めるために職能の向上に努め、諸課題を解決する。
- 2 教職員として服務規律を徹底し、地域や保護者からの信頼や期待に応え、「子供たちや教職員が明るく、楽しく学べる環境づくり」を志向する学校経営に努める。
- 3 新しい時代に求められる資質・能力など児童生徒の「生きる力」を育成する学習指導要領の確実な実施に向けて、授業改善やカリキュラム・マネジメントの確立等の取組を進め、自校の教育活動の質の向上を図る。

三 活動の重点

- 4 教育関係諸団体、特に町村教育委員会と町村校長会との連携協力を密にし、教育の動向や情報を共有して諸問題への対応と解決に向け迅速に行動する。
- 5 釧路校長会綱領を基底とし、会員個々の意識を高め相互に連携・協働を図りながら、各校の調和のある学校運営を目指す。
- 1 学校経営の充実
- 2 創意ある教育活動の推進
- 3 研修活動の推進
- 4 組織の充実と強化
- 5 関係機関・諸団体との連携強化

四 役員

- | | |
|-------|------------------|
| 会長 | 田中 敏行（釧路町立富原小） |
| 副会長 | 大西 展史（白糠町立庶路学園） |
| 〃 | 藤田 崇充（釧路町立別保中） |
| 事務局長 | 須藤 光秋（白糠町立白糠学園） |
| 〃 次長 | 笹川 義孝（鶴居村立鶴居小） |
| 会計 | 辻川 智宏（標茶町立標茶小） |
| 釧路研所長 | 斉藤 直彦（厚岸町立真龍小） |
| 監査 | 蠣崎 浩一（厚岸町立厚岸中） |
| 〃 | 沼田 卓二（浜中町立霧多布中） |
| 研修部長 | 佐藤 義行（弟子屈町立美留和小） |
| 経営部長 | 渥美 清孝（弟子屈町立弟子屈小） |
| 対策部長 | 太田 諭（釧路町立富原中） |
| 情報部長 | 村瀬 清史（浜中町立散布小中） |

（釧路町・別保中 藤田 崇充）

釧路市



釧路で見ることができる
世界で最も大型のフクロウ
- シマフクロウ

令和六年度釧路市中学校長会は、三人の新会員を迎え、一五人（併置校・義務教育学校各一校）でスタートした。小玉会長のもと、義務教育の責任を直接担うという使命感のもと、校長三見と校長三心を視点に、常に自らの在り方や組織としての在り方を見直し改善を図るとともに、会員相互が切磋琢磨・親和協力し、資質能力の向上に努めている。

一 活動方針（概要）

- 1 課題と情報を組織として共有し、協調性を高めつつ互いに研さんを深めながら、課題の解決を目指した指導力・判断力を発揮することができるよう、校長相互の経営を支え、校長としての職能向上を図るため、組織的研究に努める。
- 2 関係各所（道小、道中等）との連携を密にし、教育諸課題の解決を図るとともに、教育諸条件の整備、教職員の社会的・経済的地位の向上を目指す。

二 活動の重点（概要）

- 1 釧路市が目指す学校教育を実現するための組織マネジメント
子供たちが主体となって生きる力を育むために、義務教育段階九年間の連続性と系統性を基軸に据え、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指す。校長は、そのためのビジョンと戦略を明確に示し、組織体制を整え、心理的安全性の高い職場づくりを進める。
- 2 危機管理能力の向上
平常時の危機管理、緊急時の危機管理、収束時の危機管理の三つのフェーズで教職員が一体となつて対応できるよう、適切なリーダーシップを発揮する。
- 3 人材育成
(1) 学校教育の成否は、高度専門職である教師の資質によるところが極めて大きい。校長は、北海道教職員研修計画を踏まえ、日常の観察やフィードバック、授業評価アンケート、各種調査・検査結果等を根拠に、各種対話をすすめたり、他者等とつないだりするなどして、教員が主体的に資質能力の向上が図れるよう指導・助言する。
(2) 釧路市に勤務する教頭が一人でも多く校長採用・登録となるよう、校長会としてプロジェクトチームを編制し、責任をもつて後継者育成に力を注ぐ。
- 4 不登校への対策と対応
児童生徒が主体となる「絆づくり」と教職員主導による「居場所づくり」を積

極的に進め、全ての児童生徒にとって安心感と充実感が体感できる学校づくりを進める。また、校内教育支援ルームの整備や関係機関との連携を積極的に進める。

- 5 働き方改革
教員の働き方改革の目的は、子供と向き合う時間や自ら学びを深めるための時間の確保であることを前提に、北海道アクション・プラン（第3期）の目標、目指す姿、重点的に実施する取組におけるリーダーシップを発揮する。

三 主な活動

- 1 釧路市全体のキャリア教育の推進
- 2 釧路市中学校教育課程改善研修の実施
- 3 中高特連絡協議会の企画・運営
- 4 学校経営研究協議会の実施
- 5 中学校長会研修の実施
- 6 道中・全日中研究大会への参加
- 7 生徒指導情報交流

四 役員

- | | |
|--------|-------------|
| 会 長 | 小 玉 功（幣舞中） |
| 副 会 長 | 林 政孝（大楽毛中） |
| 事務局 長 | 土江田亮一（景雲中） |
| 事務局 次長 | 河原 和範（桜が丘中） |
| 会 計 | 鈴木 穰（共栄中） |

（釧路市・景雲中 土江田亮一）

根 室



中標津開陽台
(中標津町)

一 はじめに

根室管内校長会は、採用校長七人を迎え、「継承と発展」を合い言葉に、管内教育を推進していくことを決意した。全三九校の校長がそれぞれ「チーム根室」を強く意識し「根室の風土を生かし、心豊かにたくましく生きてはたらく力をはぐくむ社会に開かれた学校教育の創造」を目指して活動する。また、根室管内教育推進の重点を柱に「つながる」「そろえる」「ひろげる」を意識しながら関係機関と一体となって、課題を共有し学校経営の充実にあたる。

二 運営方針

- 1 教育をめぐる諸情勢を的確に捉え、ともに、校長の抱える問題を組織として共有化を図り、その解決に向けた情報提供や解決策の提案に努める。
- 2 信頼される公教育の確立を図るとともに、関係諸機関との連携を深め、国や道の諸改革の動向を踏まえて適切な対応に努める。
- 3 校長の経営力の向上を図り、地域に開かれた学校経営の改善・充実に努める。
- 4 会員相互の連帯意識を強め、信頼関係を基盤にした、組織の強固な体制作りに努める。

三 活動の重点(概要)

- 1 家庭や地域社会に信頼される学校
(1) 教職員の意識改革と資質能力の向上
(2) 家庭・地域社会との連携・協力の強化
- 2 教育委員会等との関係の強化
(3) 法規や服務に則った学校経営の推進
(4) 今日的課題に向けた組織体制の充実
(5) 社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善
(1) 特色ある教育課程の編成・実施
(2) 学びに向かう力等を育てる指導の工夫
- 3 道徳教育・健康教育の充実
(4) 北方領土学習・ふるさと学習の充実
(5) 地域の人的・物的資源の効果的活用
- 3 研修活動の推進
(1) カリキュラム・マネジメント等における研修の充実
(2) 根室管内校長研究大会及び地区教育経営研究大会開催と内容の充実
(3) 全道や全国の研究大会への積極的参加
(4) 今日的な課題に対応する研修計画推進
- 4 教育諸条件の整備・充実
(1) 後継者育成の推進
(2) 人事課題に対する意思集約と発信
(3) 女性活躍推進
- 5 教職員の待遇改善への働き掛け
(1) 管理職の抜本的待遇改善
(2) 教職員の健康増進、働き方改革の推進
(3) 事務や栄養職員、退職者等の処遇改善

善

6 業務見直しと組織強化

- (1) 活動の充実及び組織・事業の改善
- (2) 組織的な情報収集と的確な情報提供
- (3) 各種調査活動の協力と推進
- (4) 関係機関や諸団体との連携
- (5) 適正な予算執行に向けた見直しと改善

四 主な活動内容

- 1 根室管内校長研究大会
(1) 研究テーマに沿った学校課題を管内教育推進の重点及び管内教頭会のレポートと関連付け作成し、協議した。
- 2 定例理事研修会の開催
(1) 各市町単位校長会の活動を交流し、課題と改善策等を協議した。また、北海道教育庁根室教育局から教育の動向や今日的課題について情報提供を頂いた。
- 3 「チーム根室」の取組
(1) 授業改善に向けた授業アンケート「自分をフリカエル」の実施と管内教頭会や北海道教育庁根室教育局と連携した。

五 令和六年度役員体制

- | | |
|-------|-------------------|
| 会 長 | 根本 涉 (別海・別海中央小) |
| 副 会 長 | 植島 博幸 (中標津・中標津東小) |
| 副 会 長 | 増田 慎一 (根室・柏陵中) |
| 事務局 長 | 岡部 臣也 (別海・上西春別小) |
| 会 計 | 葛迫 勝秋 (別海・中春別中) |

(別海町・中春別中 葛迫 勝秋)

オホーツク



サロマ湖の夜明け

オホーツク管内校長会は、オホーツクの教育の充実・発展のため、心豊かでたくましい子供の育成に鋭意努力を重ね、組織の総力を傾注して研究と実践に努めてきた。

今年度は、小学校六八校、中学校四三校、小中併置校一校、義務教育学校四校の計一一六人の校長で組織されている。

これまでの成果を踏まえ、「オホーツクの子どもたちのために、志を高く掲げ、力強く前進する校長会」のスローガンの下、創意と活力に満ちた学校づくりに努めている。

一 活動方針

- 1 ふるさとの地から世界を見つめ、新しい社会の形成に向けて挑戦する児童生徒を育成するため、「チームオホーツク管内校長会」として、関係機関との連携をより一層強化し、管内的な取組を通して課題解決に努め、以て、地域・保護者の信託に応える学校経営を推進する。
- 2 自らの使命を自覚し、指導力を発揮して、学校組織の活性化と教職員の資質能

力の向上等に努め、能動的で活力ある学校づくりに全力で取り組む。

二 活動の重点

- 1 愛情と信頼に基づく、活力ある学校経営の推進に努める。
- 2 「生きる力」を育む教育課程の編成・実施と評価・改善に努める。
- 3 児童生徒理解を深め、時代の変化に即した生徒指導の充実や特別支援教育の組織的な推進を図る。
- 4 研究活動を推進し、研究成果の交流を図るとともに、校長自らの研さんに努める。
- 5 新たな時代に応じた教職員の資質能力の総合的な向上に努める。
- 6 組織内や関係機関との連携による組織の強化に努める。
- 7 管内教育をめぐる教育諸条件を把握し、その改善と整備・充実に努める。
- 8 教職員の処遇の改善に努める。

三 各部の活動計画

- 1 研修部
 - (1) 第五二回 オホーツク管内校長会教育研究大会
 - (2) 各ブロック・市町村研修会の推進
 - (3) 道小・道中全道大会、全国研究大会への参加促進と研究交流
 - (4) 教育課程に係る調査への協力

四 役員一覧

2 情報部	(1) 「会員の顔」の発行
	(2) 道小・道中及び全連小・全日中と連携した広報活動
3 経営部	(1) 地区別教育経営研究会の開催
	(2) 学校経営に関する調査の実施
	(3) 管内における諸課題の把握と分析
	4 対策部
(1) 管内の教育課題を集約した学校経営資料の提供	(2) 道小・道中関係の諸調査への協力
会 長	天野 昌明 (北見美山小)
副 会 長	齊當あけみ (遠軽白滝小)
〃	齊藤 修 (網走第二中)
監査委員	外川 範幸 (斜里朝日小)
〃	久保 大輔 (紋別渚滑中)
事務局 長	伊井 俊明 (網走中央小)
事務局 次長	橋本 正之 (訓子府中)
〃	河村 一恵 (網走白鳥台小)
〃	藤田 哲也 (北見南中)
〃	信田 雅守 (北見高栄小)
会 計	尾島 康人 (北見光西中)
研修部長	竹次 康人 (遠軽中)
情報部長	三村 文弥 (西興部小)
対策部長	辻 正樹 (雄武中)
経営部長	落合 利広 (湧別開盛小)

(北見市・南中 藤田哲也)

札幌市



赤レンガプラザ
通称「赤プラ」

札幌市中学校長会は、市立中学校九六校と、今年度開校した義務教育学校・福移学園、北海道教育大学附属札幌中学校、北翔支援学校、市立札幌開成中等教育学校を加えた、計二〇〇人の校長で構成されている。

今年度も、秀島起也会長の下、副会長六人、会計一人、事務局長一人が役員として会務を担うとともに、各部署部長七人、監査委員二人、事務局員七人の計二五人で理事研修会の運営にあたる。

一 活動方針

市民の負託に応え信頼される中学校教育を推進すべく、「教育の動向を的確に捉える、保護者や地域、関係機関等との連携を図る、会の組織と機能を一層充実させる」を基本に校長としての研さんと職能の向上を目指す。また、「学びの保障と小中一貫した教育の推進」、「学校における働き方の見直し」等を含め、今年度の重点項目は以下の四つである。

- ・校長会の組織・運営の強化と研修の充実
- ・学校経営の改善と充実
- ・学校経営の条件整備と教職員の待遇改善
- ・教育関係機関や諸団体との連携強化

二 各部会の運営の方針

〈管理部〉

- ・学校経営上の管理、運営についての現状把握と分析を行い、課題の解決を図る。

〈施設部〉

- ・長期的展望に立った学校施設・設備の整備・充実及びICT教育に関わる施設・設備や学習環境に関する諸課題の改善・充実に努める。

〈研究部〉

- ・研究基本主題による共同研究を総括し、校長としての職能向上を目指すことにより、中学校教育の充実・発展に努める。

〈指導部〉

- ・生徒の実態を的確に捉え、問題行動の質的变化にも適切に対応できる生徒指導の在り方について検討する。

〈保健体育部〉

- ・全市的立場で生徒の心身の健康保持、増進と体育・スポーツの充実発展を図る。

〈進路指導部〉

- ・持続可能な社会を創る力を育むキャリア教育の充実を図り、適正な学校経営を行うための研究と条件整備にあたる。

〈特別支援教育部〉

- ・特別支援教育に関する諸課題について研究協議し、その推進と充実を図る。

三 具体的な運営・活動

- 1 「例会・研修会」は全会員出席の会議とメール会議を合計年一〇回予定している。

- 2 「理事研修会」は、例会・研修会の前週

に二五人の理事の出席で開催され、運営に関する協議、議題の整理等を行う。

- 3 「部会」（七部）は、年間数回設定され、担当する諸課題に取り組んでいる。

- 4 「各区校長会」（二〇区）は、行政区ごとに設置され、区内の情報交流や課題に応じた協議、検討、研修等を行っている。

- 5 「学教連絡会」では、毎月、幼小中高の四種校長会等の代表と市教委が、情報交流等を中心に連携を深めている。

- 6 「小・中学校生徒指導特別委員会」は、小・中学校長会代表と関係機関で構成され、生徒指導上の諸課題について、連携・協力を深めている。

四 研究活動

研究基本主題「新たな価値を見出し、持続可能な社会を創る力を育む札幌市中学校教育」を掲げ三年継続研究が行われ、本年度は二年目となる。七つの部が教育課程や学校経営、生徒指導、教育環境等の視点から課題の究明に取り組んでいる。研究成果は一月の「全体研修会」として全会員に発表され、三月には「研究紀要」として発行される。

また、札幌市中学校長会は、政令指定都市中学校長会で構成する「大都市中学校長会連絡協議会」に加盟している。今年度の横浜大会には一〇人が参加し、大都市が抱える教育課題について情報交換と協議を行った。

（札幌市・札幌北中 美田 学秀）

北海道

風土記



ゼブラ模様の旭岳 白雲岳からの眺望



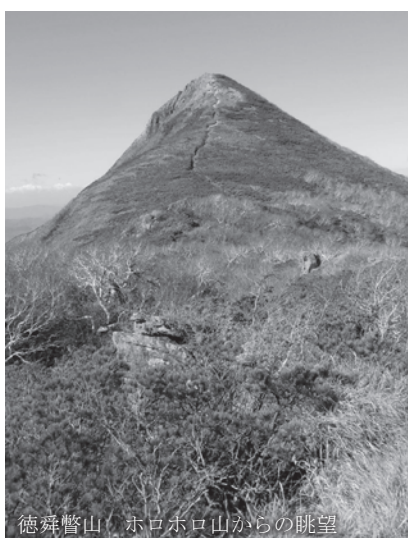
ニリンソウ チギウ岬にて



ニセコ連峰 目国内岳より



厚真の海 浜厚真海浜公園にて



徳舜瞥山 ホロホロ山からの眺望



エゾシマリス 黒岳にて



メガネ岩 昆布岳にて



シマエナガ 安平町鹿公園にて



サマニユキワリ アボイ岳にて

まぼろしの

ブナノキタイ

黒松内町・黒松内中

午 来 睦 美

「ブナの樹台―道の左右にブナの木多きが故に号（なづく）るなるべし。」

松浦武四郎の調査記録書「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌」に記載しているこの場所が、一体どの位置にあたるのか、地元の人にもわからないというのを以前から聞いていた。わかつているのは黒松内町歌才付近だということだけ。私が本校に着任する事が決まった時、この場所の特定が、松浦武四郎の足跡をあの手この手でたしなむわが組織『タケシロードツアーG』の一大ミッションとなった。

二年前、かのアイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三氏も「後の人に託したい」と書き残し、未だ不明であった共和町―仁木町間の「元々の稲穂峠」。その場所の特定のために協力を仰いだ道路技術者、測量・設計技術者、松浦武四郎研究者等で組織し、奇跡的に残る旧道跡の発見に成功した。それ以来の大きな事業である。

四月に着任してから、およそ二ヶ月。本務以外のエネルギー全てを投入し、調査文献の読み込みと、各専門家たちの知見を統合して地図に落とし込んで検証、またやり直し、

の繰り返しである。パズルの最後のピースがパチツとはまったのは、六月中旬のことであった。「まぼろしのブナノキタイ」は、現在もブナが多く育つ場所にある。

ブナノキタイの特定と同時に、「かつて黒松内山道として松

浦武四郎たちが通ったのではないかとおぼしき旧道跡」がまさしくその黒松内山道であるという証明にも及ぶこととなった。風化しつつあるこの旧道とその歴史を再び取り戻すことができたことに、この森を守り続けてきた黒松内の人と大地に心から感謝している。

ブナの木は、北限のブナ原生林を有する黒松内町の歩んできた道標そのものであり、誇りであり、黒松内町民にとってのシサム（隣人）なのである。

成果は、生徒向けの授業、教員向けのフィールドワーク、町民向けのトークイベント、シリーズ化している絵本「まつうらさんとたびするほん」、関係者向け報告書等として世の中に公開を始めている。



さて、「何を目指しているのか」とよく聞かれる。「松浦武四郎ごっこ」と答えるのだが、それは「北海道に貢献すること」でもある。風化しつつある北海道の大地の記憶をふたたびよみがえらせることにより、よりふるさとの大地への畏敬の念と感謝の気持ちをもち、この大地を守り育む未来に考えを馳せる。過去を知るということは、未来を知るということなのだ。私達北海道の教育者は、まさにその最前線にいるのである。

そんなことを考えながら、黒松内山道跡に、在りし日の松浦武四郎先輩と並んで立っている。



宗谷の北見、松前との繋がり

利尻町・利尻中

倉 照 彦

最北の街、稚内からフェリーで一時間四〇分。利尻島の表玄関、利尻富士町の錨泊（おしどまり）港に着く。そこから車でさらに二〇分、西側の利尻町にたどり着く。一周五五kmの利尻島は東西二町に分かれ、利尻富士町はフェリーと新千歳・丘珠への飛行機で繋がるが、利尻町は六月〜九月に礼文町香深港とのフェリー往来のみである。しかし約三〇年前まで、利尻町から日本海を南下し小樽までの航路があり少し異なる文化が存在する。今回は二つ紹介する。

【宗谷・利尻の北見？】

利尻町の中心地の杓形（くつがた）の神社は「北見富士神社」。利尻富士町鬼脇の神社は「北見神社」である。なぜ「北見」と付くのだろうか。また旧国鉄の「天北線」を御存知だろうか。道北の音威子府駅（おといねづぶ）からオホーツク海側の浜頓別・猿



利尻町杓形「北見富士神社」



利尻富士町鬼脇「北見神社」



旧国鉄「天北線」

払を経て南稚内まで結んだ路線。その由来は「天塩国・北見国」の頭文字である。天塩国は留萌管内天塩町だが、北見国は正直言ってなじみがない。

『利尻富士町史』によると、明治維新後に明治政府が開拓史を設置し、蝦夷地を「北海道」と命名した松浦武四郎の進言により、一八七九年、利尻島は「北見国利尻郡」となった。

松浦武四郎の進言は、「西天塩の境をエキコマナイより奥で、ネムロ境のシレトコまで海岸一、二三〇里併せてリイシリ、レフンシリ二島一局にしたい」と思っています。この辺りは、ソウヤ、モンヘツ、シヤリ等いかにも国号にするには不都合なところなのですが、常々このあたりのことは『北海道』と唱えてきたことがあるのでこの文字を使いたいと思います。カラフト島快晴の日には、見えるものですから、『北見』では如何なものかと存ずる次第です」

つまり「北海道と言われ、晴れば樺太（サハリン）が見えるので『北見』ではいか

がかと提案し、利尻・礼文から稚内を経て斜里に到るまで「北見国」と呼んでいたとのこと。そのため、オホーツク枝幸町の神威岬は「北見神威岬」。天北線浜頓別駅から伸びる興浜北線終着駅が「北見枝幸駅」なのも納得である。では、網走管内北見市はいつ命名されたのか。合併前の初代北見市が誕生したのは昭和十七年（一九四二年）。なるほど、「北見」の元祖は樺太が見える宗谷だったのである。

参考文献『利尻富士町史』『ウィキペディア』

【伝統芸能「松前四箇散米舞」】

北見富士神社例大祭では「松前四箇散米舞（しかさごまい）行列」が披露される。十七世紀に松前藩で創作された神楽舞曲を現在の福島町福島大神宮で行列化したものである。

福島大神宮の神職を

代々務めた常磐井家が、礼文厳島神社に就任したことを機に昭和一〇年代までに伝わり、各神社例大祭にあわせて、神輿渡御の露払いとして先導を勤めている。弓・鉾・剣・刀・杵を持ち、地域の小学高学年（利尻は中学生）が勤め、参加者だけでなく地域住民も楽しみな伝統芸能である。松前・函館・小樽・奥尻・知内・利尻・礼文で伝承されている。地名や名称の由来を調べると意外なルーツが分かった。

参考文献『四ヶ散米舞行列報告書（礼文町教育委員会）』



奥深い松前町



松前町・松前中

山 岸 申 弥

今年で新町発足七〇周年を迎えた松前町。右の七〇周年記念のシンボルマークは、本校生徒が発案したものである。当町は学力向上・書道教育・ふるさと教育を三本柱とした小中一貫教育（松前学園）を展開し、特に書道教育については独自に「書道科」を設け、書を通じた間性の涵養を図っている。

【松前町の概要】

松前町は人口約五、八〇〇人、約五〇kmにわたり海岸線が続く町である。函館方面から松前町内に入ると、津軽海峡を越えて青森県の岩木山、当町に属する離島大島・小島がはつきり見えることがある。これらがそろって見られた時は、自然に感謝する日となる。

また、松前沖は「洋上風力発電有望な区域」に整理されており、強風を「強み」に変えようとしている。札前地区にある「リエネウインドファーム松前」は、風力発電所を公園としたもので、離島大島・小島、そして風力発電の様子を一度に臨むことができる。

【松前藩の福島県伊達市への移封】

一七九二年、ロシア使節ラクスマンが根室に來航したことは、社会科の教科書に書かれている。ラクスマンがその翌年、松前町を訪れていることは、あまり知られていない。鎖

国中、外国船が松前藩に接近することを好まない幕府は、松前藩を直轄地とし、藩士は福島県へ移封。移封期間は約一四年間。この間に亡くなった松前藩関係者の墓所が、福島県伊達市に今でも残る。本校生徒は隔年で伊達市を訪問し、先人の墓所に花を手向ける。校長も引率する。松前藩が北海道に復領したのは二〇一年前。津軽海峡を越えて松前藩の歴史の跡が多数残されていることは興味深い。

また、観光スポットである松前城跡敷地内には、松前藩主代々の墓所や、家老・画家としても有名な蠣崎波響の墓もある。松前の歴史を知るにつれ、歴史的な価値を見出すことのできる場所である。桜の時期等の混雑期を避けるとゆったりと歴史を味わえる。

【離島小島】

定期船の運行はないが、周辺の沖に釣りに訪れる方がいる離島小島。筆者は三年前に松前町の児童生徒と訪問する機会を得た。

小島には学術上の価値が高い貴重な動植物が存在し、風光明媚な景色は観光資源として有望に思う。右の写真は、島内にある神社へ向かっている様子である。容易に行くことができない場所だからこそ、秘境としての価値が高まるのかもしれない。



【海から見る松前城】

下の写真は遊漁船で松前沖をクルーズしている様子を空撮したものである。定期船ではないので、常に体験することはできないが、海からみる松前城や桜の色に染まった町並みも、有力な観光資源となるはずである。



【平成二十九年北海道赤レンガ建築賞】

本校校長室にお入りいただくと、平成二十九年に北海道知事から贈られた「赤レンガ建築賞」の盾が目に入る。

築八年が経過した今でも、「建築賞」に関する問い合わせや、校内視察の申込がある。松前杉を活用した校舎で、生徒が使う机も松前杉が使われている。

グラウンドは人工芝、野球場も整備され、中学生だけでなく、小学生も少年団活動で汗を流す。また、今年度文部科学省より「子供の読書活動優秀実践校」表彰を受けた図書館も自慢の一つである。右の写真は本校の全景である。



アイヌ文化とニシパのまち びらとり

平取町・振内中

渡 辺 智

平取（びらとり）町は、北海道日高地方の西端に位置し、総面積七四三・〇九平方km、東西五二・八km、南北四一・一kmで、形はやや北海道に似た三角形のまちです。豊かな自然とアイヌ文化の拠点の一つの町として広く知られ、産業は農業（ニシパの恋人）を中心として健康で豊かに暮らすことができるまちとして全国に知られています。

【アイヌ文化】

アイヌの伝統が色濃く残る地域として広く知られているのは二風谷です。アイヌ語では「大森林」「野の林」などと解釈されています。

光あふれる春から夏、彩り深める秋、そして白い世界へと、四季折々の表情を豊かに映す河川や森林で自然を尊び、学び、共に生きる沙流川流域のアイヌ文化が現在まで脈々と引き継がれています。

アイヌ文化伝承を目的に復元されているチセ（家）は、その象徴的な存在です。コタン（集落）でチセを建てる前後



には厳粛な儀礼が行われます。二風谷では、チセ建築の技術継承をはじめ、祈り言葉、作法、儀式に伴う用具・供物づくりなどが、定期的に行われる継承活動を通して大切に守り伝えられています。アイヌ文様とアイヌ口承文芸、アイヌ語地名は、二〇〇一年に北海道遺産に選定されている他、代表的な工芸品である「二風谷イタ」（盆）と「二風谷アツトウシ」（樹皮の織物）は、二〇一三年に伝統的工芸品に北海道で初めて指定されました。アイヌの生活様式や精神性と合わせて、あらためて二風谷の伝統工芸、アイヌ文化に対する関心が高まっています。

【ニシパの恋人】

平取町の農業特産物のブランド名は「ニシパの恋人」といいます。中でもトマトは全道一の出荷量です。全国的にも有名で、NHKフォースクールの教育番組でも取材されています。桃太郎という種類で甘みに富み、日持ちがよく病害虫防除の回数が少ない安心・安全なトマトだということです。トマトジュースやケチャップ、レトルトカレー等に加工しても販売されています。トマト嫌いな人も、一回食べればトマト好きになること間違いなしのおいしさです。



【びらとり和牛】

平取町は、和牛でも有名です。大自然と気候条件に恵まれた安全なびらとり和牛は「黒毛和種」という種類で、柔らかく口の中であじわけるおいしいお肉です。一度食べたならそのおいしさの虜になります。町内のレストラン数軒とびらとり温泉ゆからでは、そのおい

しさを味わうことができます。また、市内のスーパでは冷凍のハンバーグも売っています。

【伝統行事】

平取町は、すずらん生息地としても有名です。幌尻岳のふもとの野性すずらん群生地は約一五haと日本一の広さを誇ります。すずらんは平取町の町花でもあり、初夏の詩情を伝える可愛らしい姿と香りは北海道の野の花の代表の一つとして知られています。また、五月下旬〜六月上旬に開催される「すずらん観賞会」では、期間限定で一般開放され小鳥のさえずりを聞きながら初夏の平取町を楽しむことができます。さらに、アイヌの伝統行事として「チプサンケ」があります。



アイヌ語でチプサンケとは「舟おろし」を意味し、古くから伝わる技法で作られた舟の進水の儀式です。沙流川で行われる伝統行事で、アイヌの人々の生活習慣がしのばれる興味深い行事です。例年、アイヌ文化の伝統行事の一つであるチプサンケを体験しようと

多くの観光客が参加しています。アイヌ文化と、ニシパの恋人、びらとり和牛、すずらんのまち「びらとり」、最近では「ゴールデンカムイ」も注目されています。お近くをお通りの際は、ぜひ一度、平取町へお立ち寄りください。お待ちしております。



十勝清水町探訪

清水町・御影中

乙 戸 貴 宏

清水町は人口

が約八、八〇〇人

(令和六年九月現

在)、日高山脈の

東側、十勝平野の

西に位置し、面積

の約四六%が農

地、約四四%が山林という、大自然が広がる

緑豊かな町です。一年間を通じて晴れの日が

多く、雨や雪が比較的少ない気持ちの良い気

候であり、夏は三〇度、冬は氷点下二〇度近

くになる寒暖差の大きいところに特徴があり

ます。その気候が、豊かな大地をつくってい

ます。

町名の由来はアイヌ語で「明るく清らかな

川」を意味する「ペケレベツ」を意識したもの

です。町の基幹産業は畑作、酪農となっており

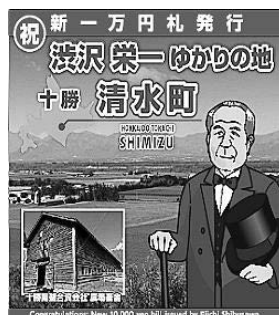
「第九のまち」としても知られています。また

今年、新一万円札の肖像に選ばれた近代日本

経済の父と呼ばれた実業家「渋沢栄一」ゆか

りの地としても紹介されています。そんな清

水町の魅力についてお伝えいたします。



【日勝峠展望台】

日勝峠展望台は、日勝峠五合目付近(標高七四〇m)にあります。

周辺は日高山脈襟裳十勝国立公園に指定されています。展望台からは十勝平野を一望でき、遠くには大雪連峰や阿寒の山並みを見渡すことができるなど大パノラマを楽しむことができます。



【十勝千年の森】

北海道ガーデン街道として点在する八つのガーデンの一つが「十勝千年の森」です。広葉樹林やカラ松人工林などが雄大に広がる景観です。「森」「庭」「アート」「農」「食」と様々な分野で、人と自然が触れあえる空間となっています。



【十勝開墾合資会社牛舎】

未開の地であった清水町を渋沢栄一は開墾事業に乗り出しました。この牛舎は渋沢が明治三十一年に清水町に設立した「十勝開墾合資会社」が建築し、民間資本により現在



の同町熊牛地区と人舞地区の原野四二七haを開墾した場所です。農場では大豆、小豆などを生産し牧畜や水田にも取り組みました。

【青淵山 寿光寺】

寿光寺の開教は、大正四年、十勝開墾合資会社(後の十勝開墾株式会社)が熊牛農場内に集会所兼説教所を建て、渋沢栄一の雅号「青淵」をお寺の山号に戴きました。昭和二年、本堂新築時に渋沢栄一より「青淵山」と書かれた扁額が贈られました。



【清水円山展望台】

「清水円山展望台」はNHK連続テレビ小説「一〇〇作目である『なつぞら』のロケ地として、ヒロイン・なつがキャンバスに十勝の風景を描く場面が撮影されました。



四季折々、豊かな十勝平野が広がる清水町。ぜひ、お時間のある際に足を運んでいただき、清水町の文化、歴史、食などを堪能していただければと思います。



花と味覚と歴史の町

あつけし

厚岸町・厚岸中

蠣崎 浩 一

【厚岸町の歴史】

厚岸町は、東北北海道では最も早く開けたところで、松前藩によるアッケシ場所の開設は寛永年間（一六二四年～一六四四年）とされ、文化元年（一八〇四年）には蝦夷三官寺の一つとして国泰寺が建立されるなど、東北海道開拓の玄関として、また、道東文化



発祥の地として長い歴史を誇っており、天然の良港と牡蠣を代表とする海の幸、屯田兵の入植から開拓された酪農郷と相まって発展してきました。

（写真 国泰寺跡）

【厚岸町について】

厚岸町は、北海道の南東部に位置し、東は浜中町、北は標茶町、西は釧路町と接しています。南には厚岸湾が深く入り込み厚岸湖に通じており、この水際に市街が広がっています。

す。総面積は七三九・一二平方kmあります。アッケシという地名は、アイヌ語の「アツケシ（牡蠣の漁場の意）」からきていると言われ、諸説あります。



（写真 厚岸の海と厚岸大橋）



【厚岸町の教育】

今年度の厚岸町の教育は、厚岸町教育大綱に掲げられている「郷土に立ち、未来を見つめ、共に歩む人」の理念の下、学校教育においては、「ふるさと・キャリア教育」を重点の一つとしております。

ふるさとを見つめ、



探究的に学ぶことで、ふるさとへの理解を深め、ふるさとを大切にしようとする心情を育てております。また、地域行事への積極的な参加をしております。

（写真 港祭パレード）

【花と味覚と歴史の町】

厚岸町の花はヒオウギアヤメです。厚岸町市街から一〇kmほど離れたところに「原生花園あやめヶ原」があります。毎年六月頃が見ごろで、観光地のひとつとなっております。



厚岸町の特産品の一つに牡蠣があります。その牡蠣を美味しく食べることができ「厚岸味覚ターミナル コンキリエ」は毎日観光客が絶えません。北海道道の駅食事メニュー部門では一四年連続第一位と輝かしい記録を残しております。

豊かな自然、美味しい味覚、貴重な歴史的建造物など、道東の一大観光地として位置付けられる厚岸町。毎年日本、そして世界からも二〇万人を超える観光客が訪れております。コロナ禍以前にはまだ戻りませんが、夏も涼しく、過ごしやすいくところであり、夏で、皆さんにも一度足をお運びいただきたいと思っております。

国後島を眼前にのぞむ

標津町

標津町・川北中

吉田 昌 弘

標津町は北海道最東の海である根室海峡沿岸の中心に位置し、鮭やホタテ等の水揚げがある水産業と、内陸部で営まれている酪農業の二つを基幹産業とする町である。そして眼前に広がる海を見やると、岸から

二四km先には、北方領土の一つである「国後島」がはつきりと見える。現在は止まっているが、以前は返還運動の一環として、国後島



に暮らすロシアの人々が、ビザ無し訪問で毎年來町していた。また標津町は、北海道に多い難読地名の町でもある。標津は「しべつ」と読み、道内の他の市町村同様、アイヌ語由来の地名に漢字をあてて町名としている。元々の読み方と意味には、「大きな川」という意味の「シ・ペツ」に由来するという説と、「たくさんの鮭」を意味する「シベヲ

ツ」(松浦武四郎著の知床日誌に記述がある)だとする二つの説があったが、標津町のHPでは「シ・ペツ」で紹介されていることから、こちらが公式である。ちなみに道内にもう一つある「しべつ」が、「土別」という漢字をそのまま読めば良いのに対して、標津は、かなりの高確率で「ひょうつ」と読まれてしまう。

アイヌ民族の伝説「金山の金塊伝説」

標津町の北部を根北峠に向かって進んでいくと、やがて「金山」という地名が付いた場所に至る。ここには現在、根室管内唯一のスキー場である「金山スキー場」があるのだが、今回紹介したいのはスキー場ではなく、この地に古くから残るアイヌ民族の伝説の一つ「金山の金塊伝説」である。要約して中身を紹介すると、大昔、金山の大酋長ヨコウシが持つ、数百貫もの金塊をねらう北見の酋長サツリーは、虎視眈々と略奪のチャンスをおかがっていた。そんな時、ヨコウシの一人娘ソキリコが大勢の護衛を付けて他所に嫁ぐことになった。これを好機と捉えたサツリーは、手薄になった金山の砦に手勢を率いて攻め込んだ。敗北を覚悟したヨコウシは、ただ一人で極秘のうちに金塊を金山の滝のところへ深く埋めてしまった。…というものである。ちなみに埋めた場所の謎を解く手掛かりとして、「朝日さす、夕日さす」という文句だけが今も残っているそうだ。今年一月に公開されて大ヒットした映画、「ゴールデンカムイ」の内容にも通じるアイヌ民族の伝説である。

鮭の町のシンボル「サーモン科学館」

北海道を代表する秋の味覚「鮭」は、標津町にとってはカントリーサインにもなるほど特別な魚である。そんな特別な魚である「鮭」をメインにした水族館が、



標津町営の「サーモン科学館」である。ここでは、鮭科魚類と周辺の魚たちを中心に展示している。鮭のライフサイクルに合わせ季節ごとに展示は変わり、九月十月には鮭の遡上を、十一月には産卵行動を展示する。また、見るだけではなく、「幻の魚」イトウのエサやりや、チョウザメの「指パク」体験等、魚と触れ合えるコーナーも充実している。もう一つ、鮭がらみで紹介したいのが「鮭の聖地の物語」根室海峡一万年の道程」である。これは、根室海峡沿岸の標津町・根室市・別海町・羅臼町が一市三町連名で申請書を提出した、地域の歴史文化のストーリーで、令和二年六月に文化庁主催の日本遺産に認定されている。ちなみにこの「鮭の聖地の物語」は、サーモン科学館内でも学ぶことができる。十二月〜一月までは休館だが、最寄りの根室中標津空港からのアクセスも良いので(車だと二〇〜三〇分)、ぜひ一度、お越しいただきたい。

真駒内の昔と現在

札幌市・真駒内中

太田 大輔

真駒内という地名は、アイヌ語で「背後にある川」を意味する「マク・オマ・ナイ」が語源であり、真駒内公園敷地内を流れて豊平川に合流する真駒内川を指すこの名称が、そのまま地名ともなったそうです。

真駒内は、エドウィン・ダンが明治政府の命を受けて拓いた土地です。

昭和二十一年、真駒内一帯を進駐軍が収用し、軍事基地「キャンプ・クロフォード」を建設しますが、昭和二十九年にキャンプ地の一部が返還されると、陸上自衛隊の真駒内駐屯地となり、昭和三十三年に敷地が全面返還されると、収容人口二万人規模の真駒内団地の造成が開始されました。

その後、札幌オリンピックのメイン会場に決まったことで、真駒内は本格的な宅地開発が行われることとなり、かつて運行されていた定山溪鉄道線の敷地の一部を転用して、地下鉄南北線真駒内駅が開業されます。そして現在も、札幌オリンピックの主会場となった真駒内アイスアリーナや選手村等の建物が、真駒内の各地に残されています。

【エドウィン・ダン】

アメリカ人のエドウィン・ダンは、父の牧

場で牧畜全般の経験を積み、叔父の牧場で競走馬と肉牛の育成法を学びました。

そして、開拓次官だった黒田清隆がアメリカ農務長官ケプロンと親交があった縁から、ケプロンの息子エー・シー・ケプロンによって開拓使の技術指導者に推挙され、明治九年、ダンの提案により、真駒内に牧牛場を建設することが決定しました。

ダンの功績と真駒内の歴史を示している「エドウィン・ダン記念館」は、エドウィン・ダン記念公園内にあり、記念館の建物は、明治二十年に建てられた真駒内種畜産場事務所を移築したものです。

【真駒内公園】

進駐軍のゴルフ場だった場所を、昭和四十二年に公園造成に着手、札幌オリンピック競技施設（真駒内セキスイハイムアリーナと真駒内屋外競技場）と併行して整備され、昭和四十九年に完成しました。

公園内の丘陵部は天然林が繁茂しており、ウォーキングやジョギングが楽しめる外周の3kmコースは、冬には歩くスキーコースとなります。

春には桜も楽しめます。



【真駒内セキスイハイムアリーナ】

札幌オリンピックのアイスホッケー、フィギュアスケート、閉会式に使用されました。多雪地域としては日本国内初の大ドーム建築であり、当時は屋内スケート競技場として日本国内最大規模でした。本校は、体育的行事の会場として利用しています。



【真駒内屋外競技場】

（真駒内セキスイハイムスタジアム）

周囲の最長5kmのランニングコースを、多くの市民ランナーが走っています。札幌オリンピックの開会式、スピードスケートに使用されました。夏期はテニスやフットサルのコート、冬期はスケート場として開放しています。また、花火大会も開催されています。

【豊平川さけ科学館】

豊平川さけ科学館は、真駒内公園内にある、サケ回帰事業と自然知識普及を目的とする博物館で、サケ類と札幌市内にいる水生生物を飼育、展示しています。

さけ科学館では毎年産卵に遡ってきたサケを捕らえて卵を採り、孵化させ、稚魚を放流しています。



文芸

健康であることと、労りの気持ちを実感

千歳市・富丘中

信定 学

幼き頃より身体を動かすことが好きで、やんちゃなことも多く行ってきた。スキーに行つてリフトに乗り損ね、しばらく宙づりになりながらも最終的には我慢できず落下した。それでも無傷で生還。このかた、怪我とも無縁で、前回発熱したのもいつだか記憶がない。当然コロナ禍でも健康体であった。

今年度、最後であろう転勤により本校に赴任した。当然ながら、初めが肝心と気持ちを引き締め初日を迎えた。しかし、朝起きるとなんだか身体に嫌悪感があり体温計を取り検温すると、四〇度の発熱があった。直ぐに自宅にあったインフルエンザ・コロナの検査キットを取り検査をした結果が、陽性反応がなかったのだ。風邪。それが四月二日であった。そこから、五月中旬にも発熱。今度は新型コロナウイルスを初めて経験した。そして、六月下旬、今度は運動中に「プチ」という音とともにアキレス腱断裂。現在に至っている。思えば、三年前にも本校に教頭として赴任したときの四月に、肘関節滑液包炎で通院したことを思い出し、それが今回の前触れではないかとも思った。ただ、偶然にも修学旅行・体育祭等の学校行事に穴をあけずここまで来てはいるが、体調不良・怪我をしたタイミングが市内定例校長会前で、校長会の中では話題の人物となつてしまった。

これまで、本当に健康体で何不自由なく過ごしてきた。そこにこれだけの短期間で体調不良・身体不自由を経験し、改めて自分がここまで活かされているのは周りの協力と、支援があつたのことに実感している。特に、アキレス腱断裂により松葉杖を使用し、両手が使えない不自由さ、自由に歩けない不自由さを経験し、人の温かさも感じた。

人には得意不得意がある。学校経営を考える時に、やはり多くの人が関わり合つてお互いを助け、組織的に対処する職員集団を作つていかなければいけないと実感した。

燃える闘魂

積丹町・美国中

小原 明彦

二〇二二年十月一日、新日本プロレスの創設者「燃える闘魂」アントニオ猪木氏（以下、猪木）がこの世を去った。猪木が難病を発症し、闘病中であつたことは承知していたが、私にとってこの訃報は信じ難いほどの衝撃であつた。

私は高校生の頃から、猪木の大ファンであり、尊敬の念を抱いている。今では当たり前となつている総合格闘技だが、一九七十年代にプロレスこそが最強スポーツ”KING OF SPORT”であることを証明するために、当時としては奇想天外な異種格闘技戦への挑戦が続けた。それがプロレスの認知度を向上させ、プロレスファンを増やした。世界の大物格闘家と闘う姿は、どんなに攻撃を受けても、立ちあがり負けないという執念と闘争心、そして最後まで諦めないという気持ちがリアルに伝わってきた。トップレスラーに与えられる異名「燃える闘魂」はこの闘う姿から名付けられたものである。また、猪木は喜怒哀楽…全ての感情の籠つた数々の名言を残した。その名言や闘う姿は、私の三六年間の教員生活や私生活に影響を与えてくれた一人であることは間違いない。特に、猪木が逝去した年、私は新任校長として新境地を切り拓こう！と意気込んでいた。そんな矢先、病気を患い休職を余儀なくされた。「復職することは無理かもしれない」などマイナスの気持ちばかりだったが、猪木の名言に励まされ、Youtubeなどで発信された闘病姿はリング上の姿と一緒で、その戦う姿に勇気をもらった。私は二〇二三年春、無事復職することができ、今、教職という仕事に改めて喜びと、やりがいを感じている。

今は、学校長としてどんな状況においても生徒・教職員を守るために敢然と取り組み、「明るく活気に満ちた学校」を目標に、自分には「何ができるか」、「やらなければならぬ事は何か」を常に考えながら、残り少ない教員生活、最後まで前を向いて真剣勝負で邁進していきたい。

生成AIに負けない!?

教師は将来無くならない職業?

小樽市・潮見台中

佐川 聖明

生成AI（以下AI）が普及し、自治体の中には部分的にAIを取り入れて業務を遂行しているという話も聞く。著作に関わるリテラシーや誤った情報に惑わされないなど、使用者が意識を高めていく必要があるものの、今後、AIを活用した業務は広がりを見せていくことだろう。

さて、教師の仕事への影響はどうだろうか。例えば、文章をつくることに窮した場面においてAIを活用することで、効率的な職務遂行に役立つことが期待される。AIの支援を受けることで教育の質の向上へもつながるのであれば、働き方改革の本質的な目的達成へと近づけるツールとして価値がある。また、AIを活用しながら学習課題の解決に向けて思考していくといった、学びの変化が進んでいくことも予想される。

では、AIが教師そのものに取って代わることがあるだろうか？それは「ない」と思う。逆にその存在は今まで以上に重要になってくると考える。教師は、学校は生身の人と人との学び合いをファシリテートしていく仕事だ。どんな力を身に付けさせたいかという明確な目標と学習デザインがないとAIの機能を十分に引き出すことができない。また、AIは個々の疑問を素早く解決してくれる利点があるが、個々が主体的に課題解決に向かって考える意欲や力を削いでしまう可能性がある。「〇年後残る職業」に教師が入っているのは、そのためではなからうか。

子供が自らの学びをメタ認知し、適切な学びに改善していくのは生身の教師だからできること。今までできないことが、教師の指導・助言によりできるようになった子供の姿を見ることが教師という仕事の喜びの一つだ。そして私は校長として、こんな教師の仕事ぶりを温かくサポートしていく、そんな存在でありたい。

（参考：月間教職研修二〇二四年八月号「生成AIは教師の仕事を奪うのか」高木俊輔氏）

「挨拶」って大事

上富良野町・上富良野中

澤田 克之

「挨拶」って大事だな。ふと考えるときがあります。そのちょっとしたひと言の中に感謝の気持ち、尊敬の気持ち、謙虚さ、心配りなどが含まれて相手に伝わり、それはそっくり自分に返ってきます。挨拶ができる人は、友人がいっぱいできる、家庭が明るくなる、就職活動も上手くいく。「挨拶」には不思議な力があると感じるので。

今の私たちの社会を取り巻く環境は、情報化が進み、人とのコミュニケーションも情報端末を利用したメール等での文字通信、アプリやソフトを活用したリモート会議や集会等が人との関わり的手段として一般的になっています。国でも、未来社会の姿を「Society5.0」とし、インターネット等を介して人とモノがつながり、人工知能（AI）により、必要な情報が必要ときに提供され、少子高齢化、地方の過疎化を克服し、希望のもてる社会、世代を越えて互いに尊重し合える社会、一人一人が快適で活躍できる社会の実現を目指しています。

しかし、このような中、「挨拶」ができない子供や大人が多くなってきたと耳にすることがあります。原因は分かりませんが、情報技術が進化したこの世の中においても、実際に相手と対面する場面であっても、インターネットを介した文字上であっても、「挨拶」は人との良好なコミュニケーションをつくる重要な言葉です。気持ちの良い挨拶をされて気分を害する人はいません。集団の中で生きていく以上、挨拶抜きで人間関係が始まることは絶対にありえないことです。

これらの社会がどのように発展していくかは分かりませんが、人としての心や考え方は、いつまでも普遍なものだと思います。学校、家庭、地域の中で交わされる明るい「挨拶」が豊かな社会を創る礎となり、お互いを幸せにし、潤いのある平和な社会になることを切に願っています。

「17音の願い」

旭川市・永山南中

鈴木 洋 伸

自作の「コンプライアンス川柳」が七〇〇句を超えました。教職員の不祥事防止に向けて校長として出来ることは何かを思案し、辿り着いたのが川柳でした。かといって、標語やお説教じみたものは馬の耳に念仏、釈迦に説法となってしまうます。そこで、創作の意図を二つに焦点化しました。一つは、職員が生徒や家族、同僚を大切にすることを強くすること。もう一つは、職員一人一人が教師として、自己を生かし、やりがいを感じられる職場を作ることです。この二つがコンプライアンスにつながる信じ、職員の心に残る言葉選びと川柳に添えるコメントを工夫しながら、毎週月曜日に発表し六年が過ぎました。

ゆれ防ぐ チームワークで 耐震化

【チームワークの重要性】

報・連・相 ポパイに勝る 私たち

【連携強化】

こだわりは 調和しなけりや ただのエゴ

【協働体制】

何を言う それより大事 誰が言う

【関係づくりの重要性】

いくつかの スパンが大事 子は多様

【多様性への対応】

プロの技 褒めると叱るの 黄金比

【匙加減の大切さ】

研修は 自分に習う 子らのため

【研修促進】

勝ち負けを 超えたところに 真の価値

【部活動】

くたびれた スーツも心も 丸洗い

【長期休業に向けて】

捕れぬ球 キャッチボールで 投げちゃだめ

【教育相談】

記憶より 記録が大事 生徒指導

【生徒指導の鉄則】

はっとする 我が身に潜む 性差別

【セクハラ防止】

経験は 意味づけを経て より光る

【学校行事後の指導】

月曜日、職員からの拍手に私が支えられていた六年間でした。

自由を求め、不自由とたたかう

中頓別町・中頓別中

小林 清 一

若い頃、生徒会の担当をすることが多かった。生徒たちは、校則に異議を唱え、「自由」がほしいとよく言っていた。「自由」には、「責任」が伴うんだぞ、と理論武装し、生徒たちとの折り合いを考えながら、落としどころを探るような話し合いをしたことを思い出す。そもそも「自由」という言葉を作ったのは福沢諭吉だっただろうか。聞きかじりでは、「自由」とは「自分をよし」とすることであり、精神的な決断を表していると感じている。

数年前、病に襲われ、右上肢を失った。美術教師であった自分にとって、この出来事は文字通り大きな痛手となった。だが、その後も管理職として教職を続けられていることを本当に喜ばしく思う。そうしてまもなくゴールにたどりつけそうなので、そこは充実感を感じている。

今では稚拙ながら、左手で文字や絵を描けるようになった。ただ、まだ不満足なことがある。それは学生の頃から趣味で続けてきたギターがうまく弾けないことである。身体的な「不自由」を「自由」に解放するには、そのハードルはとても高い。精神的な「不自由」と身体的な「不自由」では、比べることはできないかもしれないが、その克服への取組はいかなるものであろうか。それぞれが置かれている状況や程度、環境や支援など、様々なものによってその壁は異なるものだと思うが、そこへの「たたかい」を求める人には、何らかのかたちで応援したいと思う。

手術を終えて、教育現場に戻ったとき、生徒たちとの対面に当たっては全校集会を開いていた。そこで話をさせていただいたのは、確かに「不自由」になってしまったかもしれないが、決して自分が「不幸」だとは思っていない。今後もしもあきらめない心を大切に、粘り強く挑戦しながら生きていきたい、と左手で描いた絵を配りながら伝えさせていた。

左手でコードを押さえることはできる。右手にパイプを装着して、手ごろな位置にピックを接着する。こうすることで、何とかストロークを弾くことができるようになった。まだまだギクシャクしているが、小さな「不自由」とのたたかいが始まった。

尾崎豊にボブディラン、ギターを弾いて歌いたい名曲がたくさんある。

そばづくりで学んだこと

小平町・小平中

渡 辺 圭

この潮の匂い、風の強さ、教頭で赴任した岩内町を思い出す。同じ日本海を眺める、留萌管内小平町に校長として赴任して二年目になる。「なにを書こうか…」教員生活のほとんどがバレーボール一筋と言つてよいほどの私にとつては難解だ。

そばを作り始めたのは、赴任してきて一〇年以上親しくしていただいてる校長先生の「作るぞ！」の一言から始まる。当時の校長住宅に呼ばれ早速「そば教室」が始まり、二八蕎麦を時間をかけて丁寧にする。普段料理らしい料理を作ったことのないものにとつて「そば作り」は味わつたことのない達成感。この日から一七年になる。

そばづくりは奥が深い。一度でも経験のある人は分かるだろう。はじめは「圭そば」と言われ、「細くてうまい」ともてはやされ、調子に乗つてできるだけ細いそばをつくっていた思い出がある。しかし、そばが「ぼろぼろ」と崩れるのが妙に納得がいけない。なぜならそば屋のそばは、自分のつくるそばのように「ぼろぼろ」とちぎれないからだ。

そばをつくる行程には、「水回し・練り・くくり・だし・たたみ・ゆで」などがある。その中でも重要とされるのが「水回し」で入れる水の量である。そばの種類や季節、その日の温度や湿度に大きく影響される。「水回し」をしなからそばの堅さが「耳たぶ」ぐらいを理想に調整している。しかし、「ほど良く、心地の良い切れないそばにはほど遠い」。

「守破離」という言葉を御存知と思うが、「良いもの」を求めるとこの言葉に行き当たると。そばづくりも例外ではない。基本を大切にしながら自分なりのスタイルを確立し、自分の独自性を創造することだとおもふが、私の場合は未だ「守」の域から脱していない。修行がたらぬと言うことだ。生涯勉強と言うことだろう。

しかし、そばづくりで学んだことがある。それは、その日の天候・湿度、そば粉の状況を感じ取つて水の量を判断し、一気に「水回し」をする。三分間の真剣勝負でそばの良さが決まる。少しの迷いがあると、切れないそばにはならない。きつと、このように地の利を読み、風や潮目を読むことが、校長として大切である「判断力」にもつながる。さらにその決断の重さは、そばとは比べものにならない、子供たちの未来につながる重責であると、しみじみ感じる。

久しぶりの中学校勤務で感じた 小中高連携の難しさ

せたな町・瀬棚中

西山 恭 史

この春の人事異動で、二〇数年ぶりに中学校に勤務することになった。管理職になってから、小中高連携や行事を小中合同で行う学校での勤務もあつたので、中学生の姿は比較的目にする機会は多かったと思う。だから、小学生以上に主体的に活動する中学生の姿をこれからたくさん見られるという事にワクワクしていたし、今現在もワクワクしながら仕事を楽しんでいる。そんな私が、これまでの数ヶ月勤務する中で異校種間での連携に関して感じた事の一部を紹介させていただく。

今一番感じている事は、小学校の先生方に中学校へなかなか足を運んでももらえないということだ。このことは、全道の中学校長が集まつた場でも話題になり、全道的にもやはりそのような傾向なのかと思つた。自分が小学校で管理職をしていた時は、高学年の担任が中学校に足を運び、中学生の言葉遣いなどを感じて帰つてきて、中学校に上がる前のしばらくの間、学級経営の中で意識して過ごさせていたので、中学校に足を運ぶ価値を私自身は理解していた。もちろん、小学校の先生が多忙で行きたくても行けないという事も経験上理解している。しかし、小中高連携を進めていく上で、お互いの発達段階を理解することは基本であると思うので、上手く時間を作つて対応していく事が大切であると感じている。

そしてこの事は、高校から同様に中学校が見られているのであるうとも感じた。実際、高校から参観日等の案内が入っても、興味を示す先生はほとんどいない。今は、「卒業生の様子を見ながら、高校の授業の進め方と、自分の授業を比べて見てきて」と伝えて送り出している。帰ってきた先生は、それなりに自分の授業について考えるところがあつたようで、決して無駄ではなかつたようである。

私は、異校種の管理職を経験する事で、学校の内外の見え方が少し広まった様に思う。この感覚を大切に校種間連携の充実を目指したい。

採用校長として石別中学校に着任して

北斗市・石別中

高木 寿

本校は、昭和二十二年に開校し、平成十八年、上磯町と大野町の合併により北斗市立石別中学校として新たにスタートした。平成三年に新校舎が落成され、日本で最初の男子トラピスト修道院の下、聖なる丘に、「自然と修道院の調和」を基調とし、静寂にして敬虔、背後に丸山の嶺に緑が映え、全面に潮騒ぐ津軽海峡を望み、校舎のシンボルとしたカリヨンの塔が、来校者を歓迎する。また、石別町は童謡「赤とんぼ」の作者である三木露風が住んだ地として知られ、四季を問わず観光客の来訪が多い。

校舎は機能的にも施設のにも十分なゆとりがあり、特に多目的ホールには移動観覧席を備え、外観、内容ともに誇れる。この施設機能を効果的に活用した、大規模校にない特色を生かし、個に応じた密度の濃い教育を教職員の創意工夫をもって、自主性、社会性、積極性を生徒指導の要とした教育活動を展開している。

今年度採用校長として四月一日着任し、校舎を一回りすると校長としての職務に責任と重圧を感じたことを今も思い出す。新鮮な空気を感じながら校長室を整理し一息つくと、昨日まで教頭として勤務した頃との違いを改めて実感する。教頭時代を振り返ると三校八年間の勤務で、教育委員会、保護者、地域社会、関係機関と多くの対応の中、学校運営を進める中で最も重要な「危機管理」と「傾聴」を意識して取り組む重要性を感じ、校長としての大きな役割でもあると実感した。

現場で指揮する教職員は「子供を主語に」を実践するのに対し、校長は「教職員を主語に」を大切にしなければならない。教職員一人ひとりの個性を伸ばすのは校長にとってもやりがいの一つでもある。「このままでもいいや」ではなく新しいことに挑戦し、教職員、保護者、地域社会が互いにウェルビーイングの関係づくりを目指して精進したい。

後ろを振り返らずに前進あるのみを貫いていきたい。

自分の「ルーツ」を探る

函館市・恵山中

宮前 由一

一九七七年に放映され、当時話題となった「ルーツ」というアメリカのテレビドラマがあった。原作本を著作したアレックス・ヘイリーの祖先（ルーツ）であるクンタ・キンテ（西アフリカの小国ガンビアからアメリカ合衆国に奴隷として連れて来られた）をスタートに、そこからヘイリーに至るまでの親子七代、二〇〇年に渡る物語である。当時小学校六年生だった私も、「ルーツ」や「クンタ・キンテ」の展開をクラスメイトと話していた。その頃は自分自身の「ルーツ」など考えもしなかった。

しかし、あれから四七年が経ち、退職（役職定年）を再来年に迎えるようになったこの頃、歳のせいか自分の「ルーツ」をしばしば考えるようになった。きっかけは、私が四〇歳を迎えたあたりに、突然、母から「あなたの（母方）の祖父はアイヌと和人のハーフだった。」と告げられたことだ。子供の頃、父方・母方ともに本州出身と聞いていた。私は社会科教師のため、北海道の歴史の学習でアイヌ民族を扱ったことはあったが、まさか自分がその血を引いているとは驚きだった。母方の祖父は函館市大町で理容店を営み、そこが私の実家である。顔の彫りが深く、眉毛が長く濃い容貌だった。母に聞いたところによると、現在のニセコ町昆布地区の生まれで、何かのきっかけで函館に来たそうだ。手先が器用だったため、現在の函館市弥生町にあった遊郭で散髪の仕事に就き、その後、母方の祖母の家の婿養子になった。また祖母の祖先は秋田の医師だったそうだ。父方はどうやら複数の祖父、祖母が居る複雑な家庭だったようだ。最近、母がめつきり弱ってきたので自分のルーツを聞き出すことを始めた。昔のことほどよく覚えていたのか、祖先の一人のことを話しているうちに「そういえばその人はね…」と話が脱線し、なかなか聞き出しが進まない。根気よく聞き出しを続け、自分の「ルーツ」がいた土地へ、ゆっくり旅をすることが最近の夢である。

未来へ響け！鐘のなるまち秩父別町！

秩父別町・秩父別中

内藤 竜 治

明治二十八年に屯田兵とその家族によって開かれた秩父別町は、鬱蒼とした未開の原生林を切り拓きぬかるむ湿地と格闘しながら開墾された開拓者の熱意が息づく農業の町である。道内で稲作が盛んになると米の栽培が始まり、屯田兵が解体された後も稲作に対する熱意は町民に受け継がれ、「日本の米どころ百選」にも選ばれた良質米産地となった。開拓当時、屯田兵に時を知らせる「屯田の鐘」があった。その役目は現在、町の中心に立つ開基百年記念塔に設置された洋鐘が引継ぎ、「鐘のなるまち」のシンボルとして一日二回、町民に鐘の音を響かせている。近年は「ローズガーデンちっぷべつ」や「観光体験牧場めえめえーランド」などレジャー施設の整った行楽地としても知られるほか、町の中心部に広がる「ベルパークちっぷべつ」が子育て世代に大人気となり、街の魅力を引き上げている。

今年開村一三〇年を迎えた本町だが、令和八年度にはさらに大きな転換期を迎える。それが義務教育学校「秩父別学園」の設立だ。設立に向けて、開校準備委員会や町教育研究会を中心に、教育委員会・教職員・保護者・地域が連携し、知恵を出し合い、「全ては子供たちのために」を合言葉に連日協議を重ねている。具体的には、小中連携事業として六年生による中学校登校日を設定し、中学校の先生による授業体験や中学校時程で一日を過ごす等の取組を進めている。小中の統合がよりスムーズになるような取組だ。義務教育学校となれば、中一ギャップの緩和、系統性を意識した小中一貫教育、異学年交流による精神的な発達等が期待される。現在の小中学校とも長い歴史を刻んだ伝統ある学校であるが、少子高齢化の波は確実に進んでいる。だからこそ、未来を担う子供たちへの期待が大きいのだ。この町に生まれたことを誇りに大きく飛躍してほしいという願いのもと、学校だけでなく、保護者・地域が一体となって子供を育てる町、それが秩父別町だ。

ゲームチェンジャー

苫小牧市・明野中

井内 宏 磨

校長室の棚の上に、一球のボールが飾ってある。そのボールには**第87回 全国高校野球選手権大会 V2 駒大苫小牧高校**の文字が…。深紅の優勝旗が津軽海峡を越えて二〇年。

「駒大苫小牧は、高校野球を変えました」とは、旧知のスポーツライターの言葉である。本州の強豪校が全力疾走するようになった、チームプレイを重視しだした、複数の投手を用意するようになったなど、数え上げたらきりが無いとのこと。特に、地方大会から甲子園決勝戦までノーエラーの守備を創り出した「雪上ノック」は北海道の「当たり前」を大きく覆した。

駒大苫小牧はゲームチェンジャーであった。ゲームチェンジャーとは、物事の状況や世論、それまでの流れを一転させる個人や企業、プロダクトやアイデアのことを指す。駒大苫小牧は野球だけではなく、私たち道民の意識も大きく変えたのではないだろうか。北海道もやればできる！体育会系の私の思考が単なる「努力」から「努力＋工夫」に変わったのもあの夏のおかげである。

最近の高校野球を観ていても、考えさせられることが多い。令和四年、東北に初の優勝をもたらした仙台育英高校 須江 航監督からは、新しい時代のリーダーシップ、マネジメントを感じる。翌年に優勝した慶應高校の、選手自身が考え主体的に取り組むスタイルは、今の学校が目指している姿と重なる。そして今夏の低反発バット導入は、戦術やポジショニングなどこれまでの戦い方を一変させた。一人一台端末が導入された学校は、どれだけシフトチェンジしたのだろうか。

「変えることがあなたの仕事ではないのか」

二〇年前のゲームチェンジャーが残してくれた一球は、あの夏の思い出とともに校長室の私にささやきかけるのだ。

新ひだか町での教育の四季

新ひだか町・静内第三中

飯塚 俊 郎

本校は、新ひだか町の豊かな自然の中で教育活動を進めている。春、学校に向かう朝の通勤路では、草を食むサラブレットの親子が戯れている。二十間道路桜並木の桜が満開になる頃、花びらが舞う中、生徒たちは、体育大会や中体連に向けて仲間と力を合わせて汗を流す。桜の花が咲き誇るように、仲間、そして教師との絆が強まり、学校がまとまっていくのを感じる。

夏、競走馬のサマーセールが開催され、牧場は活気に満ちる。新ひだか町ならではの、ライディングヒルズでの学習がある。馬との触れ合いを通して、生徒たちは馬とのコミュニケーションや軽種馬産業について学び、ふるさとへの愛着と誇りが育まれる。協力して馬の世話をし、共に乗馬を学んだりする中で、信頼関係が生まれ、結束が一層強まる。

秋、山の木々が色付き始め、ナナカマドにオレンジ色の実を付ける頃、学校祭が開催される。準備期間が限られている中、教師も生徒と一緒に頑張って締切りギリギリまで全力で準備を進める。教師は、生徒自らの創造力を発揮できるよう、自身の多様な才能を発揮しサポート。共同作業を通じて、両者の信頼がさらに深まる。三年生は進路選択に向けて真剣に考え始める。夕暮れ時、牧場のシルエットが美しく映え、馬たちの吐く息の白さに秋の終わりを感ずる。

学校周辺の美しい風景の中、牧場で戯れる馬たちのように、互いに支え合いながら、新ひだか町でしか経験できない行事や活動を通じて、学校全体の一体感を高め、生徒のウェルビーイングを高められるよう、教職員、学校全体のウェルビーイングを高める。もし、学校のサマーセールがあつたとき高値が付くように。

制服がクラスTシャツか 三年生の挑戦

更別村・更別中央中

小室 彰 人

本年度の文化祭が近づく中、三年生は最後の文化祭を思い出に残るものにしようと力を注いでいた。文化祭を数日後に控えたある日、三年生の合唱責任者が校長室にやってきた。「おそろいのクラスTシャツを着て、合唱をさせてほしい」といった内容だった。理由は、「病気で長期入院をしている仲間のために、励ましのエールを送りたいから」というものであった。しかし、合唱は制服で行うルールとなっていた。ここから、教師と子供の攻防が始まった。教師の意見も割れた。「制服でない駄目な理由はない」「生徒の想いも尊重すべき」といった意見や「突然変わると、下級生や保護者から、疑問が出てくるので次年度の課題とするのがよい」「決まっていることを、校長先生に言えば変更できるとなると、なんでもあり状態になる」といった意見など様々であった。結局、判断は前日の朝までもち越され、特例として認めることとなった。文化祭当日、三年生はステージに立った。入院していた仲間も、同じTシャツで来場し、皆と一緒に発表を楽しんだ。観客からは大きな拍手が送られ、クラス全員が一つになった瞬間だった。

昔、「男たちの旅路」というドラマがあつた。鶴田浩二という役者が警備会社の上役として出演していた。若い警備員が「オレの仕事には意味がない」と鶴田に抗議する。クビになるのを覚悟している。しかし、鶴田は納得して、別の仕事を与えた。話を聞いた他の若者が「なんだ、あいつがうまくいったんならオレたちも文句言おうぜ」と五、六人でゾロゾロと鶴田の前に行く。しかし、鶴田は「クビを覚悟で、たった一人で来たものと、お前らのように他人がうまくいったからまねをしようとする者は全然違うんだ」と机をたたいた。

次年度、生徒が僕に直訴してきたら、鶴田浩二になろうかと思ってい

魂宿る 道具の魅力

帯広市・帯広第七中

志 田 直 樹

たいした趣味ではないが、車が好きで少々の整備はできる。というかむしろやりたい方である。そんなことから工具にも色々興味があった。探せば身近に安価な工具を取り扱う専門店もあり、驚く程の金額で購入できる物もある。「〇〇（安価な工具専門店の名称）の工具ってどうなの？」あるとき、プロの整備士に尋ねた。

「そんな百均みたいな工具で整備されて、まともに請求されたらどうなんでしょうね。技術も当然だけど使う工具だって一流でなかったら車にもお客さんにも申し訳ないですよ」

同じ道具なら技術で、同じ技術なら道具で整備は変わるのだと聞かされた。勿論、どちらも一流であることが大事なのだと。「(工具の)かみ合わせが良くないとボルトをなめてしまう。作業がはかどらず無駄な時間が生まれる。部品を壊したりしたらお客さんを待たせてしまう。部品や代車だって余計にお金がかかってしまう」「道具のせいでお客さんに迷惑をかけたり、仕事の評判を落としたりするのは本意ではない」

妙に納得できる言葉であった。この言葉を耳にしてから、人に何かを伝えるメモ書きや、メッセージを残す際に万年筆を使うようになった。万年筆を使うことがいい仕事に直結するとは思っていない。ただ、その心意気は大切にしたい。丁寧な仕事、心のこもった仕事にするための自分なりの手法のひとつとしている。

同時に、「物には魂が宿る」のではないかと勝手に考えている。深夜、新雪の中から探し出したり、立ち寄ったコンビニを再訪して見つけたりと何度も遺失し、それでも私の元に戻ってきたネクタイピンなど、不思議な縁を感じる。時計、鞆、車…目に見えぬ部分では香りもそうかも知れない。物へのこだわりや愛着が自分に自信を与えたり、時に自分を守ってくれたりする。私はそう信じている。

教師の力

白糠町・白糠学園

須 藤 光 秋

「やさしさは力なり」この言葉は、恩師が修了式の日にクラスの子供たちに伝えた言葉。大学卒業後、中標津町の小学校に期限付教諭として赴任し、私は一年間をこのクラスの副担任として過ごした。先輩の学級経営を見て感じ、毎日が充実した日々であったことを思い出す。「やさしさ」は「思いやる心」を意味していたと思うが、学級経営では子供を甘やかすのではなく、子供一人一人に寄り添う温かさを学ぶことができ、私の教師としての原点がここにあったと思っている。

最近、久しぶりに文化祭演目(劇)を担当する機会があり、やってみると、これが大変だった。本番もドタバタした所はあったが、子供たちから「中・高等部になっても、劇をやりたい」という振り返りの声を聞き、ほっとしている。また、担当者として汗を流したことで、子供の集中を継続させるなど、生徒指導を行いながら日々の授業を展開している本校の先生方の力を改めて実感した。

私は「教師の力」を思うとき、ある会報の巻頭言を思い出す。(要旨：高二の途中から荒れ始めた生徒。担任はその原因を求め、その子と親とも何度も話をした。家庭を顧みない父と母。担任はこの子の自立を考え、所属していたサークル活動に生徒を強引に引っ張りだした。老人ホームでのボランティアである。学校では怒られてばかりの生徒に対し、老人の生徒へのふれ合いが自己有用感を高め、一年が過ぎ生徒は立ち直った。ある日、生徒は老人の臨終に立ち会い、その後、父親と母親にもう一度家族でやり直そうと訴える。)当時の大山節夫釧路教育局長の巻頭言で、「子どもたちには計り知れない力がある。そして、この担任がいなければ、この子はどうなっていたのだろうとも思うのである。」と局長は結ぶ。

教師とは、本当に魅力ある仕事ではないだろうか。苦労は絶えない教育現場ではあるが、これからも「教師の力」を子供たちへ届け続けよう。

花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは

釧路市・美原中

中野昌史

兼好法師が著したといわれる『徒然草』（第一三七段）の冒頭部分である。今から七〇〇年程前（十四世紀）の成立とされ、雑纂といわれる作品であるが、とりわけこの章段には私にとって心惹かれる「何か」があるように感じている。時代なのか、年齢なのか。近年、特にそう感じるようになってきた。

【原文】花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは

【現代語訳】花は盛りに咲いているのだけを、月は一点のくもりもないのだけをみるものか（いや、そうではない）
そして、

【原文】雨にむかひて月を恋ひ、垂れこめて春のゆくえ知らぬも、なほ、あはれに情深し

【現代語訳】雨の夜に月のことを思い、部屋に引きこもって春がどこまで訪れたか知らないのも、やはり情趣が深い。

と、いう。旧来からの価値観に「だけ」しぼられること。見えている現実に「だけ」価値を見出すこと。これらを否定し、見えないものに目を向け「心の内にある豊かさ」に焦点をあてる。

【原文】月の夜は闇のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ

【現代語訳】春の月の夜なら、寝床の中からも月や花をしのんでいるのこそ、頼みがいがあつて、おもしろいことだ。

現代は「Society 5.0」と言われ、急激に変化する時代。思えば『徒然草』の時代も「鎌倉時代／南北朝時代」と、大きな変化をとげている。

【原文】よろづのことも、始め終わりこそをかしけれ

【現代語訳】すべて何事でも、始めと終わりが特別におもしろい。

新たな時代がはじまろうとしている今だからこそ、『徒然草』に表れた内容に心惹かれる「何か」を感じているのかもしれない。否応なくおしよせる変化にどう向き合うか。実にしなやかな向き合い方だ。

原風景

別海町・上春別中

丸山宣雄

三七年間の教員生活が間もなく終わる。来し方を振り返るとき、数えきれぬほど山と谷があつた。よくぞここまでと少しばかりは褒めてあげたい気分である。常々自己評価低めの自分であるが、今日ばかりはその限りではない。三七年という年月は重い。

札幌に生まれ過ごし、学生時代を函館で過ごした。札幌は大会だったから、函館に引越したときは、いささか驚いた。空が広い。街行く人も少ない。夜の灯りも何だか心細い。当たり前だ。住む人の数が違えば街のスケールも比例する。今ならば函館は十分都会と分かるから、当時は随分と世間知らずだった。

そんな若造に採用の一報をくれたのは根室教育局である。赴任先はある町の、ある集落の中学校だと言う。とりあえず地図を買って、広げて驚いた。根室は函館から最も遠かった。行ったことも見たこともない土地に、今からたった一人赴くことは「若造」にとってこの上なく心細かった。

車は持つておらず、国鉄を乗り継いで釧路から根室、そして赴任地へと二日かけて到着した。春の道東はまだまだ雪深い。白と灰色の色彩と、古びた住宅と、笑顔の職員たちが若造を出迎えてくれた。校長が、今日は夕飯を食べに来いと言う。そんな時代だった。お言葉に甘え校長住宅をお邪魔した頃にはもうとつぷりと日が暮れていた。振る舞われたのは食事だけでなく、温かい励ましの言葉だった。

校長宅を辞去した際ビールの酔いもあつてか、つと足下がふらつき、雪解けの水たまりに思い切り足を突っ込んだ。何も見えなかった。足先から冷たさが上ってくるが、月も街灯もない。目の前に夜の帳がどこまでも広がっている。そりゃ水たまりも見えないわけだと独りごちた瞬間、涙が零れた。今でも大切な私の原風景である。

学校には言葉が多過ぎる…

清里町・清里中

湯 浅 啓 介

国語の教員として勤めてきた。職種は変わったが、今も学校経営より国語の授業の方が得手だと自負している。職業柄どうしても「言葉の在り方」について考える癖がついてしまっており、教科担任の授業を参観しながら「生徒たちは説明されている言葉の意味がわかっているのかなあ…」と顔を眺めている。数学者にしてエッセイストである藤原正彦氏は「(初等教育は)一に国語、二に国語、三四がなくて五に算数」と主張された。初等教育ではなくとも同感だ。

ただ、「学校には言葉が多過ぎる…」と感じてもいる。「学校教育目標&今年度の重点目標」は軸として必要だ。しかしそれを実現するためにさらに言葉を重ねていくのが(自戒の念も込めて)学校の実情だろう。「〇〇教育推進の重点」「教育スローガン」「校内研究主題」「生徒会行事目標」等、言葉の溢れかえりを感じざるを得ない。今年は生徒会担当に「生徒会のスローガンは、年間の活動に加えて主体になる運動会と学校祭でも同じ言葉を掲げてください」と指示をした。生徒たちは一つの言葉のもとに同じベクトルを向けて活動に努力する様子が見えた。

また、ある言葉を提示するものの、それを他の言葉で説明しなくてはならない概念としての言葉もいかなものかと感じている。もちろん言葉の定義付けを否定するものではないし、抽象的な表現に成らざるを得ない言葉が存在することも確かだ。しかし相手意識をもつてしっかりと伝わる言葉を示すことこそが肝要だと考える。学校の公開研究会に行き、研修部からの説明が今一つ伝わってこないことがある。それは書き言葉を読んでいるだけであり、相手意識をもった話し言葉になっていないからだ。伝わらない言葉はただの音声に過ぎない。

と、ここまで書き言葉をつづってきた。言葉が多かったかなあ…と反省。

札幌村と札幌黄と札幌中学校

札幌市・札幌中

竹 内 義 人

「札幌市立札幌中学校の竹内です」と札幌市外の方に自己紹介するとき、かなりの頻度で聞かれることがあります。「札幌中ってあるのですね。」「札幌のどこにあるのですか?」「中央区ですか?」「札幌には、ほかに教育大学附属札幌中学校があるので混乱するのでしょうか。」

札幌市の隣に昔、「札幌村」という「村」があつたことを知らない人も多いようです。新制中学校は昭和二十二年の学制改革によって誕生しましたが、それと時を同じくして「札幌村立札幌中学校」が開校しました。昭和三十年に札幌村が札幌市に編入され、本校は札幌市立札幌中学校となり、現在に至っています。本校は中央区にある学校ではなく札幌村、つまり現在の札幌市東区にある中学校です。

札幌市には百校ほど中学校がありますが、札幌市立の学校で「札幌」がついている中学校は「札幌中」だけです。それだけでも誇らしい気持ちになります。札幌村の中心地である「元村」が現在の「元町」になっています。東区では住所にない「美香保」や「元町」、「札幌」といった札幌村などの「ゆかりの地名」が通り名として現在も存在しています。

今話題の玉葱、札幌黄。今は同じ東区の丘珠地区が主産地になっていますが、もともとは札幌村が産地です。本校の校歌に出てくる「珠玉」。辞書を引くと「真珠や宝石など、美しいたま」とありますが、まさしくこれは「札幌黄」をさしています。

私は札幌の出身ではありませんが、人生の中で一番過ごしているまちは札幌です。それでも機会があるごとに故郷の積丹半島そして、日本海や海の向こうに見えるニセコ連山を思い出しています。

実際は札幌村のころから住んでいた人は少ないのですが、生徒には自分が住んでいる地域に誇りをもって、胸を張って、私と同じように、思いをはせてもらいたいと願っています。

令和6年度 一般会計予算

収入の部

(単位：円)

科 目	令和5年度（補正予算）		令和6年度 予算額	予算額比較		備 考
	予 算 額	決 算 額		増	減	
1. 会 費 収 入	34,732,800	34,732,800	34,473,600		259,200	単置校5,400円×507校×12か月=32,853,600 併置校2,700円× 50校×12か月= 1,620,000
2. 繰 越 金	5,115,624	5,115,624	3,955,754		1,159,870	
3. 雑収入・特別会計	1,600,050	1,610,077	1,710,050	110,000		銀行利息、全日中通信費助成10,000 全日中地区研究補助（研究大会基金より入金）1,700,000
計	41,448,474	41,458,501	40,139,404		1,309,070	

支出の部

科 目	令和5年度（補正予算）		令和6年度 予算額	予算額比較		備 考
	予 算 額	決 算 額		増	減	
研究大会費	9,875,000	9,672,520	9,552,000		323,000	
1. 大会運営費	3,000,000	3,000,000	3,000,000			研究大会実行委員会による大会運営費（担当地区決算）
2. 研究活動費	4,575,000	4,575,000	4,002,000		573,000	各地区の研究活動補助費（2,000円×461校）＋札幌3,080,000
3. 旅 費	2,300,000	2,097,520	2,550,000	250,000		役員・研修理事・司会・提言等旅費
研究調査費	1,911,000	1,735,719	1,790,000		121,000	
1. 旅 費	1,400,000	1,285,309	1,330,000		70,000	ブロック研修費、地区教育経営研究会、地区交流等旅費
2. 印刷製本費	355,000	303,600	310,000		45,000	学校経営の資料
3. 通信運搬費	56,000	46,810	50,000		6,000	上記送料
4. 賃 金	100,000	100,000	100,000			調査アンケート作成等筆耕料
研究物刊行費	2,070,000	1,959,990	2,220,000	150,000		
1. 印刷製本費	1,750,000	1,646,820	1,900,000	150,000		道中だより、全道中、法制研集録、実態/調査報告書、研究紀要
2. 通信運搬費	320,000	313,170	320,000			上記送料
事務局費	27,592,474	24,134,518	26,577,404		1,015,070	
1. 借 損 料	3,525,000	3,509,737	3,700,000	175,000		事務所賃貸料、会議会場費、機器リース料、車借上げ料等
2. 給料・手当	5,424,000	5,420,520	5,445,000	21,000		専任職員給与、手当
3. 退職・社保	1,196,000	1,172,753	1,190,000		6,000	社会保険料、雇用保険料、退職積立金
4. 備 品 費	80,000	93,360	0		80,000	事務所備品
5. 印刷製本費	850,000	868,871	870,000	20,000		総会要項、運営要綱、感謝状、要望書、提言書、役員名刺等
6. 通信運搬費	820,000	659,081	720,000		100,000	電話代、郵券、託送料、振込料金
7. 消耗品費	450,000	426,273	420,000		30,000	用紙代、封筒、購読料、プリントナーインク、その他事務用品
8. 慶 弔 費	100,000	80,000	100,000			退職・退会役員記念品、祝電、香典、供花
9. 賃 金	200,000	200,000	200,000			筆耕料、印刷賃金
10. 渉 外 費	780,000	657,853	730,000		50,000	関係機関総会・研究大会参加費、外郭団体会議、広告料、食糧費
11. 負 担 金	4,160,000	4,086,600	4,100,000		60,000	全日中会費、交通安全協会、旧北方圏、社明運動、道P連他
12. 旅 費	7,890,000	6,858,350	7,400,000		490,000	総会、理事研修会、事務局研修会、全日中総会・研究協議会
13. 送 金 費	80,000	80,000	80,000			会費等地区からの送金手数料補助費（各地区 4,000円）
14. 雑 費	37,474	21,120	22,404		15,070	会議用お茶代、両替料他
15. 予 備 費	2,000,000	0	1,600,000		400,000	
計	41,448,474	37,502,747	40,139,404		1,309,070	

令和6年度 北海道中学校長会役員・理事

会 長	河村 克也 東光中 (岩見沢市) 0126-22-0329	副 会 長	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック
			柴田 真琴 仁木中 (仁木町)	裊田佳奈恵 当麻中 (当麻町)	後藤 正弘 大野中 (北斗市)	河村 克也 東光中 (岩見沢市)	能戸 貴英 南町中 (帯広市)	三浦 英悟 琴似中 (札幌市)
事 務 局 長	吉本 将樹 稲穂中 (札幌市) 011-684-4601 直011-688-7225	事 務 局 次 長	高橋 正幸 平岡中 (札幌市) 011-883-3761		事 務 局 次 長	山田 誠一 室蘭西中 (室蘭市) 0143-25-1000	会 計 理 事	伊藤 仁弥 長橋中 (小樽市) 0134-24-0465
運 営 委 員 長	大高 雅子 あやめ野中 (札幌市)	運 営 委 員	1ブロック	2ブロック	3ブロック	4ブロック	5ブロック	6ブロック
			明村 秀之 東中 (余市町)	平田 隆男 中富良野中 (中富良野町)	関田 貴人 上ノ国中 (上ノ国町)	川野 靖幸 静内中 (新ひだか町)	久保 大輔 渚滑中 (紋別市)	大高 雅子 あやめ野中 (札幌市)
部	副会長 (事務局)	部 長	部 員			副部長	幹 事	
経 営	後藤 正弘 大野中 (北斗市)	小森 亨 樽川中 (石狩市)	細谷 隆志 稚内東中 (稚内市)	宮腰屋 由 江差中 (江差町)	中田実千代 三石中 (新ひだか町)	前田 真志 柏陽中 (恵庭市)	北村 剛 駒里小中 (千歳市)	寺嶋 裕介 新篠津中 (新篠津村)
	吉本 将樹 稲穂中 (札幌市)		藤田 崇充 別保中 (釧路町)					
研 修	能戸 貴英 南町中 (帯広市)	新津 智哉 北辰中 (札幌市)	吉岡 智尋 北陵中 (小樽市)	千葉 良彦 富良野西中 (富良野市)	田上 直広 湯川中 (函館市)	田丸 明史 手稲西中 (札幌市)	川原 明子 屯田北中 (札幌市)	中井 幸一 篠路中 (札幌市)
	高橋 正幸 平岡中 (札幌市)		今野 典之 翔陽中 (帯広市)	葛迫 勝秋 中春別中 (別海町)				
対 策	柴田 真琴 仁木中 (仁木町)	福澤 秀 明星中 (旭川市)	林 尚起 京極中 (京極町)	増田 正弘 八雲中 (八雲町)	松野 岳彦 明成中 (岩見沢市)	坂本 征人 奈井江中 (奈井江町)	小泉 寧 新十津川中 (新十津川町)	小田嶋 智一 北星中 (旭川市)
	伊藤 仁弥 長橋中 (小樽市)		久保 睦則 幕別中 (幕別町)	小玉 功 幣舞中 (釧路市)				
情 報	裊田佳奈恵 当麻中 (当麻町)	橋本 正之 訓子府中 (訓子府町)	嶋本 敏幸 増毛中 (増毛町)	熊谷 誠 沼ノ端中 (苫小牧市)		鏡 武志 和光中 (苫小牧市)	高橋 泰明 東明中 (室蘭市)	宮田 真基 鵠川中 (むかわ町)
	山田 誠一 室蘭西中 (室蘭市)							
事 務 所	北海道中学校長会事務所 〒060-0001 札幌市中央区北1条西3丁目 敷島プラザビル T E L : 011-251-1344 F A X : 011-251-1302 E-mail : dotyu-kotyokai@bz04.plala.or.jp						事務主事	加藤 秀典
							会計主事	笹川 恒春

表紙に寄せて

「広大な十勝平野」

幕別町・幕別中

久保睦則

十勝平野は、北海道東部に位置する広大な平野で、日本有数の農業地帯として知られています。十勝川を中心に広がる肥沃な大地は農業に適しており、小麦、ジャガイモ、ビート、豆類、そして乳牛の飼育が特に盛んです。日本国内外に高品質な食材を供給するこの地域は、「日本の食糧基地」とも称されています。

平野の周囲には大雪山系や日高山脈がそびえ、雄大な自然に囲まれています。十勝平野は広大な田園風景とともに、豊富な温泉地もあり、特に十勝川温泉は、観光地として人気があります。農業体験ができる観光スポットも充実しており、地元特産品を味わいながら、写真のような広大な自然を楽しむことができます。

そのような美しい自然環境と豊かな食文化が調和し、雄大な地域で自然と人々の生活が共存するこの十勝・帯広で、胆振東部地震により、大会運営も危ぶまれた中、「チーム道中」として熱い思いでお集まりいただいた十勝・帯広大会の前回開催から六年、第六十五回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会を、ふたたび開催できたことは、私たちにとって大きな喜びであり、その大会を皆様の御理解、御協力のもと無事に全日程を終えることができました。

これは、道中関係者をはじめ、参加者の皆様の御陰です。十勝小中学校長会、帯広市校長会一同、心より感謝とお礼を申し上げます。誠にありがとうございます。

編集後記

令和六年度版会誌「全道中」第九四号が、皆様の多大なる御協力により出来上がりました。ここにお届けいたします。

北海道教育委員会教育長 中島俊明様、北海道立教育研究所長 川端香代子様、「潮流」への御寄稿をはじめ、「特集」では、三人の会員の皆様から先進的な実践について御寄稿いただき、テーマに迫ることができました。

また、北海道中学校長会役員・理事、各地区役員をはじめ、多くの会員の皆様に御協力をいただき、各地区の活動や風土紹介、論考、文芸など多彩な内容を掲載することができました。会員の皆様の職能向上や広い北海道の教育情報源の一助となれば幸いです。

最後になりますが、「令和の日本型学校教育の実現」に向けて日々実践を推進する中、本誌の発行に快く御協力いただきました全ての皆様に心より感謝申し上げます。

全道中 第94号

発行 令和七年三月一日

発行者 北海道中学校長会

会長 河村 克也

札幌市中央区北一条西三丁目

札幌プラザビル内

電話(〇一一)二五一一一三四四

FAX (〇一一)二五一一一三〇二

編集 北海道中学校長会情報部

印刷所 佐藤印刷株式会社

札幌市北区北七条西八丁目一

電話(〇一一)七二六一三三四五

北海道中学校長会歌

Moderato (♩=96)

清水 弘 作詞
上元 芳男 作曲

mp

ど う こ く の い く さ を こ え て あ た
み ら い へ の き ぼ う ゆ た け く あ た

5 *mf* *V*

た の ら し き じ だ い を ひ ら い く お さ
の も し き わ か き を せ だ い の

9 *V*

お い な る ね が い に も え て わ れ
ち お お き み が の あ け ぼ の

13 *V* *to*

ら た た り わ れ ら た た り
は た さ ん わ れ ら は た さ

17 *mp*

い く せ い そ う ひ と は か わ れ ど

21

き よ う い く の し め い ひ と す じ

25 *mf* *D.C.*

さ く ぼ く に り そ う か か げ て わ れ ら っ ど え り

29 *Coda* *V* *mf* *f* *molto rit.*

ん 道 中 道 中 は え あ れ 道 中

北海道中学校長会歌

作詞 清水 弘
作曲 上元 芳男

働哭の いくさを越えて
新しき 時代を拓く
大いなる 理念に燃えて
吾ら 起ちたり(くり返し)

幾星霜 人は変れど
教育の 使命一筋
朔北に 理想かかげて
吾ら 集えり

未来への 希望豊けく
頼母しき 若き世代の
幸多き み代のあけぼの
吾ら 果たさん(くり返し)

道中 道中
栄あれ 道中